
マジシャンの日常

蒼玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジシャンの日常

【Nコード】

N5764H

【作者名】

蒼玉

【あらすじ】

巻で話題の新人マジシャン・黒羽快斗の日常

00：オリキャラ設定（前書き）

カップリングは新蘭、平和、白青で快斗の相手はオリキャラです。
苦手な方は気をつけてください。

00：オリキャラ設定

名前・工藤真くわじまこと

芸名・鈴花スズハナ

年齢・20代後半

家族構成

- ・父：工藤優作
- ・母：工藤有希子
- ・弟：工藤新一

性格・天真爛漫でマイペース。思い立ったら一直線で、集中力がすごい。場を掴むのが上手い。

その他

- ・工藤新一の姉だが余りその存在は知られていない。
- ・快斗の彼女。彼が高校生の頃から付き合っている。付き合いきっかけは真の逆ナンからだが大抵は逆だと思われている。
- ・海外で有名な女優。芸歴10年以上。五年前から日本で活躍を始めた。
- ・化粧をしないと未成年に見えるほど童顔。そのことをかなり気にしている。
- ・ワンピースを好んで良く着る。
- ・ホームズの大ファン。弟にも刷り込みをしたほど。
- ・空手を習っていたので腕っぷしが強い。蘭の憧れの選手。
- ・紅茶が好き。利き茶ができるほど詳しい。
- ・お酒はたしなむ程度。ワイン好き。酔うとキス魔になる。

- ・ 英語とフランス語はペラペラ。今はドイツ語に挑戦している。
- ・ 快斗が怪盗KIDだったことは教えてもらっていない。だがなんとなく気がついていて話してくれないことを寂しく思っている。
- ・ 新一がコナンだったことは知っている。ただし蘭は知らないので彼女の前では知らないふりをしている。

ある日の工藤邸

暑い暑い夏のある日。工藤邸にはいつもの如く、快斗が遊びにきていた。

「うー、あちい。やっぱり夏だもんなあ」

「なに当たり前のことを言ってるやがる。つーか、なんでここにいるリビングでバタバタとシャツを扇いでいると、後ろから声が掛かった。この家に住んでいる新一だ。本庁まで行ったのか、暑い中スーッ姿だ。」

「おー、新一じゃん。おっひさ」

快斗は呑気に片腕を上げてあいさつをした。唯でさえ暑さでイライラしていたのに、快斗の態度で新一は限界を越えようとしていた。それに気づき快斗はちょくつとヤバいかなと考える。

「オメー、地方公演だっただろ？売れっ子マジシャンさん？」

「嫌味かよ、新一。公演は大盛況のうちに昨日終了しましたっ。てか、テレビ見てないの？」

「ああ、昨日は本庁にカンズメだった」

「え？つてことは今帰りつーこと？」

「ああ」

うわー、と快斗は声を出さずにいった。新一を改めて見てみれば、スーツはいつもよりヨレヨレで目の下にはうつすら隈が来ている。ドサツとリビングにあるソファアに座りこむと、快斗が気の毒そうな視線を寄越した。快斗がポンポンと新一の肩を叩いてやると、ぼ

んやりとした目がこちらを向いた。

「で?」

「え、何さ」

「だからなんでオメーがいんだよ」

「あーそれはさ」

快斗が理由を口にしようとする、バンという音と共に一人の女性が入ってきた。

「快くんっ、お待たせ。あれ、新ちゃん帰ってたの?」

「あ、姉さん?」

「もう、だめじゃない。ずーっと家に帰らないで!連絡ぐらい寄越しなさいよ。蘭ちゃんが心配してたわよ。蘭ちゃんを泣かすことがあったら許さないんだから!」

彼女の突然の登場にも驚かず、新一は暗い顔を向けた。快斗がいるのは、姉さんとデートでもすんのかと鈍る頭で考える。つか、眠い。マジで眠。頭にキンキン響く。

「マコちゃん、もう準備いいの?」

「うん。快くん、どうかな?変じゃない?」

「全然オツケー。そのワンピース、ピアスと良くあってるし」

「エへへ、ありがとう」

快斗の褒め言葉に真は嬉しそうにはにかんだ。快斗はいつの間にか新一の隣から真の側に移動している。相変わらず素早い身のこなしだ。ぼーとした頭で考える。

「じゃあ行ってくるね。新ちゃん、快くん。お土産買ってくるね」

「いつてらっしやーい」

「おー、つてえ？」

快斗も一緒に行くんじゃないのか？と、新一は疑問を投げ掛けた。しかし真はナチュラルに無視をして行ってしまった。

「・・・快斗」

「んー？」

新一はどつと疲れたように快斗に声をかけた。快斗は真の後ろ姿を上機嫌で見送って新一に目をやる。

「結局、オメーは何しに来やがった」

「それはね〜」

快斗はマジシャン特有の手入れの行き届いた指先を新一の目の前につきだした。

「マコちゃんが蘭ちゃんとデートする為の洋服を選んで欲しいって言うからさ〜」

「それだけ、なのか？」

「うん。それだけ」

快斗はにへらつと笑いながら言った。

曰くあのワンピースはマコちゃんの可愛さを引き出してたよね〜とか、あのピアスは実は俺が買ってあげたやつなんだよね〜とか。

確かコイツは地方公演で、姉さんと会うのは一週間ぶりだったはず。しかも姉さんと付き合っていて。なのに姉さんは快斗を置いて他の奴と出かける。

いいのか、それで。

思わず快とを凝視してしまった。

「いいんだよー、新一。ちょっとだけでも会えて話せて笑顔が見れたんだから。俺はそれだけで嬉しいよ〜。俺好みの服は着せられたし〜」

「そんなもんか？」

「そんなもんだって」

二ヘラつと笑った快斗に新一は肩を竦めたのだった。

「あ、寝るなら自分の部屋でねえ」

「おう」

そんな、マジシャンと一緒にある日の出来事。

酔わなきゃやってられない

日も暮れ、満点の星が夜空を彩るころ。

日頃から付き合いのある青少年達が集まって飲み会が始まった。

やっと堂々と飲める年頃になったのだからと大量に買い込まれた酒の数々。工藤邸のリビングには多種多様の酒瓶が乗っていた。

それから数時間後。遠慮なくカバガバと空けた結果、すでに十数本は空になっていた。それに比例して彼らに酔も回っていく。

「ちよつと、蘭。これは結構いけるわよ」

「あ、ホントに。黒羽くん、これおいし〜」

園子のオススメで口にしたツマミに蘭も目を丸くする。

自分も普段から料理をするが、なかなかツマミのレパートリーを増やすのは難しく。蘭はこれ幸いとこのレシピを作った快斗に作り方を聞いた。

「良かった、口にあつたみたいで。それは特に赤にあうんだ〜」

「あ〜わかるよ、それ」

褒められて悪い気はしないのか、蘭にレシピを書いて渡す。さらに相性のいい組み合わせを言えば、ワインの香りを楽しみながら真が頷いた。

「マコちゃんも気に入ってくれたんだ〜。俺、チヨ〜嬉しい」

快斗はギュッと真に抱き付く。真はワイングラスを机に乗せて、抱

き付いてきた快斗の髪をわしゃわしゃとかき回した。それが嬉しいのか快斗はにへ、と眉を下げた。そこには今をときめく若手マジシヤンの威厳は全くなかった。その光景に園子はやってられないとグラスを空にし、蘭は苦笑しながら園子に新たな酒を次いだ。

「やってらんないわ。こうなったらとことん飲んでやるんだから！」

園子は直ぐにグラスを空にすると新しい酒瓶に目をつける。それはアルコール度数が結構高い日本酒だった。しかし誰もその事に突っ込まない。なんだかんだで皆酔いが回ってきているのだ。

「蘭、俺にも」

ソファーにふんぞり返って、新一が空になったグラスをつきだした。そんな態度に蘭は呆れて新一の顔を覗き込む。酒に酔った新一は、その扱いが気に入らないのかムツとした顔になった。目の前ではラブラブオーラを出す快斗と姉がいる。

酔って理性が無いからか彼らの様子が望ましくなくなってしまふ。すると真は見せつけるかのように、チュツと快斗の頬にキスをした。ポツと赤くなつた快斗に満足そうに笑い、新一に勝ち誇つた顔を向ける。それによって、新一はとうとう我慢の限界がきてしまった。

「蘭」

新一が真面目な顔をして言いつても蘭の態度は変わらなかった。

「はいはい。次は何にするの？」

「じゃあ、これ」

そう言つて新一は蘭を己の体に引き寄せた。ぐらついて新一の胸に顔を押し付ける格好になつてしまふ。酔いだけではない顔の赤さを実感してしまつた。

そんな蘭の態度を気にすることなく新一は蘭の髪に鼻を埋めた。甘い香りがする。長い髪をいじりながら、新一は蘭の顔を覗きこんだ。潤んだ瞳と赤く染まる頬に誘われて。

新一はそつとキスを落とした。驚きに固まる蘭に満足そうに微笑んだ。

と、そこへ頭に来た園子のスリッパを直撃されて。新一はパタリと気を失つたのだった。

真のキスの余韻からさめた快斗の目に写つた光景。それはテンションが上がつた蘭。そんな蘭に引つ張られている何時もと逆の園子。そして潰れた工藤姉弟の姿だった。

「俺にどーしろと」

快斗はこの時ほど酔えない体質を恨んだことはなかつたそうなの。

ダンゴムシ

ある晴れた日。

快斗はとある道を歩いていて。見上げる空は澄みきっていて、なんだかウキウキした気分になってくる。思わず笑みがこぼれ、軽くステップを踏みながら角を曲がった。

その時、何気無く予感がして視線を下に向ける。すると見知った顔を見つけた。何故か道路にしゃがみこんで、生け垣の隙間を覗き込んでいる。あの娘は確か、新一とたまに一緒にいる子供達の内の一人だったはずだ。

「あれ？歩美ちゃんじゃなか。どうしたの？」

「あ、快斗お兄ーさん」

快斗が声をかけると、歩美は地面に向けていた顔を上げた。

実は彼女のことは、以前まで一方的に知っている存在だった。それは怪盗KIDとして活躍？していた時の記憶の片隅にある。

それから3年間は色々あつて。そんな中でプロデビューして。真と再会し新一と友情？を深めあい。

色々なことが片付いて一段落した頃。新一を通して少年探偵団とも知り合っただった。その時快斗は、既にマジシャンとして顔が売れてきた頃で。物怖じしない彼らと、有名人特有の気難しさとは無縁の快斗は直ぐに仲良くなったのだった。

そして今では、たまにお目付け役として彼らと遊びに行ったりする仲だ。

気さくに話かける快斗に、歩美は今まで見ていたものを元気よく言った。

「あのね、これを見つけたんだ！」

「どれどれ？」

快斗も歩美の横にしゃがみこんで生け垣の所を覗きこむ。そこは落ち葉が地面を覆いつくしていた。

「ダンゴムシ！」

「そう、何だか久しぶりに見つけちゃったから」

快斗の弾んだ声に歩美はニコツと笑った。

「元太くんは食べ物しか興味ないし、光彦くんは最近忙しそうだし。哀ちゃんはあるまりこつというの興味ないでしょう？」

「そうかもな」

「でも歩美はこつというの見つけると嬉しくなっちゃって、誰かに教えたくなるんだ」

快斗はそう言う歩美の言葉に深く頷いた。

「その気持ち、スッゲーよく分かるよ！やっぱ、久しぶりにこーゆーのを見ると嬉しくなるし、誰かに教えたくたるよな」

「快斗お兄ーさんも？」

思わず歩美は声を上げた。

何故なら歩美が快斗に声をかける前、自分の母親にそのことを教えてあげたらあっさりとかわされてしまったからだ。快斗と思わぬところで意見があってビックリする。

「あ、歩美ちゃんも驚いてる！酷いなあ」

「こ、ごめんなさーい」

「ま、いいケド。新一なんかさ、こつというの見つけたって教えてあ

げると、呆れた視線をよこすんだぜ。マコちゃんは俺のこと、子供扱いですよさ」

快斗はそう言って笑った。

「でも、見つけた時の嬉しさとかって、誰かと共有したいって思うじゃん？こーいうのって、宝探してみたいで楽しいしね」

「うん、歩美もそう思うな」

「だよなー。お、小枝発見！」

「あ、歩美にもちょうだい」

「はいっ。やっぱりダンゴムシを見つけたらこれは外せないだろ」

「うん。なんでかやっちゃうもん」

そう言って二人はふふつと笑いあった。

そんな二人の目線の先には、幾つもの丸くなったダンゴムシが転がっていた。直ぐに元に戻るダンゴムシをつつき丸くさせることに、しばしば二人は熱中して。

そんな二人を見つけてしまった光彦は声を掛けようかどうしようか、暫くの間迷っていたのであった。

イライラ対処法

新一が二階から降りてくると、何故か快斗がリビングにいた。眠気でぼんやりとした頭で考える。

何故、快斗が俺の家にいるのだろうか。

「んー、んまい」

快斗は新一に背を向けて何かを食べていた。その呑気な空気が新一の坎にさわる。新一は、何故か怒りが沸々と沸き上がってくるのを感じた。とりあえず感情の赴くままに足をふり下ろす。

「わっ、あぶなっ」

「チツ。避けんじゃねえ」

「んな無茶苦茶な！」

ふり下ろした足は快斗に軽々と避けられた。

さすがは元怪盗KIDである。引退してから数年ほどたっていたが、快斗の体はまだまだ衰えていないようだ。

あ、なんかまたムカついてきた。

新一のよからぬ気配を感じたのか、快斗はどつどつと宥めるように手を振った。しかし口にスプーンをくわえている格好ではいまいきまっではない。

「テメー、何でいやがる。鍵はかけたはずだ」

「やだなー、新一。俺を誰だと思ってるんだ？」

「不法侵入者だろ。安心しろ、今警察呼んでやっから」

新一が半ば本気で呼ぼうと携帯を取り出す。こちらは快斗を目の前にしてかなりイライラしているのだ。

そこに容赦の2文字が無いことに気づき、快斗はパチンという音とともに取り出した携帯を消した。

さすがは腐ってもマジシャン。新一の手のひらで消えた携帯は、いつの間にか快斗の手の中にあつた。その手が器用に携帯をもてあそぶ。もう片方の手には、先ほどから食べていたらしいかき氷がしっかり確保されていた。

「そう怒るなよ、新一。俺とお前の仲じゃんか」

「確かにそうだが、急にいると腹が立つ」

「いやいや、否定しようぜ。新ちゃん」

「新ちゃん言うな、バ快斗」

イライラとソファーに座れば、目の前にカキ氷が置かれた。

「もう、そんな言い方はないでしょ。新一」

そこにいたのは蘭だった。

確かに蘭には合鍵を渡してあつたので、家の中にいるのはおかしくないのだが。

しかし恋人である新一の家に、いくら友人だからといって男を招き入れるのはどうかと思う。たとえこの男に恋人がいて、その恋人が新一の姉であつたとしても。恋する男は得てして嫉妬深いものであり、新一も例に漏れずにそうだった。

呆れた蘭の視線を避けるようにすれば、ニヤニヤ笑う快斗が目に入った。それが面白くなってため息をつく。

何を言っても無駄と諦め、おとなしくかき氷を手にとった。

「で？本当に何のようだよ、快斗」

「ああ、黒羽くんに用があったのは、私」

新一が改めて問えば、蘭からの思わぬ返事が来た。

「ほら、今度やるマジックショー。お母さんが一緒に行ってみたいって言ってたから」

「そ、蘭ちゃんに頼まれたチケットを渡しにね」

そして二人の話は新一を無視してどんどん進んでいく。かなり面白くない状況だった。

「もう、何イライラしてんのよ」

「ウルセー」

「蘭ちゃん。新一は嫉妬してんだよ」

快斗は二人の様子を面白そうに見ながらそう言った。

快斗に凶星を指されて新一はソッポを向く。蘭は快斗の言葉の意味に気がつき、顔を赤くして身動きした。

「うーん、二人共、初々しいねえ」

そんな二人を知りめに、快斗はぱくりとかき氷を口に入れた。

新一がちらりと見ると、横に蘭が居ることを急に意識して。さっきまでのイライラが、心地良いドキドキに変わっているのに気付くのだった。

寝れない夜に

今の時刻は午前1時15分。

恋人の本日最後の仕事である、深夜ラジオの生放送が丁度始まる時間だった。

シヨ一の興奮がまだ体に残っているらしい。目がさえてしまい、快斗はなかなか寝付けなかった。部屋から聞こえてくる、つけっぱなしのラジオから聞こえて来る音に耳をすませた。そこからは鈴花として活躍中の、恋人の声が聞き取れる。

窓の外から月明かりが差し込み、誘われるように屋根へと登った。辺りは月光に照らされ、かなり明るかった。

こんな日は下らないことを考えてしまいそうだった。一度考え出すと止まることは全然なく。あのときの記憶が簡単に甦ってくる。自分が白い衣装を脱いでから既に2年。初めてそれを纏ったのは既に5年も前の出来事だった。簡単に消え去ることのないその記憶は、快斗に妙な安心感をもたらした。

「なんだか妙に縁があるんだよなあ」

「それは貴方が月の加護にあるからよ」

「あ、紅子？」

独り言に思わぬ返事が返ってきて、快斗は驚いた声を上げた。そんな快斗をちらりと一瞥し、紅子はいつの間にか隣に座りこむ。

「ごきげんよう、黒羽くん。いい月夜ね」

「オメーも大概、突拍子もねーやつだな」

「あら、貴方には言われたくないわよ？」

「どーという意味だったの」

呆れた快斗の視線を気にすることなく、紅子はふわりと黒髪をなびかせる。自らを魔女だと言うこの女を、快斗は苦手に思っていた。

「で？こんな異国の辺境になんでいんだよ」

「あら、私わたくしがこちらにいるのはおかしくて？」

「そーゆーんじゃないよ」

「ふふつ。別にいいではなくて？こんなに綺麗な月夜なんですよ」

「ま、それもそーだな。」

そう言っただけ快斗はこれ以上何も言わずに、コロリと寝返りをうつた。そんな態度に紅子は何かを言いたそうな素振りを見せた。しかし結局何も言わずに月へと視線を移した。

こんな月夜に不粋な言葉は似合わない。そのことは二人共、強く感じていた。

ふと、ラジオから聞こえてくる声に思わず笑みが零れる。目の前に真の顔が見えた気がした。そのことに気分が良くなって、普段なら決して言わない言葉を発する。

「まあ、魔女と月夜を眺めるってのも乙なもんじゃねーの？」

「まあ、嬉しいことを」

「俺が眠くなるまで付き合っつてよ」

目を合わさずに言う快斗に、紅子はズルイと感じてしまう。彼にここまで影響を与えたのは、ここにはいないあの女の存在。

それでも、彼を諦めるなんてことはできなくて、こうして会いにきてしまう。自分らしくない行動だと思うけれど。今夜はそんな気持ちも素直に認められそうな夜だから。

紅子はここに来たことを嬉しく思ったのだった。

今日は月の綺麗な夜。

眠れないマジシャンは遠い異国で恋人の声を聞きながら、その地で
会った魔女とのんびり月を眺めたのだった。

ある日のお茶会事情

休日のある一日。

哀は借りた本を返すため、工藤邸を訪ねていた。勝手知ったる他人の家とはいえ、一応インターホンを鳴らす。そこから聞こえてきたのは何故か快斗の声だった。

「はいはい、どちら様ですか？ 新一は警視庁ですよ」

その呑気な声に頭痛を感じつつも哀は返事を返した。その声に呆れが混じるのは仕方無いだろう。

「私よ、黒羽くん。工藤くんの本を返しにきたの」

「ああ。新一がなんかそんなこと言ってたよな。ま、上がって、上がって」

「ええ。お邪魔させてもらうわ」

ここは新一の家であり、快斗が何故いるのかという突っ込みはしてはいけないのだろう。しかも彼はついこの間まで、海外でツアーショーをしていたということも、きつと愚問であるに違いない。

まあ、いつものことではあるので、哀は何も言わずに玄関へと回った。

「哀ちゃん、一週間ぶりだね。変わりない？」

「ええ、おかげ様で」

哀は用事を済ませてから、一応リビングに顔を出す。

そこで快斗は床に座り込んで、何か細かな作業に没頭していたようだった。彼の周りには細かな部品が散らばり、手にはドライバーが

握られていた。

「あなたのシヨールはどうだったの？」

「ばつちり、完璧！」

ニシシと笑う彼に、哀は愚問だったと肩を竦めた。

今更、海外での舞台でびびってしまうほどの可愛いげのある性格で無いことは、哀も身に染みて知っていた。

「そんなところに立ってないで座りなよ。丁度おやつがあるからさ」

「いいわね、ただこうかしら」

「紅茶でいい？」

「まかせるわ」

快斗の言葉に釣られ、哀は言われるがままに椅子へと腰を降ろした。快斗はパチンという音と共に今まで弄っていたものを消し、キッチンへと消える。それこそ勝手知ったるなんとやらでお茶の準備を始めた。

準備をしている音を聞きつつ、哀は何となく手持ちぶさたになって、新たに借りる本の背表紙を指でなぞる。それは小学生が読むのには不自然な外国の専門書だ。

こうやって時間を過ごすことも哀はわりかし気に入っていた。3年前までは考えられない時間の過ごし方だと今でこそ思う。でも、こういう変化はくすぐったくて、なんだかとても胸の奥が温かった。

「ああ、次はそれが必要なんだ？」

不意に掛けられた声に、哀は驚くことはなく肯定する。

カチャリと陶器の触れる音がして、紅茶のいい匂いが鼻を掠めた。

目の前には綺麗に盛り付けられたアップルパイがある。バナナを添

えたそれはとても美味しそうだった。

「結構、自信作なんだよ。マコちゃんオススメの紅茶にもよくあうんだ」

「それは楽しみね」

哀はそう言って紅茶から手を付ける。一口飲んだあとの顔を見れば、その出来は間違えることはなく。

快斗の自信作も文句無しに美味しかった。

こうして始まった午後のお茶会は、新一がいない時に極々希に起こるのだった。

チョコアイスから繋がる縁

きらびやかに飾り付けられた、とあるホテル会場の一つ。

国内の某社長主催のパーティーに呼ばれ、快斗はこの場所にやって来ていた。

会場に入ると快斗自身に視線が集まる。辺りは著名人ばかり。快斗は既にうんざりしてきていた。しかしそれ以外の人々にも掴まってしまう。それらを軽くあしらいつつも、こういう所が嫌いな快斗は既に抜け出したいと半ば本気で考えていた。

本音を言えば、快斗は元々ここに来る必要はなかった。しかし父の恩人であり、快斗も一方ならぬ支援を受けている人からの頼みであったので、どうしても断ることは出来なかった。その人が困り果てていたのを放っておくことは、快斗にとってどんなことがあってもあり得ないことだった。

「快斗君、無理を言って悪かったね。君はあまりこういうことは嫌いなのに」

「いえ、気にしないでください」

申し訳なさそうに言われてしまえば、快斗それ以外に言う言葉は無い。

笑顔の裏に本音を隠し、快斗は手にしたチョコアイスを口にした。

流石は一流ホテルの品物である。かなり美味しかった。

先程までのピリピリした雰囲気は影を潜め、幸せ一杯というオーラを出す快斗。

そんな彼は先程とは別の意味で目立っていた。

「おいしーな、これ」

「気に入ってくれたようで何よりだよ。君が認めた物にはハズレが

ないってこの業界では有名だからね。ここもじきに人気店になりそうだな」

「そんな、大袈裟な！ただ俺は思ったことを口にはしているだけですよ？」

「まあ、そういうことにしておこうか。それと、これは今日のお詫びとしてくれないかい？」

「えー。もう、しょうがないなあ。今回も騙されてあげる」
「すまないねえ」

そうやって快斗の頭をポンポンと叩くと、その人は他の人に呼ばれて行ってしまった。もう子供じゃないんだけどなあ、と思いながらも快斗は忙しそうなの背中を見送った。

何だかんだでチヨコアイスは流されて、快斗の機嫌は回復してきていた。

もう一口、それを口に運ぶ。ふと、何かに引つ掛かった。前にも一度、何かの時に食べたことがあるような？

考え込みつつも手は無意識に動いていたようで。気が付いたら手にしたチヨコアイスは綺麗に完食されていた。

「あゝ、ボーイさん。それ貰えます？」

「はい、どうぞ。炭酸水です。お皿もお下げしますか？」
「ええ、お願いしますね」

快斗はそう言ってチヨコアイスの乗った皿を差し出す。ボーイがそれを受け取った時、快斗は内緒話をするように何かを囁いた。

ボーイが快斗の方をはつと振り返る。さっきまでのことが幻だったかのように、快斗は既に他の人と話し込んでいた。暫く快斗を見つめてから、そのボーイは自分の仕事に戻っていったのだった。

ボーイのその様子をばれないように観察して、話していた人をパチ

ンと消した。そう、彼が話していたと勘違いしていた人はただの人形だったのである。

快斗は会場の壁に寄りかかり先程のボーイに思考を戻した。まだ快斗が駆け出しの頃。とある施設でマジックショーをした後、子供たちと食べたチヨコアイス。それはその施設にいた内の一人が作ったものだった。その時の味とそっくりだった今のアイス。

夢が近づいて良かったな、と快斗は記憶の中の子供に笑いかけたのだった。

青空デート

つき抜けるような快晴の青い空。眼下には綺麗な緑の草はら。そこから見える景色は障害物が何もなく、地平線までもがくつきりと見えた。

うまい具合に風を捕まえて、快斗はゆつくりとパラグライダーを旋回させた。

右を向くと快斗が操っているものとは違う色のパラグライダーが一機。そこに目を向けるとこっちに気が付いたのか操っている人影が手を降った。その人影に手を振り替えして、快斗はしばしば空中散歩を楽しんだのだった。

「ん〜、気持ち良かったねえ」

「本当に！誘ってくれて、ありがとつ。マコちゃん」

「えへへ、楽しんでくれたなら良かった」

あれから着地地点に無事に到着して。

先にその場所に着いていた真と共に快斗は、少し遅目のお昼ご飯を食べることにしたのだった。適当な場所に腰を降ろす。着地地点の目印にしていた木の影は眩しい光をうまい具合に遮ってくれた。

わくわくしている真を可愛く思いつつも、快斗はお得意のマジックで二人の間にお弁当箱を現せる。真がフタを開けると、お弁当の定番具材がぎっしりと詰まっていた。

「快くん。これ全部作ったの？」

「お袋が作った奴の方が多いつて。何か張り切ってたし」

「へえー。でも手作りは凄いや！私も母さんも全然出来ないから」

「ま、食べよ？」

「うんつ。いただきますーす」

快斗に促されて真は厚焼き玉子に手を伸ばす。快斗は久しぶりに見たタコさんウィンナーに手を着けた。

「おいしく！快くん、すっごく美味しいよ」

「ほんとっ、良かった。因みにそれは俺が作ったんだぜ。一発で当てるなんて、さすがマコちゃん」

「快くんが作ったの？すごく美味しい！蘭ちゃんも美味しいけど、快くんも美味しい！」

「それはそれは。お褒めに授かり至極光栄」

快斗は真の真っ直ぐな称賛に少し照れ臭かった。必要以上におどけて見せると、ツボにはいったのか真は爆笑してしまう。そのキラキラした笑顔を快斗は眩しいそうに見つめた。

真はこれでも快斗より4つ程年上だったがそんな風には全く見えない。高校生と言われても通じそうな無邪気な雰囲気だ。

「この唐揚げは小夜さん（*快斗の母の名前）が作ったやつだ」

「せいか〜い！」

「んー。さすがは専業主婦！家庭の味」

「おにぎりの具はどれにする？うめ、こんぶにワカメご飯があるよ」

「じゃあ、こんぶ」

「はいっ」

快斗が海苔を巻いたおにぎりを真に渡す。真は嬉しそうにそれにかぶりついた。快斗もそれに習いワカメご飯のおにぎりを口に入れる。パリッとした海苔の下から、塩味がいいアクセントとなったご飯。

口一杯に詰め込むと微かにワカメの風味が広がった。

もぐもぐと口を動かす、なかなかのどきに快斗も笑みが溢れる。真もかなり満足そうだった。

なかなか会うことが出来ない恋人と一緒に出掛ける今日この日に。
つき抜けるような空の下、緑の絨毯に腰を降ろしてのデートはまだ
始まったばかり。
快斗と真は二人っきりの時間をのんびり楽しむのだった。

徹夜明け

快斗は自分の部屋でパソコンに向かっていた。一昨日、急にあるマジシャンについてのエッセイを3本書く羽目になったからだ。一日一本ずつ書くのは慣れない快斗には大変で。高校生以来、久しぶりにここまで寝ないで作業したのだった。

カタカタカタ。カタカタカタ。

光がぼんやりと照らす部屋の中で、小さな音が一定の感覚で響いている。静かな部屋の中でその音と機械の低い音が混じりあっていた。

カタカタカタ。カチツ。カタカタカタ。カチツ。

一定の速度で続いていた音が止まった。

時刻は丁度、午前4時。仄かに空が色ずき始めていた。

うーん、と伸びをして快斗は足元に置いておいたコーラのペットボトルに手を伸ばした。徹夜明けのぼんやりとした頭に強い炭酸の刺激が走る。少しスッキリした頭で、パソコンをスクロールしながら今まで打っていた文章を読み返した。

大体の所はこれで終わりだ。後は印刷して向こうに送ればOKである。

これで暫くは差し迫った仕事はないはずである。海外から帰ってきてそうそうこの仕事が入ったため、先方ももう依頼を入れないだろう。

快斗はガシガシと頭を掻いてまだ消していないパソコンの画面に目を向ける。しかし頭は全く別のことを考え始めていた。

それは新しいマジックのネタだったり、朝ごはんのおかずのことだったり、この前閃いた暗号についてだったり。またそこから転じて

アニメニズムと一神教の比較から古事記の信憑性、さらにはよく飛ぶ紙飛行機の作り方までが一瞬で脳裏を駆け巡った。快斗の頭は見事なまでの空回り。徹夜明けで少しおかしくなっているようだった。ブルル、ブルル。

そんな快斗をこちらに引き戻すかのように、バイブに設定した携帯がなった。手を伸ばしてチカチカ光っている携帯を取り上げる。あて名を見た所で、一瞬にして今まで考えていたことが総て頭の隅に追いやられた。

それは恋人からのメール。快斗が中国での長期滞在でのマジックシヨールから帰って来たのと入れ違いに、仕事でアメリカに行ってしまったから連絡を取るのには久しぶりだった。少し緊張気味にメールを開く。そこには快斗を労う言葉が書いてあった。その内容を見る快斗は知らず知らずのうちに笑みが零れていた。

暫く何回かそのメールを読み返してから、手早くボタンを押して返信を書く。一度考えてから一言追加して、送信ボタンを押した。

快斗は暫く携帯を見てから、バフォンとベッドに飛び乗った。ぼんやりと天井を眺めてから枕に顔を埋めて、抱きしめた枕をそのままにゴロゴロと布団の上を転がる。気分がハイになっているのか全く眠くならなかった。

快斗はちらつと携帯を見る。するとタイミングよく着信音が鳴った。この音は快斗の恋人専用のものである。

快斗は飛び上がるように携帯を引っ付かんで通話ボタンを押す。そこから聴こえてきた久しぶりの恋人の声に、快斗は弾んだ声で話しかける。

ふと窓を見ると眩しいばかりの太陽と顔を会わせたのだった。

暇だから

ガチャリとリビングの扉を開けた。そこで目に入った光景を見た新一は、何も見なかったことにしてしまいたかった。しかし現実はそのいう訳でもいかず。ため息を一つ溢して中に入ったのだった。

「あ、新一。遅かったねえ。今回の講義、どうだった？」

そこには人ん家の床に寝っ転がり、くつろいでいるバカが一人。そんなバカには目もくれず、新一はソファーに腰を降ろした。

「ちよつとー、無視なんて酷くない？」

未だに床でゴロゴロしている奴が何かを言っていたが、新一は構わずにテレビをつけた。

暫くして。

「新一、酷いわ。いままでのことは遊びだったのね！」

「ら、蘭?!」

急に聞こえてきた声に負けて、新一は後ろを振り返ってしまふ。そんな新一の目に映ったのはニヤニヤ笑う快斗の顔だった。ご丁寧に気配まで完璧に蘭になっている。

「こっの、バ快斗が！」

「きゃー。新ちゃん、暴力反た〜い」

新一が足を繰り出すと快斗はさつと避ける。ついでに真の声までだして、新一をからかうことも忘れなかった。

ドタドタドタツ。

無駄に広いリビングを駆け回り、新一の体力が限界になったことでこの決着がついた。

未だに肩で息を吐き出している新一を知り目に、快斗はもう何事もなかったような顔をしていた。

あれだけやったのにバテないとは、快斗の奴は化け物に違いないと新一は考える。それを聞いたら快斗は笑ってこついうだろう。必要最小限の動きしかしていないからだよ、と。

「で、快斗。何でここにいるんだ」

なんだかデジャブを感じつつも新一はさっさと本題に入る。どうせろくなことは無いだろうが。

「な、温泉いかね？」

「は？」

「マコちゃんと蘭ちゃんも誘ってさ」

常々ね突拍子も無い奴だと思っていたが、ここまでだったとは。思わず快斗の顔を凝視する新一だったが、そこにあったのはヘラヘラした締まりの無い快斗の顔だけだった。

「何、考えてやがる」

「やだな、人聞きの悪い。丁度、この前のスポンサーがくれた旅券があつてさ。期限があと少しなんだよ」

「ほう？」

「疑りぶけー奴だな。ほれ、これ」

快斗は無駄に華麗な手さばきで何もなかった手のひらに、一枚のチケットを出現させた。いつ見ても鮮やかなそのテクニクに新一はため息をもう一つ。技術の無駄遣いかい、という言葉が頭に浮かぶ。

「な、いーだろ？もう二人には許可はもらってるんだ。後は新一だけ。警察にも手回ししたから大丈夫だし」

「って、俺に逃げ道はねーじゃんか」

「ま、そうとも言うね」

そう言っ得意そうに笑う快斗。

俺の予定は無視かよ、というのは今更か。蘭が行くならまあいいか、と思ってしまう辺り、新一も大概わかりやすい性格だった。

「じゃ、いついくんだ？」

「明日」

「へえ、明日。て、大学は？」

「思い立ったが吉日ってやつ？」つか、明日から三連休だし」

「そっか」

新一が納得した所で、快斗はパチンと指を鳴らす。するとどこからか煙が流れてきて新一の視界を覆う。

時間にして数十秒後。

リビングにあるソファの上には、ちよこんと4人分の荷造りされた旅行カバンが乗っていたのだった。

旅先でのお約束（前書き）

なんちゃって事件もの。話が強引に展開するので注意。3話で完結。

旅先でのお約束

ここは古き良き街並みが残るとある温泉宿。硫黄の香りが漂い、白い湯気が幾つも立ち上っていた。

快斗たち4人がレンタカーから降り立つと、木造建築の情緒溢れる宿がどーんと正面に建っていた。老舗旅館の貫禄がこれでもかと主張している。

思った以上に豪華な所で快斗と蘭は驚き、思った以上に良い所で新一と真は嬉しそうだった。ここら辺の反応の差で金銭感覚の違いが伺える。

「あゝ、予約していた黒羽ですけど」

代表で快斗がチェックインをしている間、残りの三人はロビーでお茶を飲む。真は大騒ぎにならないように少し変装していた。

この名物だという蒸したおやきに新一が手を伸ばすと、後ろから伸びてきた手に盗られた。

「ん、うまい」

「快斗！それ、俺のだろ」

「新一だけずるーい。俺、ここのおやき、好物だから」

新一の蹴りをさっと避けて、快斗は真の隣に腰かける。そしていつものじゃれあいを始めた二人に、蘭は少し恥ずかしそうだ。真は全く気にしないで美味しそうにおやきを食べている。

暫くして、ゴクゴクとお茶を飲み干している快斗に蘭は話を振った。

「でも快斗くん、本当にいいの？かなり良いところみたいけど」

「本当だよ。ここ、高いんだよ？」

「ああ、大丈夫だつて。確認したらスポンサーの系列店らしいから。このおやきも差し入れて良くなるし」

ニコツと笑う快斗を知り目に、新一はようやくおやきを口にした。気に入ったのか少し雰囲気は柔らかくなる。

「黒羽様でいらっしやいますよね。話は伺っております。ようこそいらっしやいました」

その時、快斗たちのテーブルに人影が近づいてきてそう言った。4人が顔を向けると初老の男が軽く一礼する。快斗がこのオーナーだと3人に紹介した。

「お部屋の準備ができましたがいかがいたしましょう」

「どうする？部屋に入る？」

「私はちよつと休憩したいな、快くん」

「じゃあ案内してもらえますか」

「はい、こちらにどうぞ。荷物は届いておりますよ」

オーナーはそう言うと4人を伴って案内をする。部屋は離れが用意されていたのか、渡り廊下を暫く歩く。

「素敵なお部屋ですね」

「本当に。あ、おやきも美味しかったしね」

「ありがとうございます、お嬢様方。あちらがご用意させていただきましたお部屋でございます」

本格的な日本庭園の向こう側にちらりと見えてきた瓦屋根を指してオーナーは言った。女性二人に旅館を誉められ少し照れているようだ。

快斗と新一は廊下に飾られている掛け軸などを観賞しながら付いていく。妙なことに詳しい快斗の解説は、新一の知識欲を充分満たしていた。

「こちらがお部屋でございます。菊の間です」

「うわあゝ。広いですね」

「ええ。しかしおかしいですね。鍵が開いている」

オーナーはそう言ってドアを開けた。嫌な予感がして快斗と新一が待ったをかける。しかし遅かったようだ。

二人が部屋に入ると腰を抜かしたオーナーが目に入った。彼の目の前には血だらけになった女が畳の上に倒れていた。

「結局、名探偵と事件は切っても切れない縁ってやつ？」

その部屋に快斗の場違いな声が転がったのだった。

馴れてる人々

快斗の企画で温泉街へやってきた新一、蘭、真の4人組。やはりというか新一の行くところで殺人？事件が起こったのだった。ここに快斗も巻き込まれたのも何かの運命か。

地元警察を呼ぶ中、快斗は庭の一角に白い粉の入った袋を見つけていた。ご丁寧にも足跡まで残っている。

「まさか事件に巻き込まれるなんて、二人共災難だよな」

「まあ、私達は良くも悪くもなれちゃってるし」

「そうそう。新一と遠出して何か起こらないほうが不自然だもん」

女性陣に言いたい放題言われている新一。その彼は警察と一緒に事件現場を見て回っていた。

あっけらかんと言いながら話をする二人の手には、ここで人気の蒸しパンを手にしていた。なんでも密かに人気らしい。快斗の手にも当然のようにそれは乗っていた。快斗はさりげなくさっきの場所から蘭と真を引き離す。内容はいつの間にかに新一が事件に巻き込まれたかという話になる。その内容に付き添いでいる刑事は、さすがは工藤新一、日本警察の救世主、と訳の分からない尊敬の念を向けていた。

あちら、大変なことになったなあと呑気に構える快斗。するとこの事件の担当の一人が、新一に小声で被害者は命をとり止めたらしいと報告したのが目に入った。

「で、新一はなんか分かった？」

「ああ、この事件で俺が解らなかつたのは2つだけ。それも今、鑑識さんに確認をとってもらってる」

新一はあっさりとそう言い、今まで一緒に現場にいた刑事に声をかける。何事かを囁くと刑事は携帯を取り出し話し始めた。暇そうになった新一に快斗は庭で見つけたあれを教える。キラリと新一の目が光った。それを間近で見ると快斗はニヤリと口を歪める。快斗は新一が集中する時の瞳の輝きが好きだった。

「けーじさん。俺達の荷物、知りませんか？」

事情聴取など一通りのことを終えた後、快斗は今思い出したかのようにならぬ。

蘭と真は先に済ませて宿の温泉に入っている。オーナーは参考人としてまだここにいたが、気をきかせた女将が浴衣を一式用意してくれていた。快斗達の泊まるはずだった部屋で事件が起きたので、当然前以て運ばれていたカバンもそこにあるはずである。

「はい？カバンなんてありませんでしたよ」

「やっぱり？」

「つーか今更過ぎるだろ、快斗。オメーも俺らの後に入ってきてんだし」

「ま、そーなんだけど。一応、確認？」

快斗が新一にそう言うと、一人の従業員が慌てたようにこちらにやってきた。

「あの、黒羽様の荷物が菖蒲の間にあったのですが」

「わお。ナイスタイミング！」

快斗が目丸くすると、新一が何かにかがいたのは同時だった。オーナーは従業員の言葉に啞然としたが、直ぐに立ち直り快斗にお詫びを入れた。

「とんだ間違いをして。申し訳ございません、黒羽様」

「ま、顔を上げてくださいよ。ところで俺らは何処に泊まればいいんでしょう」

「それでしたら今荷物があるという菖蒲の間でどうでしょう？庭を眺める景色は良いものですが」

「ええ、構いませんよ。な、新一」

快斗の確認する声は、集中している新一には聞こえていないらしい。そのことに肩を竦めると、承諾の意をオーナーに伝える。女性陣にも伝えるように頼むと、未だに帰ってこない名探偵を引きずって菖蒲の間に案内されるのだった。

花火大会の片隅で

そのまま菖蒲の間で一泊した快斗達。部屋はもちろん(?) 男女別々だった。ここで有名な地獄料理という温泉の蒸気を使った蒸し料理を堪能して。いい加減、ここには蒸し料理しか名物はないのだと気付いた4人だった。

次の日も綺麗な青空が広がる中、朝食を取りながら予定を確認する。新一の助言の下犯人の目星はほぼついており、裏付け調査が出るまで新たな進展は見込めない為自由行動の出来る1日。真の強い希望で岩盤浴を楽しみ。道端に何軒かある寂れたお土産屋を冷やかしつつも、ぶらぶらと温泉街を練り歩くのだった。

「お、このお面は良くできてんなあ」

と新一が感心してみせると快斗は食い気に走る。

「見ろよ、沢庵売ってるぜ」

「あ、おいしーよ。マコ姉」

蘭が快斗の指した沢庵を味見して言うと、店の奥を見ていた真があるものに気が付いてそれを手に取った。

「ププ。快くん、変なキーホルダーがあるよ」

「うわ、ブサカワイイってやつかな？」

そんな快斗の言葉に新一、蘭、真は爆笑して。一同はしこたまお土産を買ったのだった。

そして気付けば日も暮れて辺りが夕闇に包まれる頃。快斗がいつの間にか仲良くなった地元のおばちゃんに教えて貰い、今夜の花火大

会の穴場に到着していた。

「なあ、気付いてるか快斗」

「当然。あれってオーナーじゃん？」

人影に気付いた新一が快斗にこそつと囁いた。その人影の怪しい様子に、蘭達も不安そうにそれぞれの彼氏の顔を除き込む。快斗も囁き返しさりげなく3人を後ろに庇う体制に入った。

オーナーは4人にばれているとは気付かずに、電話で激しく口論をしているようだった。段々と声が大きくなる。

「っ貴様！女を殺せと言ったのはお前だろう？ヤクは完璧に隠したんだ。ばれるわけない」

その時、月明かりが急に快斗達を照らし出す。その光の中に立っている4人にオーナーは気が付いた。はっと息を呑む。総てを聴かれていたと知り、オーナーの顔が奇妙に歪んだ。

「君たちは……。そうか、すべて聞かれましたっただのか」

「だったらどうするのです？」

「わかっているだろう？死んでもらう」

そう言っ取り出した物は拳銃だった。物騒な代物に新一達の間には緊張が走る。

「まあまあ、そんな物は閉まってくださいよ」

「お前……。動くな！」

「だからって、従う訳ないでシヨ？」

快斗の呑気な合いの手によってオーナーに僅かなスキが出来る。そ

れを見逃す新一ではなかった。真に引つ張られて銃の軌道から逸れたのを心配で感じつつ、新一は一気に相手の懐に潜り込む。

それからはあつという間だった。新一の渾身の蹴りを受けのされた相手に、快斗はどこからか取り出したロープで縛る。あれって痛いんだよねえと思いつながら。

やれやれと肩を竦める新一の背後で丁度花火が始まる。その事に啞然としていた蘭の意識も戻ってきて。

警察が来る間、カップル達はお互いに寄り添いながら次々に挙がる花火を堪能したのだった。

花火大会の片隅で（後書き）

蛇足

- ・ 被害者：菊の間で刺されていた女性。
- ・ 犯人：旅館のオーナー
- ・ 犯行動機：麻薬の取引を見られたから。
- ・ 他：携帯で話していた相手とその組織は、後日名探偵の手によって発見される。

丸かじり

何時もの如く工藤邸に入り浸っていた快斗は、小腹がすいたために冷蔵庫を開けた。

するとそこには普段なら見当たらないものが入っただけ。ちょっとしたサプライズに、快斗は目を丸くしたのだった。

その頃の新一はリビングで本の虫となっていて。旅行中に発売された新刊を、いい機会だとばかりにじっくりと読んでいるのだった。先ほど快斗がダイニングに行く気配を感じてマグカップをつき出す辺り、今回はまあまあのお出まし。しかし新一の無言の主張を、快斗はきれいに無視して行ってしまった。突きだされたマグカップがところ無さげにあるのであった。

「ねー、新一。これ食べてもいい〜いい〜?」

「んー?」

「なーあー、いいの?」

ショーで鍛えた快斗の声は普通の大きさで話すだけでもよく響きわたる。ましてやりビングはすぐそこだ。その無駄によく通る声を張り上げると、普段なら近所迷惑だと言われるのだが。

しかし今は新一にとってあまり関心がないようで、無言のまま本のページをぺらりとめくった。丁度クライマックスなのだ。多少の事は気にならない。集中力は人一倍持っている新一だった。先ほどまで突き出していたマグカップは、いつの間にかテーブルの上に乗っている。

「ったく。な、これ食っていい?」

「んー、いい」

「うっしや!でも珍しいよな。新一の家にこれがあるなんてよ」

快斗は冷蔵庫からそれを取りだす。快斗が冷蔵庫の中で見つけたのは丸々とした大きなトマトだった。掴んでみるとほどよく冷えている。艶々としていても美味しそうだ。

そもそも冷蔵庫の中にこれが入っているのも珍しい。新一はめつたに新鮮な野菜などの、日持ちしないものを入れないからだ。

物臭な新一は食に執着がない。ゆえに基本的には冷蔵庫の中は空っぽで、快斗は気付いた時だけ中身を入れているのだ。

ひょいっと快斗がリビングを覗くと、新一は未だに本の中だった。その様子に気にする事なく新一に話しかける。そんな事を一々気遣うのは余り意味がない。こうまでしないと新一と話をすることはままならないからだ。その事を新一をよく知る人間は理解していた。

「ん、うまい。冷えてっから、余計にうまいな」

カブツとトマトにかぶり付き、快斗はもぐもぐと口を動かす。汁が滴り落ちそうになって、それにかぶりついたまま慌ててすすった。そうやって豪快にトマトを食べる快斗はやたらと様になっている。

快斗自身も手慣れたものだった。

丁度快斗が二個目のトマトに取りかかろうとした時、新一が本から視線を上げた。微妙な出来だったらしく消化不良を侵した顔だった。そこで目に入って来たのは、美味しそうにトマトを丸かじりしている快斗。新一もそれを見ていたら急に食べたくなくなってきて、快斗に向かつて2度目の無言の主張。

今度は無視される事なく、ほいっとトマトを投げ渡される。新一は満面の笑みで渡されたトマトに食らいついたのだった。

こうして。リビングで仲良くトマトを丸かじりしているという、人氣マジシャンと希代の名探偵のちよつと変な光景が出来上がったのだった。

実家にて

2ヶ月ぶりに江古田の地を踏んだ快斗は久々に実家に顔を出した。これまで日本各地の福祉施設を周ってきた。まだまだショーの予定は沢山ある。ここ、江古田でもいくつかのショーを行う予定だった。快斗は公演でここに来たときに必ず顔を出すようにしている。そうでもしないと母と中々会う機会がないからだった。

子育てから解放された母は、昔から好きだった旅行に頻繁に出掛けている。ほとんどの日々が何処か外国の地にいるからだ。しかし快斗が地元でマジックショーを行う時には、必ず家に帰ってきている。そして温かいご飯を用意しているのが常だった。

そして今回も快斗が実家へ帰ってくると、窓から電気の灯りが漏れていた。お隣さんはまだ暗いままだ。警部もお疲れ様と、快斗は心の中でこっそりと呟くのだった。

丁度午後8時30分。

辺りはもう真っ暗だ。外灯の明かりがポツポツと点いている。ここは住宅地なので似たような家が幾つも並んでいた。とはいえ長い間帰っていないなくても、自分の家を間違えることはまずなく。

快斗は明日のショーの打ち合わせをもう一度頭で確認しながら玄関に入る。すると懐かしいと感じる母の手料理の匂いがした。

「母さん。ただいまー」

「快斗じゃない。お帰りなさい」

リビングに顔を母の笑顔がそこにあった。テーブルには快斗の好物が並んでいる。なんだかくすぐったくなってしまい、快斗は二階へ駆け昇った。

「こらっ、ちゃんと手を洗いなさいー」

「ああ、わかってるって」

その言葉にため息を一つ吐いたが、息子の変わらない様子に笑みが零れる。階段からひよこつと顔だけ突き出した姿に早くするように手を振った。

「久々だなー。母さんの料理。多国籍になったのは旅行の影響？」

「そうかもね。この前は4度目の韓国だったの」

「だからキムチがやたらあるわけね」

快斗は豪快に食べながら母と話しを進める。そして好物の一つに手を伸ばした。母はその食べっぷりを嬉しそうに見つめる。

最近、とみに亡き夫に似てきた息子。その顔は丹精な男の顔になってきていた。母にとつてそれは誇らしくもあり、懐かしさもあり。思わず過去に思いを馳せてしまう。父の背を追いかけるように大きくなった快斗。今では世界で活躍するまでになった。

しかし嬉しそうに好物にかぶりつく姿はまだまだ子供のそれで。このギャップに負けたのかしらと、快斗の彼女の顔に話しかけた。

「快斗。これも食べなさいよ」

とある物だけ全く手を付けていないので、箸で摘まんで快斗の目の前に突き出す。すると先ほどまでバクバク食べていた快斗は嫌そうな顔をした。

「止めてくれよ、母さん。俺がそれ嫌いなの知ってんだろ」

「あら、昔よりましになったんだからいいじゃない。あの頃は姿を見ただけで叫んでいたのに」

「う。でも、嫌なものは嫌なんだって!」

ほらほらっと快斗の目の前に突き出されたそれを、心底嫌そうに睨み付ける。それでも近づけるとピタッと快斗の唇に当たった。そして。

パタリ、という音がして快斗は気絶する。

「いい加減、克服しなさいよね。魚嫌い」

そんな快斗に母は呆れたように言うのだった。

真夜中の屋上で

ザワザワと風が耳元で唸る。

快斗の癖毛がビルを吹き抜ける風と戯れるように揺れた。

ここは都心の中でも一番高いビルの屋上。閉まっていた鍵をちゃっ
ちやと開けて、快斗は一人でそこにきていた。

それなりに高さのあるこの場所は、地上の光は届かない。それにも
関わらず空の星が殆んど見えなかった。

ちらりと下を覗けば、地上の明かりがビーズをぶちまけたように広
がっている。その明かりの数だけドラマがあるとは、いいえて妙だ
った。

快斗がぼんやりと明かりに目を凝らしていると、開けっ放しにして
おいた扉から音が聞こえてきた。それはこちらに近づいてきている
ようで。カンカンと階段を駆け上がる高い音は、快斗の耳に不快に
響いた。しかし見知った気配を伴っているので、たいして気にしな
いようにする。

「おい！バ快斗。こんなもん寄越すとはどーいうことだ」

「お、名探偵。ギリギリセーフじゃん。さっすがあ」

「テメー。いいてーことは、それだけか。バカヤロー」

ぜえはあと肩で息をしつつ、新一は背を向けて夜景に魅入る快斗を
怒鳴りつけた。手にした携帯には、快斗が送りつけた難解な暗号の
メールが届いているはずである。

新一がそれに気が付いたのは、丁度大学の午前中の講義が終了した
時刻だった。一度メールの中身を見てしまえば解きたくなるのが人
情というもので。

結局、難解な暗号の誘惑に負けた新一は、残りの半日を使って解読
作業に取り掛かるのだった。

その内容から割り出した時刻は、後少しの時間しかなく。遅れたりすっぱかしたりしたなら、相手に暗号が解けなかったと思われるだろうとは事実であり。本来の負けず嫌いもあって、新一は急いで指定された場所にやって来たのであった。

「まま、そー怒るなつて。これやつから」

「そーはいくかよ」

「えー？暗号だつてなかなか楽しかったでしょー？」

「ったく。しゃーねーな」

新一の方を振り向いてへにやりと笑う快斗に脱力して、新一も一息つく。ほいっと投げ渡された缶コーヒーを片手で受け取りプルタブを開け、新一は快斗を見つめた。

「そんなに見つめるなよ、新一。照れちゃうじゃん」

「はっ。心にもねーこと言つてんじゃねーつての」

ふざけた快斗に新一のツツコミが入る。容赦ない言葉に快斗はニヤリと笑みを浮かべた。そんな快斗を横目に見つつ新一はコーヒーをすすする。

すると快斗は何を思ったのか、ひょいっとフェンスの上に飛び乗った。強い風が相変わらず吹いていたがバランスを崩すことなく乗っている。

まるで羽根が生えているようだ。それかそこだけ重力が全く無いような。

愉しげな様子でふらふらとフェンスの上を行ったり来たりしている快斗を見て、新一はぼんやりそう思う。夜の静寂を壊すことなくその舞台に立つ快斗の姿は、なかなか幻想的だった。

過去に月下の魔術師と異名をとっていた快斗の一面に、新一はふつと笑みを浮かべ、今は無き怪盗を思い出す。そんな不思議な一夜と

な
っ
た。

肉パーティー

いつもは閑散としている工藤邸。

そうではなくても数年ほど前まで、蔦は絡み、木々は鬱蒼と多い繁り、雑草で足の踏み場もないありさまで。近所の子供達からはお化け屋敷と噂されていた程だった。

しかしその現状を知った真の号令で業者の手が入り、さっぱりとさせて。それから暇を見ては手を入れた快斗と蘭の手によって、何とか屋敷にあつた外観を維持しているのだった。

しかし今日はいつもとは違う。屋敷と同じく無駄に広い庭で、少年探偵団を呼んでのバーベキューをしているからだ。

垣根の向こうから子供達の明るい笑い声が聞こえてくる。そこに男二人の大声が混じるのはご愛嬌。楽しげな雰囲気は明るい青空にびつたりだった。

「みーんな、楽しんでるねえ」

「まあなあ。こうして集まるのも久々らしいし」

乗り気になってこういったことをするからには、徹底的にやる主義である快斗。そんな彼の指示の下、下準備をして。その結果もたらされた子供達の輝く笑顔に、快斗は満足そうに笑うのだった。

「やっぱさ、やって正解だなっ」

「ああ。しかし色んな肉を集めたなあ」

新一はそつちの方に関心を示した。

快斗が用意した食材（主に肉）は、一般的なものから最近ではめつたに食べれないものまで多種多様だった。中には新一自身も食べたことのない物まで混じっていた。

「こーゆー時にコネは使わないとねっ。こーこで使わずいつ使う、なんてね」

「はは、ちげーねえ」

快斗の言葉に新一は頷き返す。蘭が子供達の皿に焼けた物を入れている。

「味はどうだ？お前ら」

「うんっ。とーっても美味しいよっ、快斗お兄さん」

「ほんとーたぜ。これで鰻重でもあればよう」

「ダメですよ、そんなこと言っちゃ。快斗お兄さんは魚が苦手なんですから」

元太と光彦の会話に出てきたアレにビクビクしつつも、快斗は笑顔を向ける。しかしダラダラと冷や汗をかいては、自慢のポークーフェイスも形無しかった。その様子に3人は笑い声をあげた。

「はいつ、哀ちゃんも博士もどうぞ？」

「あら、ありがとう」

「蘭くんもワシらを気にせず食べておくれ」

「ええ、頂いていますよ。ラム肉ってこんなに美味しいんですね」

蘭が二人に同意を求めると頷き返す。その言葉に新一も食べるのを再開した。

「よーし。もう一段肉がいくぞー！」

快斗の掛け声と共に肉が大量に投下される。ナスや玉ねぎ、ピーマンなどは、蘭の上手い配分であらかた食べ尽くされていた。

ジューっと言う音と共に、辺りに何とも言えない美味しそうな匂いが漂う。

焼けた肉に真っ先に気が付いたのは新一だった。

箸を伸ばして取ろうとすると、違う箸が伸びてきてスツと横取りされてしまう。その持ち主を見ると快斗だった。快斗は見せつけるかのように美味しそうに肉を頬張る。カチンときた新一は、快斗の次のターゲットに伸ばされた箸をかい潜って掠めとる。取られた快斗に向かってニヤリと視線を送った。

その時。

バチツと二人の間に火花がちった。

元々負けず嫌いの二人である。快斗は向きになって、新一の取った一枚の肉を狙う。そうして一枚の肉を賭けた取り合い始めた。

そして光景を傍目に、他のメンバーはのんびり肉を満喫するのだった。

図書館にて

どうしても必要な資料を求めて、新一は国立図書館にやって来た。

新一がここに来るのは大変珍しい。何故なら大抵の本は工藤邸の書齋に揃っているからだ。

しかし物事には、何に対しても限度と言うものがある。特に両親がロスに行ってしまった後は、偏った種類の本だけが増えてしまい。家には無い資料を求めて、新一はわざわざ遠出してここにやって来たのだった。

「あれ？快斗じゃねーか」

「おっ、新一じゃん。珍しい所で会うねえ」

目ぼしい資料を見つけると同時に見慣れた後ろ姿が目に入る。昨日もあつた快斗に声をかければ、すでに分かっていたのか驚くことなく振り向いた。

「なんだあ、その山は」

「ああ、これ？ちよつと次のマジックショーの時に必要な資料だけど？」

「そんなにあんのかよ」

「ああ。いつもはもう少しひかえめだぜ。今回はかじったことの無い分野でさあ。ちよつと調べるだけでもこの量だったんだよねえ」

「それにしたつて多すぎるだろ！限度を知りやがれ」

「そうか？」

快斗は呑気そうに頭を掻いた。そんな快斗の横にはカートがあり、中は様々なジャンルの本で三分の二以上が埋まっていた。その量に

も呆れるが、それを一気に片付けようとする心構えにも疑問が生じる。

新一の呆れた目線に気が付き、快斗は片眉をピクリと動かした。

「何だよ、その目は。言いたいことでもあんのか？」

「・・・オメー、いくらなんでもおかしいだろ。それ」

「えー、そう？新一も知ってたんだろ。やる気になった時の俺の集中力」

そう言って更に一言。

「フーか、これ、全部読み終わってるし。後は向こうの言葉を調べれば、シヨ一の準備はほとんど終了だぜ？」

「はあっ？」

こともなげにそう言う快斗に新一はもう一度、カートの中身を見る。

流星はIQ400あると言われた、化け物じみた頭脳を持つ男である。集中力にムラがあり、普段はバカばかりしている快斗だが、こゝとマジックに関しては妥協を許さない。その強い信念だけは尊敬してやってもいいかもしれない???

そうつらつら考えてしまうのも、目の前の光景を受け入れたく無いという深層心理からきていた。

だって、あの快斗だぞ！

高校生にもなつてスカートめくりをし、時代錯誤な格好をして夜を駆け回っていたアイツだぞ。

頭が少しどころじゃなくヤバい方向にいつても、仕方がないじゃないか。

そうやってぐるぐるする頭でいる新一の考えを正確に理解して、快斗はじと目で新一を見る。

「つーか、新一に言われるのだけは我慢できねーんだけど」

「何っ？」

「その手に持っているヤツ」

快斗にそう指摘されて、新一は自分の持っている物を見る。新一からしてみればなんの変てつもない資料だが。

「んなマニアックな専門書を数冊持っているだけで同類だと思っけどね」

そう言われた新一の資料には、ラテン語で書かれた古めかしい文字が、ミミズののたくったような字で書かれていた。

「つーか、そんなもん何に使っただって感じ？」

快斗はそう言って、新一の肩をポンッと叩いたのだった。

夕食までのとある時間

ジュツ。パチパチパチ。

工藤邸の無駄に大きく設備の整ったキッチンから、油の跳ねる音が聞こえてくる。

新一は今まで寝ていたソファから、むくりと起き上がった。

気配を探ると蘭が何かを作っているようだ。そのことに思い当たると、新一の機嫌は知らず知らずに上昇していった。

新一の体に掛かっていたタオルケットがパサリと落ちる。蘭が新一の為にしてくれるその心遣いが、ふんわりと新一自身を温かくするのは嫌ではなかった。

「なーに、デレツとしてんの？新一。タオルケットなんか握ってさ」

「快斗？なんでここに！」

新一は慌ててタオルケットを手放す。快斗はご丁寧に気配を消して、向かい側のソファから観察していたらしい。ニヤニヤ笑いながら新一に指摘してきた。

まずいやつに見られてしまったと新一は思う。おもいきりからかわれるはずだ。

そう考える新一の予想は正しかった。快斗はここぞとばかりに新一をいじり倒す。新一は自身が考えていた乙女チック？な思考を、洗いざらい吐き出されてしまった。

部屋に快斗の爆笑が響きわたる。目尻に涙さえ浮かんでいた。

「ぶっ、あはは！何それ。あー、おかしっ」

「黙れ、快斗！」

「やーだよっ。しっかし新一がねえ。だ、ダメだ！笑いが止まらねえ」

「コノヤロー！」

いつまでも笑っている快斗に新一は右足を降り下ろした。それを軽く体をひねって避けるが、新一の顔を見ては爆笑する。
もう一度新一が足を振り上げた時、蘭がリビングに入ってきた。

「黒羽くん、ご飯できたよ？あれ、新一。起きたの？」

「お、旨そう匂いっ。俺、もう腹ぺこでさ〜」

「ら、蘭！」

突然の登場に新一は慌てて足を下ろした。もし気が付くのが遅れていたら、蘭に直撃だったはずだ。胸をなで下ろす新一の目に、ニヤニヤした快斗が入ってきた。やっぱり後でしめると、決意を新たになんかして。

「もう、何やってんのよ。二人とも」

「違うぞ蘭。快斗が最初にだな」

「いやいや、新一が面白くてつい」

「ついつて。もうしょうがないなあ」

蘭はバツの悪そうな新一と、悪びれた様子のない快斗に苦笑きみだ。服の上から着けているエプロンの前で腕を組む。子供っぽい2人に早く席に着くように言った。

ふと新一は蘭の着けているエプロンを見る。なんだかそれに見覚えがあった。たしか新一が小学生の時に作ったつきり放っておいたエプロンだ。この間快斗が見つけてきて、ぽいっとキッチンに置いておいたものだったはずだ。

「今日は、なーにかなって」

「唐揚げだよ。リクエスト通りにね」

「わお、楽しみ〜」

そんな会話を交わしつつダイニングに向かう二人に何だか面白くない新一。大体、この前からーんか仲良くなってるんだよな、と心の中で呟いた。

しかし振り返った蘭の真っ直ぐな瞳を見て、そこに新一を思っ色を確認して。まあいいか、と思っのだった。

大体、快斗はなんだかんだ言っても姉に首っただけだしな、と思っ出した。

夕食の時。タオルケットを掛けてくれたのが快斗だと分かり、新一が味噌汁を嘔き出すまで後少し。快斗はその時を想像してまたしても吹き出すのだった。

紅子の招待状

快斗は楽屋でくつろいだ状態で、自分の出番を待っていた。時間が近付いて来ることに緊張が身体に行き渡る。

快斗はこの本番前になると出てくる緊張感が好きだった。懐かしさも多少入っているかもしれない。まあ、どちらにしてもマジシャン・黒羽快斗を造り出す上で大切な要素の一つである。

快斗は何気無く鏡を除き込んだ。虫の知らせというものかもしれない。ふつと鏡が波立った気がしたのだ。

ま、そんなわけはないよなと視線を外したのと同時に、トントンと扉を叩く音がした。

ちらりと壁に掛けられた時計を見る。お偉いさんが来るには少々遅い時間だった。

既に準備は整っている。

後は小さな仕掛けを3、4つ仕込むだけだ。

「どござ」

相手が誰だか分かっていたので、振り向きもしないで声をかける。ガチャリと扉の開く音がして、美しい女性がしずしずと入ってきた。紅子だ。真っ赤なドレスに身を包みこみ、艶っぽい黒髪をアップにした姿は、まさに絶世の美女というものだった。彼女の持つ、独特なミステリアスな雰囲気、更にその魅力を引き立てている。楽屋をついっと見回して快斗の姿を見つけると、紅子は妖艶に微笑んだ。

「ご機嫌よう、黒羽くん。お久しぶりね」

「おー、紅子か。あの時以来だな」

「ええ、本当に。黒羽くんは日本に戻って来たのね」

「まあなー。どーしても、ことわれねーからよー」
「あら」

相変わらず背を向けたまま軽口を叩く快斗に、紅子はひっそりと微笑む。

あの時の夜、素直に自分の気持ちを認めてから、紅子の中で何かが変わった気がしたのだ。彼を思う気持ちもあったけれど、心の中はいつになく穏やかだった。

「で、なんかようか？珍しいじゃんか。紅子がこんな個人のパーティーでやるシヨールにくるなんてよ」

「ふふっ。ご挨拶ね、黒羽くん」

「・・・だつてよー」

準備が終わったのかくると紅子に向き直り、快斗は口を濁らす。何だかいつにもまして、愉しくて仕方ないという雰囲気。紅子はあまり見ないものだ。

「このパーティーはついででしょ。本当は貴方に会いに来たのよ」
「へーへー。で要件をどうぞ？」

腕にすがりついてきた紅子をサラリと交わし快斗は先を促す。そんな快斗につれないわね、というように紅子は片眉を上げる。

しかしこれもいつものやり取りだった。

紅子は引きずることなく、本来の用件を口にし出した。

「今月の第4日曜日、丁度同窓会、というかクラス会があるのよ。それのお誘いに」

「へえ、もうそんな時期か？」

「クラス全員が二十歳になったからでは無いかしら。それにかこつ

けて沢山お酒を飲もうという訳よね」

そう言っつて肩を竦める紅子に、快斗は軽く承諾の意を示す。丁度うまい具合にツアーのオフの日だったからだ。その返事に紅子は当然という顔で頷いた。

「で、何で紅子が教えてくれたんだ？」

「それは、私の屋敷わたくしが会場だからですわ」

「まじで？ チャレンジャーだな、おい」

オホホと高笑いする紅子に、快斗のツッコミがボソリと入ったのだ。
った。

紅子の招待状（後書き）

4部ほど、江古田組とのやり取りが続きます。快斗達の力関係をお楽しみください。

変わらないこと

久しぶりに高校時代のクラスメイト達に会う為に、青子は恵子と連れだってそこを訪れていた。見上げた屋敷は紅子が住んでいるのを納得させるような雰囲気だ。門を潜り抜けて敷地内に入る。扉に近付くとキギツと重々しい音がして左右に扉が開いた。

「ようこそ。お二人とも、お久しぶりね」

「紅子ちゃん！こんにちは。素敵なお家ね」

「こんにちは。ホント。何だか悪いな、気をつかわせちゃった？」

無邪気な青子と申し訳なさそうな恵子に、紅子はふわりと柔らかい笑みを返す。それを見て相変わらず美人さんだなあとは、青子の気持ちで。変わったなあというのが恵子の感想だった。

「ふふつ。気を使わなくてもよくてよ。私わたくしの実家なのだから」

「へえー、おつきいねえ」

青子の素直な反応に恵子も頷き返す。紅子はそんな二人に中へ入るように促した。

「殆んどの方々は既に到着いたしましたよ」

「わあっ、本当？楽しみだなあ」

「紅子ちゃんが幹事をやると、不思議と皆集まるもんねえ」

「オホホ。当然ですわ」

そう言って笑った紅子が会場へと案内する。そこは大学の講義室程の広さで、立食パーティーが出来るようになっていた。

中に居るのは気心の知れた仲間達。久しぶりに会った友人達を見つ

けて、青子達はそれぞれに話し込むのだった。
一通り話し終わった青子はキョロキョロ辺りを見回す。そういえば
肝心なのを一人見ていない気がしたのだ。

「Ledy's and Gentleman .
It's a show time! !」

突然どこからともなく聞こえてきた声。その主について思い当たり、
会場内から歓声が上がった。

その声に答えるように、一筋のスポットライトが中央を走る。光の
筋に導かれた視線の先には、タキシードを着こなした男が一人立っ
ていた。

すつと一礼をする。

その仕草だけで会場内を自分のものにすると、彼は小規模なマジッ
クショーを始めたのだった。キラキラと輝く魔法は、高校時代に行
われていたように周囲の人々を巻き込み、魅了して。大盛況のうち
に黒羽快斗は会場入りをしたのだった。

「快斗っ、久しぶりだね。いつこっちに帰って来たの?」

「あ? 昨日だよ。青子」

男子達にもみくちやにされた後、一息ついた快斗に青子は声をかけ
る。あの頃と変わらぬ雰囲気、青子はどこかほっとしていた。そん
な青子の気持ちを知ってか知らずか、ニシシと笑う快斗。何だか懐
かしく感じられて青子は少し泣きそうになった。

「それにしてもよー、青子」

「な、なによ」

急に真面目な顔をした快斗に青子はたじろぐ。セットされた髪の毛

を落ち着かなそうにいじった。

「オメー、未だにお子様体型ってのはどうよ？」

「へ？」

啞然とする青子に追い討ちをかけるように、ペラリとドレスの裾を捲る。

「しかも毛糸パンツかよ。時期、先取りしすぎじゃね？もー少し色っぺえパンツ、はげよなー」

「な、な、な、何ですって〜！こっのバ快斗が！」

「ウツセ、アホ子」

頭に血が上りかあつと頬が熱くなる。思わずグーをつき出せばひよいつとかわされて、いつの間にか追いかけっ子が始まって。

二人のドタバタっぷりに、クラスメイト達は変わらないなあと笑い合うのだった。

変わったこと

快斗と青子のじゃれあい有一段落ついた頃。

新たな人間がまた一人このパーティー会場に入ってきた。紅子はいち早くその事に気付いたが、そちらをちらつと一瞥しただけだった。その人物はつかつかと快斗の方へと歩いてくる。ただならぬ雰囲気、その彼を見て自然と道は開かれていった。

そんな周囲のことは気にしていないのか、快斗は悪友と漫才じみたどつきあいをしている。

突然ガシツと肩を掴まれて、快斗は無理矢理方向転換をさせられた。

「黒羽くん！君って奴は。よくのこのこと現れたものだね」

「は、白馬？」

「君は本当に何を考えているんだ。どれだけ僕を馬鹿にすれば気がすむんだ」

「何言ってるんだ？」

いぶかしげな表情の快斗を気にすることなく、白馬はガクガクと揺すぶる。

「怪盗KIDのこともそうだ。あの時も、何故黙って行ってしまったんだ！どうせ、高校を中退したのもそのせいだろう。マジックの修行なんて言い訳なんだ！！」

「わりいけど、離してくんねえ？」

興奮した白馬を冷めた視線で制して、快斗は妙に静かに言った。何を言われても我慢するつもりだったが、あの時の決断やマジックを侮辱する言葉に少し怒りが漏れてしまったらしい。

パーティー会場にピリピリした空気が漂い始めた。

白馬はそれに気がつき己の失言を理解する。先程までの雰囲気とは違って変わって消沈した口調で言った。

「すまない。こういうことを言いたかった訳じゃなくて」
「ま、いいけどよ」

快斗は肩を竦めて流してみせる。二人の間に緩やかな空気が流れ、中断していたパーティーが再開される。近くではらはらしていた青子もほっとした雰囲気だ。

「快斗も大人になったのねえ」
「ちげーよ。ただ急に辞めたのは悪いと思ってっからよ」
「ふーん。そうなんだ？」

バツの悪そうな快斗を青子が覗き込む。先程まで話していた快斗の悪友は紅子の方へ行ってしまった。

「それに、白馬くんも」
「僕ですか？」

不思議そうな白馬に青子は飛びつきりの笑顔を向ける。

「やっぱり、変わったなああって。前までだったらそんな必死な白馬くん、見られなかったもん」
「あー、確かにな」

青子の言葉に快斗も同意を示す。

「アホ子にしては良いこと言っじゃん」
「もっつ、快斗のイジワル！」

そう言っただ膨れた青子のほつぺたを、快斗の整った指がプニプニとつつく。そんな二人の様子に白馬は苦笑した。

「黒羽くん。それはレディに対する態度ではないよ」

「そうよ、そうよ。バ快斗なんだから」

「ウツセツ」

2対1では勝ち目は薄いと感じ快斗は降参のポーズをとる。

そこでふとこの二人は案外お似合いなんじゃないかと思いがたつた。ある種の確信をもって快斗はふむ、と頷いた。

「何考えてるの？快斗」

「いや、明るい未来設計をな」

「はあっ？」

「何を言っているんです？黒羽くん」

「オメーら二人も、俺様の計画には外せない要因だから、な」

そう言っただ彼は綺麗に笑った。

そんな快斗達を見て白馬はストンと肩の重しが取れた気がした。

変わらない二人の関係と変わりそうな僕らの関係。

まったく、彼を追いかけるのはコレだから辞められないのだ、と白馬はこっそり呟くのだった。

後半戦、実況放送中

パーティーも後半に差し掛かり、紅子の計らいでワインが振る舞われた。それを皮切りに各自、思い思いに持参してきた酒瓶を取り出す。流石にクラス全員が飲む分をお金を渡すとはいえ、紅子一人で用意させる訳にはいかなかったのだろう。一人最低10本は開けられる量があった。

「くう〜っ。うめえ。流石は白馬の用意したやつだぜ」

「気に入って頂けたようですねによりだよ」

快斗の称賛に白馬は優雅にワインを口に運びながら言った。早くも酔いが回った青子は、恵子と共に会場内を練り歩き回り、あつた人々の背中をバシバシ叩いては笑っている。

快斗が持っていた空になったグラスに、後ろから瓶が突き出され並々と注がれた。後ろを振り返ると既にできあがっている女子のグループだった。

「お酌してくれんの〜。サンキュッ」

「えへへ。私達が直々に来てあげたのよ〜。感謝しなさいっ」

「ははあ〜」

酔いで頭が回らないのだろう。顔を真っ赤にしてふんぞり返っている彼女達に、快斗は平伏してみせた。快斗のその姿を目敏く見つけ、青子はきやたきやたと手を叩いて笑った。

「紅子ちゃん。快斗が頭下げてるよ。あ、いい飲みっぷり！」

「本当ね。あれはかなり良いお酒なんだけれど」

フフッと笑う紅子の周りには相変わらず男の群。お酌をしている男はとても幸せそうだ。他の男もつまみやなんやと手に持って恭しく捧げている。

そこだけ異様な雰囲気をかもし出していたが、酔っぱらいどもは気にすることはなかった。

「うつつ、どーせ僕なんか」

「どうしたんだよ、白馬？」

「黒羽くんのいけず〜！シクシクシク」

「泣き上戸かよ」

暫く目を放していた内に増えていたウイスキーの空瓶に気が付き、快斗は疲れたように呟く。先程までいた女の子達全員からお酌をしてもらった後、彼女達は違うグループと楽しくお酒を飲み交わしていた。

「マティーニは？マティーニ無いの？」

「これじゃない、青子」

泣き付いてくる白馬を鬱陶しく思いながらも、快斗はマイペースに他のメンバーと酒を飲み交わしている。その横で青子と恵子が、いつの間にかテーブルの上に乗っていたカクテルを指差す。クラスの一人在バーでアルバイトをしているとして用意されたそれは、飲みやすい物も揃っているのか半分以上空になっていた。

「黒羽くん。うつつ」

「はいはい」

未だに泣きじゃくる白馬の頭を撫でてやり、また注がれた酒を煽る。そんな快斗の周りには、彼のペースに付いていけなくなった屍が幾

つも転がっている。顔を返ることなく、カバガバと酒を空けていく快斗に紅子が近付いてきた。あれだけいた取り巻き達は紅子によって総て潰されている。その様子に快斗はひくりと顔をひきつらせる。

「まだまだ飲むぞ〜！」

「「オー!!!」」

そんな快斗を知り目に、酔っぱらいどもの宴は続く。

結局。あの子の騒ぎで生き残ったのは快斗ただ一人だった。

「俺も酔って忘れてかったぜ」

後日、若干遠い目をして快斗はそう言ったのだった。

高揚感

自分の部屋の一角を占領して、快斗はせっせと手作業をしていた。周りには色紙が散らばっている。その中からまた一枚、快斗は色紙を手にとった。

マジシャン特有の綺麗な指が器用に動き、花の造花を作りだす。作り終えたその出来映えをチェックして、快斗は空いている小瓶に挿した。小さな差し花の完成である。

それは既に何十本もの花束となつて、自身の部屋を埋め尽くしていた。

暫くしてその作業がようやく終わったようだった。ゆうに3時間程同じ姿勢でいたので少々身体が痛かった。

首をコキリと曲げてから、うーんと体を伸ばす。反動をつけて立ち上がると、窓から漏れる西陽が顔に当たった。その顔はほっと一息ついたような表情だった。

「やっと終わった」

快斗の声が静かな部屋に響く。時計はこの部屋には置いていないが、何となく6時過ぎだと分かった。

もう一度伸びをして、ぐるりと周りを見回す。ベッドや机の上、更には棚、床に至るまで快斗の造った造花ばかりが置いてあった。

色とりどりのそれらは夕焼け色に染まっている。その風景に快斗は満足そうに頷いた。

「うっし、今日のノルマは終了つと。明日はツアー最後のステージかあ。早いもんだなあ」

快斗は感慨深そうにそう言う。

そして造花を踏まないように、ひよひよいつと爪先立ちでベランダへと出た。壁に取り付けてある鳩小屋で鳩達がクルルと喉を鳴らした。

「オメーらもお疲れさん。今日はゆっくり休んで明日も最高のショーにしようぜ」

快斗の言うことが解るのか鳩達はクルル、クルルと控え目に鳴く。軽くバタバタと羽を動かすと快斗は柔らかく笑った。

それからベランダから見ることの出来る景色に目を移す。町全体がオレンジに染まり、なかなかの眺めだった。

そこに丁度携帯電話がなり響く。快斗はポンスと携帯電話を手に出すと話し始めた。

誰も見ていなくてもマジックのように取り出したのは、半ば快斗の癖だった。電話の相手は次のステージのスポンサーで、内容は激励の言葉だった。相手に合わすように相づちを打つ。そしてそれと同時に進行してヒョイツと手すりに乗り上がり、そこへ座り込む。足の裏を風が吹き抜けて気持ち良さそうに顔を緩ませた。

それから暫くたって話も一段落した所で電話を切る。スポンサーから聞いたファンの子供達からの感想を思い出し、快斗はくすぐったそうに笑った。

ショーの最中に見せてくれた輝く笑顔と意外な展開による驚き。子供達が喜んでくれたのを改めて感じ、何だか興奮してきたのが分かった。

ポンスという音と共に一組のランプを取り出し、シャッフルする。流れるような洗練された動きは、その気持ちを表しているかのよう躍動的だ。

足をぶらぶらと揺らしながら、明日も最高のステージになると快斗は一人確信していた。

お昼寝日和

久しぶりのデート日和。

快斗は真と植物園を訪れていた。

二人はのんびりと園内を散策する。こんなに穏やかな気分でののは、近々なかなか無かったもので。お互いに顔を見合わせてふわりと笑いあったのだった。

暫くして快斗は気持ち良さそうな木陰を見つけた。真に目配せをし、ふらふらと引き寄せられるようにそこへ行く。何となく快斗の行動がわかっていた真は、なにも言わずに快斗の後に付いていった。ぱふつと音を出して芝生の上に二人は座り込む。ガラス越しに降り注ぐ太陽の光は良い具合に木々の間から差し込んでいる。ん、と気持ち良さそうに快斗は伸びをした。

「なんか、久々にのんびりした気がするな」

「うん、私も。最近海外ロケばかりだったもん」

「俺もやつと福祉関係のツアーが終わったしな」

お互いに忙しすぎて直接会う機会に恵まれず、今日まで来ていたの。でこうして傍にいただけでも嬉しかった。

二人共、次の日からピッチリと予定が詰まっている。世界中を飛び回る快斗と人気女優の真。なかなか休みが重ならないのが現実で。今回は快斗のスケジュール管理をしている寺井と、真のマネージャーが気を利かせてくれたおかげで、こうやってのんびりした時間を持てたのだった。

気持ち良さそうに目を閉じている真を幸せそうに見つめる。そして快斗はそつと真の手に自分の手を重ね合わせた。

重なった瞬間に真と目があって、真はことりと快斗に寄りかかってきた。

快斗はそうして甘えてくる年上の恋人を更に愛しく感じる。全身で真の重みを感じながら、もう片方の手でサラリと髪の毛に触れた。ふわり、嬉しそうに笑った真につられて、快斗もにこり、と笑う。

「幸せ、だな」

「うん。そうだね、快くん」

ふわふわとした幸せな気持ちが気持ちを弛めて、真はふあと欠伸びが出てしまった。少し恥ずかしそうに身動きする真をギュッと引き寄せる。良い匂いのする髪に顔を埋めて、快斗はとびっきりの声を出す。

「俺に寄りかかって、寝ちゃってもいいよ？ずっと抱きしめてあげる」

「か、快くん。でも、退屈じゃな・・・ふあ」

話している途中で、また一つ欠伸びが出てしまい真はバツの悪そうに快斗を見上げた。意図せず上目遣いになった真と目があって、快斗はさらりともう一度髪に触る。

表情は先程と変わらないが、内心可愛くて可愛くて仕方なかった。自分の心配をしてくれる真に、快斗は殊更優しい声で告げた。

「俺なら大丈夫だよ？マコちゃんがこんなに近くにいるんだから、さ」

「でも・・・。久々に会えたのに」

「心配しなくても、まだ時間はいっぱいあるよ？」

「ん・・・だけど」

段々と重くなる瞼に真はまだ快斗と話したいと感じていた。ずるい、と思う。

年下の彼をめいっばい甘やかせてあげたかったのに。これじゃあ立場が逆になっている。

「おやすみ、マコちゃん」

甘い囁きと共におでこに温かい感触がしたのを最後に、真は心地よい暗闇に意識が沈んでいくのを感じたのだった。

迷子の女の子

見渡す限り、人、人、人。

快斗は今、ロンドンのど真ん中にやって来ていた。

何の為かといえ、勿論マジックショーを行う為で。快斗にとっては、過去に幾度も訪れたことのある場所で行う今回のショーも楽しみだった。

懐かしさも手伝って辺りをぐるっと見回していると、独りきりでベロンに座っている女の子を見つけた。快斗は何だか気になり、じつとその子を見つめる。

ここでは珍しいアジア系の美少女だ。不安そうに辺りを見渡すその子は、値の張った洋服を着こなしている。そのことから、かなりのお嬢様であることが伺えた。

『お嬢さん、こんなところでどうしたの？』

『！あ、えっとその。英語、わからない』

「ああ。ゴメン、ゴメン。中国語じゃないとだめかな」

英語で話しかけると、中国鈍りの発音でたどたどしく答えた。それで快斗は中国語に切り替える。一度、ツアーで行っていたから、そんなに話すことができた。

すると女の子は快斗にひしつとしがみついた。何事かと周囲からぶしつけな視線を受け、快斗はポリポリと頬を掻く。

周りには自分と全く違う姿の人々ばかりだったからだろう。女の子はホツとしたようだった。快斗が彼女の母国語を話した瞬間、ぼろぼろと出てきてしまった。

「あ、泣かないで？可愛い顔が台無しになっちゃう」

「うう〜」

「ほら、ここを見てっらん？」

快斗はすっと自分の手のひらを差し出して、其処に何も無い事をアピールする。女の子が注目したのを確認して、パチンと指を鳴らした。

すると真っ白なモルモットが一匹、快斗の手の中で丸まっていた。驚いて目を丸くする女の子の膝にそっとモルモットを置く。その重みと温かさに女の子は笑顔になった。

「で、どうしたんだ？」

「あ、あのねお母様とはぐれてしまったの」「そっか」

案の定の展開に快斗はため息を一つついた。不安そうに見上げる女の子に心配ないと頭を撫でてあげる。思いの外それが気に入ったのか、その子は気持ちよさそうにされるがまだ。

「ここではぐれたから待ってるの」

「そっ？でもさ、そっしてる間、退屈だろう？」

「・・・うん」

やっぱり女の子には笑顔が一番だよな、と快斗は思う。幸いまだまだショーが始まるまで時間があつた。

「お嬢さん、しばし私めにお付き合いただいだけませんか？」

急に快斗の気配が変わったことに、戸惑いつつも女の子は頷く。

そんな彼女の手をとり、チュツと音をたててキスを落とす。頬を染めたその顔に笑いかけると、優雅に一礼してみせた。

それから、ふわりと手を振るう。

そこから、ひらひらと花びらが出てきた。それをもう片方の片手で受け止めて、パチンと音をたてる。するとそこから一輪の花が出てきた。先程の花びらが花の形になったらしかった。

そして幻想的な空気から一変して、コミカルな雰囲気になり替わり、女の子はコロコロと笑った。

そうして。

魅力的なマジックショーは女の子の両親が表れるまで続いたのだった。感謝の意を示す彼らと別れると、快斗は人混みに紛れる。その顔は嬉しそうに緩んでいたらしかった。

靴下の穴

バリバリとお煎餅を食べている音が、工藤邸のリビングに響く。

音の主は快斗だった。新一にとって不本意であるが、快斗がここに
いることが当たり前になってきていた。

その彼はつい先日まで、海外でのシヨールに行っていたばかりである。
終わった後に直ぐに飛行機に乗ってきたらしい。大量のお土産を持
参して、朝一で工藤邸にやってきたが、そのお土産のほとんどが食
べ物だったのは何なのか。

これは新一、こっちはお隣さん。それは蘭ちゃんと園子ちゃん。少
年探偵団の皆にはその詰め合わせね、と寝ぼけまなこな新一の前で
荷物を出し。珍しくまだ家にいた真と共に、彼女の部屋へ行ったの
だった。

後に残ったのはきつちりと置かれたお土産と、快斗自身へのご褒美
の意が強いチョコレートばかりで。甘ったるい匂いは新一の寝不足
の頭にくるし、とてつもなく最悪だった。

大急ぎで換気をし、一応それらを冷蔵庫の中につっこんだ新一はた
め息を吐く。その中にはこれでもかと沢山のものが入っていて、そ
れもまた新一のため息の原因だった。

また恐ろしいことに、それは快斗によってあらかた食べ尽くされて
しまったらしい。新一が大学から帰ってくると、冷蔵庫の中にあっ
たチョコレートは総て無くなっていた。

いくら周りに配ったとしても、直ぐに消費できる量ではない筈なの
に。こいつの胃袋はどうなっていやがると、その理不尽さについさ
つき新一が蹴っ飛ばしたのだった。

それにも関わらず今度はしよっぱいものが食べなくなつたと言い、
お煎餅を取り出す快斗に呆れの度合いが大きくなり。

ほいっと渡されたお煎餅を口に銜えて読書に励む新一だった。

「あつ、新一。ちょっとダサイぞ、それ」

「あ？」

「靴下。穴、空いてる」

「あー」

寝っ転がってテレビを見ていた快斗が、麦茶に手を伸ばしながら言う。

珍しく読書中に返事を寄越した新一だったが、何を言われたのかは理解していないだろう。じつと穴から覗く新一の指を見てみると、視線を感じたのか足を組みかえる。それに合わせて、新一の靴下から覗く親指がぴくぴく動いた。

「ぷつ。何やってんだ？新一」

「あー？」

「親指なんか覗かせちゃって。刑事さんから呼び出し受けても知らねーぞ」

おかしそうちに、新一のはみ出た足の親指を眺めて快斗は言う。

あの工藤新一が格好つけて靴を脱いで部屋に入ってきた時に、穴の開いた靴下を履いていたら。関係者全員にそこから覗いた親指が目にはまるのである。シリアスな場面、特に謎解きの場面でそうなら、かなりシニールである。

その場面を想像してしまい、快斗は一拍おいて爆笑した。

あの、名探偵が。

究極の猫かぶりだ。

穴の開いた靴下を履きながら推理を披露する。

あのぴよこつと覗いた足の親指のまま、格好つけて「犯人はあなたです」とか言っちゃったりなんかして。

やばっ。めちゃくちゃやばっ！面白すぎるぜ、名探偵！

快斗の笑いは止まらない。

新一は読み終わったのか、ボタンと本を閉じる。
目に涙を溜めて爆笑している快斗を見て、何だか分からないがムカ
ついたので一発蹴っ飛ばしたのだった。

ぐだぐだな二人（前書き）

想像するとグロテスクな部分が一部にあります。大したことは無いですがご注意ください。

くだくだな二人

ひとり。

快斗はリビングの床に張り付いて、気持ち良さそうに目を閉じた。汚いとかそういうことは関係ない。頬に当たるヒンヤリした感触が何ともいえないのだ。この程よい冷たさの誘惑に勝つすべなど、快斗には持ち合わせていなかった。

「快斗、邪魔だ」

「うーっす」

警視庁の呼び出しから戻ってきた新一の声に反応して、コロリと床を移動する。

それを横目に新一は面倒くさそうにネクタイを弛めて、ソファーにでんつと腰掛けた。先程まで快斗の寝っ転がっていた場所に、自分の足を投げ出す。

その様子を快斗は薄目を開けて見ていた。

「新ちゃんも、お疲れさ〜ん」

「まあな。つーか、新ちゃん言うな。バ快斗のくせに」

「うー。気持ちいい〜」

「無視かよ、コイツ」

新一が足の先で快斗の頭をこずくと、快斗はしっかりと目を開けて新一を見上げた。しかし顔はまだ床に付いたままだ。

「なんだよ〜。新一」

「オメーが無視すつから」

「あのなー。俺は涼んで充電中なの。一昨日から沖縄と北海道に行

つて、その移動中も機上でショーをしたんだから」
「そりゃー、お疲れさん」

思ったよりもハードなスケジュールだったので、新一は取り敢えず足でこずくのはやめた。

快斗は分かればよろしい、とばかりに、またコロリと転がって冷たい場所に移動する。身体を思いっきり伸ばす姿は、とても人様には見せられない格好だ。

これを見たら百年の恋も覚めるような、ぐうたらな雰囲気だ。何となく自分の姉を思い出す。この光景を見たらなんて思っのだろうか。

「あー。マコちゃんなら、『快くん、可愛い〜』って言いながら俺にダイブしてくるよ。きつと」

「あー、成る程。つて何で分かった?!」

「顔に出てたぞ〜、新一」

姉の時には声まで変えて新一に言った快斗。急に声を掛けられてビツクリした新一は、胡散臭げに快斗を眺めたが、そのぐてつとした様子に、呆れた声が出てしまった。

「まー、いいじゃん。たまには、さ。新一も大変だっただろ、殺人現場」

「大変つつつか、まあ、そうだな。言われてみれば大変だったかも」
「なにがだよー」

一応、愚痴を聞いてくれるらしい。相変わらず寝っ転がってはいいたが、快斗の雰囲気は少し引き締まった。

「あー、いやさ。ひでー有り様だったから、被害者が。顔が潰されて、一週間放置されてたんだわ」

「うえー。災難だな」

「いくら死体を見慣れてても、今回はきつかった」

新一は話ながら現場の様子を思い出したのか顔をしかめた。快斗のほうもその様子を克明に思い描いたのか、眉間に皺をよせて足をバタバタさせた。

「やめよーぜ、こんな話」

「そうだな」

話を振ってきたのは快斗の方だったが、それは気にしない方がいいのだろう。

相変わらず床に張り付いている快斗の顔をちらりと一瞥し、新一は疲れたように目を閉じるのだった。

白ハトまみれ

ぽんっ、ぽんっ、ぽんっ。

快斗は軽い音と共にハトを取り出しては、自分の体に留まらせている。留まらせる前にスキップなのか、己とハトの顔を近づけてニコツと笑いかける。その時にハトがクルルと鳴いて首をかしげる仕草は、大層可愛かった。

しかし15匹を数えた時点で黙っていられなくなったのか、新一はまた一羽ハトを出した快斗に声をかけた。

「オメーの懐はどーなっていていやがる。明らかにおかしいだろ、その量は」

「んー？なにがだよ」

ぽんっ。

快斗は言っている傍から、又一羽取り出した。新一でなくてもお前の懐は四次元ポケットか、とつつこみたくなりそうだな。

「ハト、まだいんのかよ」

「まあな〜」

「よくそんなに飼えるよな！。見分けとかついてんのか？」

「あつたり前だろー！皆それぞれ特長があるんだから」

そう断言する快斗に、新一は一つ実験を試みる気になる。

また、ぽんっとした一羽のハトを指差した。

「じゃっ、こいつは？」

「ん。このシャープな喉元と、つぶらな瞳の女の子はね、蘇芳だよ。なかなかスタイルがよくてさ、かなり野バトにモテんだよ。虫除けが大変でさー」

「いや、どーでもいいし。次、その頭に乗ってる奴」

長くなりそうなので適当なところで区切って先を動かす。まだ喋り足りないのか不満そうな顔をしながらも、快斗はその娘を自分の手に来るように促した。

「この娘は俺が一年前に口説き落とした娘でね、濃紅梅っていうんだ。その名の通りキレーな紅梅の瞳だろ。ちよっと男勝りなんだけど、さ。水浴びの姿なんかもうサイコーに色っぽいんだから」

「さいですか」

ハトに色っぽいも何もないだろう。呆れる新一に気が付かずに、快斗はのほほんと笑う。

それから、それから、と次々と相棒自慢は尽きることはなく。いつの間にか、白ハトは快斗の全身を覆う程の大量の数になっていた。

快斗のハト自慢の中には呆れるものや、つつこみ所も満載のものなどがいっぱいだった。しかしハトたちの特徴をかなり正確に捉えていた。新一も快斗の差し出す一羽一羽、それぞれを示されれば何となく納得できる程の的確な言い方だった。

沢山のハトにまみれている快斗は、本当に幸せそうだ。そんな快斗の周りにいるハト達も。

又一羽、ぽんつと取り出して新一の目の前に突き出す。何事かと快斗の顔を見るとにつこりと笑って意外なことをいった。

「でね、この娘はあの時助けてくれたの娘の2代目だよ。人懐っこさとか、すっぽり手の中に入るかわいい姿とか、そっくりでしょ？」

「まあな。アイツの子、なんだ」

そっと両手に収まったその姿に、新一は懐かしそうに目を細めたのだった。

福引き(前書き)

三部構成になります

福引き

母親に頼まれて、久々に江古田の商店街へとやってきた快斗。夕食の材料を買い求めた帰りに、福引券をやって来てほしいと言われたのを快斗は思い出した。

「よいしょっと」

思いの外多くなってしまった荷物を抱え直す。快斗は今も昔もこの商店街のアイドルだったから、おまけの量も半端じゃなかったのだ。福引会場となっている町内会長の布団屋「ふわり」へとやってくると、見慣れた後ろ姿が目に入ってきた。

「青子じゃん」

「あ、快斗。クラス会ぶりだねー」

「おう、元気そーじゃん」

明るい青子の声に、快斗はニヤツと笑う。それなりの格好をしているならまだしも、買い物袋を幾つもぶら下げた状態では間抜けな感じだ。案の定、青子の笑い声上がる。

「なーに、格好つけてんの。似合わないよ、快斗」

「そこまで笑うなよなー、青子」

「だっつて〜」

まだおかしそうに快斗を見る青子に、快斗の肩はガクツと下がる。昔からこの幼なじみには快斗は弱かった。

「快斗もくじ、引きに来たの？」

「おう。青子もだろ？」

「うん。一等と四等はもう出ちゃったんだけど、特等とかはまだだから」

「へえー。で、商品は？」

快斗は何となく気になって青子に尋ねる。青子は思い出せないのか、暫く首をひねっていた。

「えーつとね、ここまで出かかっているんだけど。確か」

「二等は高級果物の詰め合わせ、三等は最新型デジタルカメラ、特等はトロピカルランド女性限定グループパス、よ」

「そうそう、それぞれ」

「つて、女将さん！」

「はあ、い、二人とも。そろそろ順番よ」

そうやって快斗と青子に手を振ってみせたのは、布団屋「ふわりの奥さんだった。着物を着こなすその姿から、ここの界隈では有名な人物だった。

「あつ、はい」

「今行きまーす」

その声に促されて中へ入る。辺りは布団屋らしく、布団のセットやシート、枕などが見やすく暑苦しくなく置かれていた。そのスペースの一角に机が置いてあり、ここの主人がニコニコ顔で快斗達を待っていた。

「二人共、本当に大きくなって」

「お久しぶりでーす」

「どうも」

ぺこりと青子と二人頭を下げると、店主がニコニコと言った。

「まあまあ、今日は二人揃って福引きに来てくれたのか」

「たまたま近くで会ったんですよ」

「おじさん、やっってもいい？」

青子がワクワクした顔で尋ねる。

「もちろん。さ、やっつてご覧？」

「はいっ、三回分」

そう言っつて券を三枚渡す。そして真剣な顔をして、やっつばかりにガラガラと鳴らす。

コロンと出てきたのは白玉だった。

二回、三回と同じ玉が出る。

「惜しい、残念だ。参加賞には百円引き券を渡しているんだ」

ガツクリ来ている青子に券を渡す。その意気消沈振りに快斗は苦笑した。

「あーおーこ。これでやっつてみ、もう一度」

「でも、快斗の分だよ」

「いいから、いいから。ほれっ」

「うんっ、ありがと」

そしてガラガラと音を鳴らして、コロンと玉が出る。その色は、黄色だった。

「おめでとう！特等だよ！」
「やったあー！！！」

その言葉に喜ぶ青子に、快斗はポンポンと頭を叩いてやるのだった。

女性？四人組（前書き）

快斗が女装しています。

女性？四人組

軽快な音楽がなり響き、風船を持った着ぐるみが愛想を振り撒いている。

ここはトロピカルランド。

快斗のあげた福引券で青子が特等をあて、蘭、真を誘って、丸一日ここで遊び倒しにやって来たのだった。

「きゃー、見て見て！可愛い」

「本当だー。青子ちゃん、あっちにも色々あるよ」

「うんっ、どこに行こうか迷っちゃうね」

きゃぴきゃぴとはしゃぐタイプの違う美女の三人組を、ボーイッシュな感じの女性がジト目で見ると、すらりとした立ち姿にセミロングの髪、淡く化粧を施した姿はかなりの美人だった。その様子に気が付いた真が、キュッと腕を絡ませた。

「もっつ。拗ねないの、カイちゃん」

「マコちゃん。俺で遊ばないでよ」

「こらこら、俺はダメでしょ。一応、女の子っていう設定なんだから」

「でもさー」

諦めきれないのかさすがのような目を蘭に向ける。しかし青子との話に夢中でこちらには全く気付いてもらえなかった。

そう、快斗は今、女装をしてトロピカルランドに入っているのである。

福引きで当てたフリーパスは、女性の四人組限定だった。何人かに声を掛けたのだが、運が悪く誰も捕まらなかった青子は快斗に愚痴

をこぼしていた。そこへ真が話を聞きつけ、蘭と共に参加を表明したのだった。

さらに面白がった真と、女だけでは不安だと思った新一にはめられて。あれよあれよという間に快斗が参加（しかも女装）をするはめになったのだった。

つき抜けるような青空は、今の快斗の気分と正反対で。恨みがましく見上げていると、真が不安そうに快斗を覗きこんだ。

「やっぱり強引だった？」

「うーん、もう。マコちゃん、そんな顔しないで」

「でも」

「ここまで来ちまったもんは、今更しよーがねえもん。俺も楽しむよ」

「良かった」

真のほつとした顔に流され、快斗は溜め息一つで気分を取り換える。話し込んでいる青子と蘭の側へと二人で近いた。

「行く場所は決まった？」

「うんっ。ジェットコースターが良いなって話してたの」
「げっ」

キラキラと瞳を輝かせて言う青子となかなか乗り気な蘭。

正直、このジェットコースターには余り良い思い出の無い快斗である。しかし真までもが乗り気であるのに、今更撤回出来なさそうな雰囲気だ。

「か、快ちゃんもそれでいいかな？」

「あはは、はあ。いいぜ、蘭ちゃん」

もうやけっぱちで快斗が答えると、蘭はほっとしたように笑った。

「ねねっ。快斗、じゃなかった快ちゃん。頭は平気なの？」

「あつたりめーだろ、じゃない。当たり前でしょ。アタシに不可能は無いわ」

少し不自然な快斗と青子の会話に、真は吹き出すのを堪える。蘭はそんな真を知り目に、ここ何回目かの話題を口にした。

「それにしても、本当に違和感ないよね」

「あ、それは青子も思ったよ！なんか想像つかなかつたし、変だったら笑ってやるうと思ってたもん」

「でも実際はすごく可愛くなっちゃったよね」

「そうだよね。新一と快斗くんは結構そっくりだから、マコ姉にも似るとは思ってたけど」

「姉妹で通りそう」

二人はクスリと笑い合う。

青子と蘭が見つめる先には、仲良く引っ付いている快斗と真の姿があったのだった。

開き直りも大切です（前書き）

快斗が女装をしています

開き直りも大切です

ジェットコースターなどの定番物を制覇し、次のアトラクションに乗るために並んでいた快斗達四人組。

そんな中、またもや男のグループが声を掛けられ、快斗はうんざりしながら振り向いた。他の三人は興味深くそのやり取りを見守る。

「ねえねえ、君達。女の子達だけなの？良かったら俺らと一緒に行かない？」

「間に合ってます」

快斗が代表して、冷めた視線をよこす。流石は元怪盗KIDで鍛えた鋭い眼差しである。少し殺気を込めれば、大抵のナンパ男はその絶対零度の眼差しに去っていく。しかし中には強者もいて。

「そう言わずにさ〜」

「結構です」

「そう言わずにさ。いーじゃん、別に。一緒に楽しもうぜ〜」

調子に乗った男はガシツと快斗の腕を掴む。彼には勝算があった。これで大抵の女は、困った顔の上目遣いで見上げてくるはずである。そうなればこちらのもの。そのスキをついて一気に畳み掛ければ完璧である。

しかし。

見た目は上玉の美女だが、どこまでいってもその本質は変わる筈もなく。男に言い寄られても気持ち悪いだけであり。

結局。

「何すんですか」

との言葉と共に、ドスツと一発見えない所に拳を入れられて、ニッコリ笑われると、男達は汗をだらだら流しながらいなくなるのだった。

「まあた、やって来やがって。もっとましな誘い文句でも考えろっての」

「快ちゃん、格好いい！」

溜め息を吐きつつ後ろの三人に向き直ると、真は良い笑顔でグツと親指を突き出した。

「これで十回目だねー。ナンパされるの」

「ほんと、快ちゃん達モテるよね」

呑気に話す青子と蘭に快斗は引きつった顔を向ける。

確かに真の顔は世界的女優なだけあって、変装しても十分美人ではあるが。青子のアイドル顔負けの可愛さや、蘭のモデルのような容姿など、男からしてみれば選り取りみどりの美人揃いで。そんな美人達が無防備でいる姿を見て、何とも思わない男はいるだろうか。いや、いまい。

自分達の容姿に無頓着な二人に、快斗は一人心中でつつこむのだった。

「まあまあ、快ちゃん。落ち着いて」

「あつ、もうすぐだよ。蘭ちゃん、早く行こつ。ほら、アンタも早くくつ」

「うん。か、快ちゃんも気にしない方が良いよ？嫌なことは忘れて遊び倒そ？」

「マコちゃん、青子、蘭ちゃん」

笑顔で快斗を誘う三人をそれぞれ見つめる。

女三人に男一人と、一度は夢見る憧れのハーレム状態なのに。何故こんなに、やるせない気持ちにならなくてはいけないのか。こうなったらやけっぱちである。

何度目かの覚悟を決めて快斗は今日一番の笑顔で宣言する。

「こーなったら、遊んで遊んで遊び倒してやる！」

もうどーにでもなれってんだ。現役マジシャン、黒羽快斗をナメんなよ！

後日。

新一が見せて貰った写真。そこにはどー見ても女性にしか見えない快斗を中央に、女性三人がぴたっと張り付いていた。

複雑な新一を前にして、快斗は一人お土産のクッキーをやけ食いしているのだった。

チョコレートデリバリー

ぱーんと、独特の甘い匂いが工藤邸のリビングから立ち込める。時刻は丁度午後3時。お茶の時間に最適な時間帯であった。

快斗に誘われて工藤邸へと遊びに来た歩美と哀が共にリビングへ入る。するとテーブルの目立つところに5枚のお皿が縦に組み立てられて、タワーをモチーフにしたように重なっていたものが3つほど乗っていた。そのお皿の上には、それぞれに色々な種類のチョコレートが並んでいる。

それを見つけた二人は、びっくりして顔を見合わせた。哀の方は、呆れも7割程入っていたが。

「うわあ。これ、カワイイね、哀ちゃん」

「ええ、そうね。それにこれ、手作りじゃないかしら」

「すごい！それにこんなにも沢山のチョコレートも。デパートの小ケースみたいだね」

「かなり高そうなものも混じっているのね」

夢中になってチョコレートに魅入る歩美に、哀は柔らかい眼差しを向ける。

よく見れば一粒300円近いものもある。どこからこんなに集めてきたのかと、首をかしげたくなくなるような色々な種類の数々だった。

「遅くなってゴメンね。これで全部だから」

「あ、快斗お兄さん！」

「今日はチョコレートの香りを引き立てる紅茶にしたからね」

白い陶磁器に、手書きで細かいログハウスの描かれたティーセットを手に持ち、快斗がリビングに入ってきた。それをテーブルに置き

ながら、二人をソファに促す。チョコレートに目を奪われていた歩美と彼女に付き合っていた哀は素直に席に着いた。

「快斗お兄さん、この器、すごくカワイイね」

「気に入って貰えた？嬉しいな。これはこの前までやっていたツア
ーのファンの子達で作ったものなんだよ」

「へえー、そうなんだ。あ、いいにおーい」

「そ？味もいいよ、歩美ちゃん」

そう言っただけで快斗はへにやりと笑う。

「それって、福祉施設を中心に回ってたのよね？」

「そうそう。結構ハードなスケジュールだったけどねー」

快斗の入れてくれた紅茶を受け取りながら哀が言う。快斗は自分の分をカップに注ぎながら、哀のその言葉に頷いた。

「丁度こういう工芸品を学んでいる子達でね。今回のお礼だって」

「随分律儀なのね」

「そうかな」

首をかしげた快斗に哀は肩を竦めた。

快斗自身は自覚は無いようだったが、今回のツアーはボランティアの要素が強いらしかった。なので一銭も徳になるような物ではないのだ。それどころか噂によると快斗のポケットマネーから出ているらしい。

しかしこの男は気にしないのだろう。少しでも多くの人に楽しんでもらうのが好きな人種なのだから。

そこにあるのは同情や偽善とは全く違う。ただ笑ってほしい、楽しんでほしいという純粹な気持ちだけだ。

「ねね、哀ちゃんはどれから食べる？」

「どれも美味しそうね。オススメはあるのかしら？」

「そうだね。これなんかいいんじゃないかな。口溶けと共に広がる香りが最高なんだ」

幸せそうにチョコレートについて語る呑気な顔と、キラキラした笑顔で哀を見つめる顔に囲まれて。

小難しいことは気にしないことにして、哀は快斗のオススメを歩美と二人で口に運んだのだった。

キッチンの恐怖

快斗は今現在地味に焦っていた。何故なら快斗との相性が最悪のもの、気構え無しに直視してしまったからだ。

キッチンに続く扉を勢いよく閉め、深呼吸を何度もして心を落ち着かせる。幸い？なことに扉は曇りガラスの為、あちらの風景を見ることは無い。

もう一度深く深呼吸をして、快斗は己の現状について今一度確認をした。

ここは工藤邸のキッチン。正確に言えばキッチンに続く扉の真ん前だ。

時刻は午後8時30分。人様のお宅を伺うには少々遅い時間だ。しかし快斗は昨日から泊まり込みで居るので何ら問題はない。ちゃんとこの住民達の許可はもらっている。

見間違いということは快斗の素晴らしく発達した第六感、かつよく言えばシックスセンスが否定している。まさか自分にとってヤバイ物を勘違いするなんてことは、絶対に無い。

無いっただけ無いです。

そうして快斗が扉の前で震えていると、新一が本日も警視庁から帰宅した。快斗の明らかに変な様子を見て、新一は眉をしかめる。

こんな快斗を見るのは、快斗がアレを見てしまった時しかあり得ない。しかしこの家にはそんなめんどくさいものは無いはずである。

理由は処理が面倒臭いから。

首をかしげつつも、新一はとりあえず快斗に声をかけた。

「おい、何やってんだ？」

「し、新一」

心無しか涙目になっている快斗に、重ねて新一は問う。

「どーしたんだって」

「あ、あれが」

「あれ？」

コクコクコク。

快斗は一生懸命首を振る。その余りにも頭の悪そうな仕草に、新一はこめかみを押さえた。これで世界を代表するマジシャンなのだから、詐欺である。ファンが見たら何と思うのか。

「あれって？」

「いやさ、甘い匂いが下からしたんだ。それにつられて、ふらふらと降りてきたんだ。そしたら・・・」

「そしたら？」

「アレが目の前に！」

ああ、思い出すだけでも恐ろしいとばかりに青ざめる快斗に、新一は溜め息をついた。おもむろに取っ手に手をかけ、キッチンへ続く扉を開ける。

すると甘い匂いが鼻についた。この匂いを二階で嗅いだ快斗の嗅覚に呆れつつも辺りを見回す。特にこれといって怪しい物はない。

「何でもねーじゃんか」

「ちげーよ、新一。アレだって！」

快斗が恐々とキッチン覗きこむ。新一が声を掛ければ裏返った声で叫び声を上げ、とある場所を指差す。

その場所に目を向けると新一。

そこにはたい焼きが乗っかっていた。

たい焼き、である。

あのモチモチの生地と、たっぷりのアンコの詰まった和菓子。某歌で家出して海まで泳いだアレである。

新一は今までの疲労が一気にのしかってくるのが分かった。快斗がおかしい原因は分かった。

しかしたい焼きである。

これすらもダメなのか、と呆れる新一の目線の先で、快斗は恐怖にひきつった顔で後退りしていた。

情けないぞ、黒羽快斗。

新一はそう心の中でつつこんだのだった。

猫のいる村

とある田舎の駅に快斗は降り立った。

小学生の頃、お世話になった恩師へ、米寿の祝をするためだ。簡単なパーティーをやるので、スペシャルゲストとして参加して欲しいとその人の奥さんに頼まれたのだ。

それを承諾して、恩師が今住んでいる所へと降り立ったのはいいが、そこは何もないような所だった。辺り一面田んぼが広がり、木造の黒っぽい家が転々と立ち並ぶ。

余りにも何もないので、快斗は逆に感心してしまった。青子とはその人の家で待ち合わせをしている。これならアイツも迷わず着いただろう、と快斗は思った。

キョロキョロと辺りを見回すと、一匹の猫が目に入ってきた。スラリとしたなかなかの美人さんだ。優雅に出入口の階段に座っている。かなり手入れの行き届いた白猫だった。

ぱたり、と尻尾をひと振り。

快斗と目が合うとようこそ、というようにひと鳴きした。

その声に誘われるように村へと向かう。30分程田んぼの畦道を歩くと、人の集落が見えてきたので快斗はそこに入っていった。

その村で一番大きな通りを歩く。古い家々が立ち並ぶそこは都会とは全く違う雰囲気、タイムスリップしたようだった。

興味深く観察していると、道端を塞ぐように子猫達がじゃれるようにして遊んでていた。

随分と楽しそうな様子に惹かれ、快斗は傍まで近づいてしゃがみこむ。しかし急に影ができたことに驚いて、子猫達は逃げ出してしまった。

快斗はその様子を残念そうに見送った。手にはいつの間にか猫じゃらしを持っていて、彼らと遊ぶ気満々だったのに。

つまらないと近くに転がっていった小石を蹴飛ばす。コロコロと勢

いをつけて転がった小石は塀の内側に入って止まった。

その向こう側で、驚いたような猫の声が聞こえた。

快斗はやべっと、そこから離れようとする。

しかし行動が遅かったらしい。顔に切り傷のできた、大きく立派な体つきを持つトラ猫が、快斗の存在に気付いたからだ。こいつがやりやがったのか、と威嚇するトラ猫が快斗に襲いかかると、快斗が身を翻して逃げるのは同時だった。

トラ猫はその体の能力を十分に生かし攻撃を仕掛けていく。快斗は持ち前の身のこなしを駆使し、迫りくる爪を紙一重で避けながら走る。

まさに死に物狂いで逃げていると、垣根の上から白と黒のぶち猫が笑っているのが目の端に写って消えた。

にやる、と足に力を込めてトラ猫を巻くために頭を働かせる。

10分後。肩で息する快斗は、見事トラ猫を撒くのに成功したのだった。

乱れた息のまま、額に張り付いた髪をかき上げると、いつの間にかさっきのぶち猫が快斗の目の前にいた。息を乱している快斗を馬鹿にするかのように一瞥している。

何だかムカついて、快斗はその猫を捕まえようと手を伸ばした。

スルリ、と触れるか触れないかの所で、簡単に避けられてしまう。

そのことに少しばかりショックを受ける快斗を知り目に、ぶち猫はひと鳴きして。

快斗を案内するように、恩師の家へと歩きだしたのだった。

日頃の逆襲

青子が真と会う約束をして、工藤邸に足を踏み入れる。するとリビングの隅で、不自然な体勢でいる快斗を発見した。

しかし快斗がここにいるのを微塵も疑問に思わず、青子はその背中に声をかける。辺りを見ても、青子を呼び出した真はまだ帰ってきていないようだった。

「ねーえー、快斗。マコさん知らない？」

「お、俺が知るわけねーだろ」

「えーっ。快斗達、恋人同士じゃない！」

「う、ウルセー。話しかけんじゃ、ねえよ」

「何よ、もう」

連れない快斗に青子は不服そうに頬を膨らませた。

そのままソファーにちょこんと座る。

するとそんな青子の前にコトンと紅茶が置かれた。慌てて視界に入った腕の先を見ると、新一が笑いを堪えた顔で青子を見下ろしていた。

「中森さん、紅茶でよかったかな？」

「あつ、はいっ！平気だよ」

「ついさっき姉さんから連絡があつて、もうすぐ着くって言ったから」

「あ、本当に？よかった」

新一の突然の登場に青子は少し緊張気味だ。

何てだったって、日本警察の救世主である。しかも少し前までマスクミでもて囃されていた人物でもあった。

何時ものように猫を被っている新一はかなり格好良い。快斗や蘭を通じて何回か会ったことはあるが、何故か妙な緊張感が抜けない青子だった。

蘭ちゃんは幸せ者だねえ、と誤ってしまふ程に。

「快斗の奴は拗ねているだけだから、気にしないでいいよ」

「あ、やっぱり」。青子もそうだと思ったんだ」

笑いを堪えている新一の顔に、青子は安心したように言った。

どーりでどっかで感じたことのある空気だと思った、と納得の言った顔だ。

不機嫌な快斗の顔をまじまじと見て、新一は面白そうに言う。

「しかも快斗が動けない理由はさ」

「や、やめろ！新一。やめろって。ぎ、ぎゃあ〜！」

足をつつつかれて悲鳴をあげる快斗を満足そうに見下ろして言った。

「ただ単に同じ姿勢でいたことで足が痺れただけだから。さっきから動くに動けないだけ」

「なーんだ。そうだったんだ。バカねえ、快斗ってば」

快斗の不自然な格好が理解出来て、青子は快斗を見る。

新一につつつかれて体勢を変えたために身体に痺れが走り、快斗はそのなんとも言えない辛さに悶絶する。面白そうに見ている二人に途切れ途切れの反論を返した。

「し、新一のろくでなし。青子も面白がってんじゃねーよ」

「むう。そー言うこと言うのはどこのどいつかなー？」

カチンときた青子は快斗の足をおもいつきり擦る。

「ぎゃあああ〜！」

「ふんっ、バチが当たったのよ」

更なる悲鳴を上げる快斗と、勝ち誇ったような表情の青子。

新一はそのような二人を面白そうに眺めていて。

快斗で遊ぶのは真が来るまで続けられたのだった。

雨の中

台風が接近しつつあると訴える、雑音だらけのラジオの音が耳に入ってきていた。新一はタクシーの窓から外を眺める。

酷いどしゃ降り雨だ。

ふと気になったものがありそちらを見ると、見知った後ろ姿を発見した。それは傘も役に立たないような酷い雨の中、道路のはじっこでつつ立っている。

快斗だった。

理由は分からないが、何の対策もせずに雨の中を一人でいる。

その余りにも無謀な様子に、新一は若干眉を潜めた。思わずタクシーを止めてもらいじっくり観察してしまう。

彼の様子はなんだか楽しそうで、この天候の中でとても不自然だった。

「すみません、降ります」

「あんちゃん、無茶言っちゃあいけねえ。この天気だ、風引くぜ」

思いの外優しい声を掛けてきた運転手に、新一は外を指差した。

「ええ、そうでしょうね。ですが知り合いの一人がいたものですか」

「そうかい。そいつあ、仕方ねえ。そんなバカは早いとこ、ここに連れてきてやんな。待っててやつからよ」

運転手のおやつさんは、人の良さそうな顔をして言った。願ってもない申し出だったが、そこまでしてもらうのは申し訳なく新一は困った顔をした。

「いいんですか？」

「いいって、いいって。早く行ってやんなよ」

「ありがとうございます！」

運転手の心遣いに感謝して新一はタクシーから飛び出す。

強風と横殴りの雨の中で、快斗はハイになって水溜まりに飛び込んで笑っていた。

「こっの、バカ快斗！なにやってやがる」

「あれ？新一じゃん。こんな天気の中、どーしたの」

「それはこっちの台詞だ、バーロ！」

呑気に新一に尋ねた快斗に頭にきて怒鳴り返す。今一新一が怒っている原因が分からない快斗は、キョトンとして新一を見つめた。

「何って雨を感じに」

「はあっ？」

余りにも子供っぽい返事に新一は呆れた声を出した。馬鹿を見る目付きで快斗を眺める。

しかし快斗の表情は本気だった。楽しそうに空を見上げて、雨を浴びる。

「いやさ、先週からサハラ砂漠まで行って来てたんだよね、俺」

「だから？」

「水は大切だなって、見に染みて感じたわけよ」

「それで？」

「今、それを全身で感じてるって訳」

何だか理不尽さを感じて、新一は押し黙ってしまった。余計な心配

をして損をした気分だった。
更に追い討ちをかけるように快斗の一言。

「新一も傘なんか取っちまえよ。そんだけ濡れちまえば無くても変わんねえから」

プツンと何かが切れる音が、頭の中でした気がした。
へらへら笑っている顔にムカムカは募っていき。

「アホか〜！」

「ウワツち」

ドカバキベコツ！

新一の右足が快斗に炸裂した。それを紙一重で避ける快斗がまた憎らしく。

興奮した新一を宥めて本来の目的に達するまで、雨の中の追いかかけっこはまだまだ続くのだった。

夕暮れ時

夕暮れ時にいい匂いが家々から漂ってくる。

蘭はスーパーで買ったま買い込み、パンパンになったビニール袋を手に持って歩いていた。これから工藤邸に行き、面倒臭がり屋の食事を作る為である。夕飯のメインメニューはマカロニサラダ。オマケに肉じゃがを付けようかは、目下考え中だ。

蘭は曲がり道を右に折れて前を見る。すると考えていた人物と、そっくりな後ろ姿が見えた。

「快斗くん、久しぶり」

「あつ、蘭ちゃんじゃん。五日ぶりっ」

にっこり笑った快斗の手にも、所帯染みたスーパーの袋があった。

「快斗くんもこれからご飯なの？」

「まあね。今日は自炊の気分だったから」

「き、気分を決めるんだ」

「うん」

新一とよくつるんでいるらしく、その為か快斗はやはり変わっていると感じる蘭。類は友を呼ぶって感じかしら、と頭の隅で思った。

「蘭ちゃんの本日のメニューは？」

「えーっとね、マカロニサラダにしようと思ってるよ」

「そのわりには重そうな物が入ってるけど」

ちらっとビニール袋を横目で見て快斗は言う。新一のように妙な所でカンがよかった。

「肉じゃがも一緒に作るうか迷ってるの。本当はさか・・・」
「うわあっ」

蘭がとある言葉を言おうとすると、快斗は耳を押さえてしゃがみこむ。ガサツと、袋とコンクリートが擦れる音が妙に蘭の耳に残った。

「か、快斗くん。その、あの、言葉も駄目なの？」

「うん。あー、ビックリしたっ。普段ならまだましなんだけど、さつきまで青子に散々遊ばれてたからさ」

「反射的に行動したわけね」

「ん、そういうこと」

何とか復活した快斗だったが、蘭の持っている袋の中にアレがあるとなると、何だか落ち着かない。そわそわと辺りを見回して、意味も無く腕を振り回す。

それから唐突に薔薇を一輪取り出した。それを手で覆い隠しパツと退けると、色が変わる。何色か続けざまに繰り返し、深紅の薔薇に戻るとすつと匂いを嗅いだ。

急に始まった快斗のマジックに蘭は驚きに目を丸くする。

確かに彼のマジックは何度か見たことがあるが、これだけ間近で見たのは初めてだった。快斗の直ぐ隣で見ているにも関わらず、全くタネの分からないマジック。意識しているのかいないのか、にじみ出るオーラは人の目を釘付けにする程だ。

暫くして落ち着いたのかポンツという音と共に薔薇を消す。地べたに落ちたままの袋を拾うと、何でもなかったように蘭に意識を戻した。

「さっ、行こっか。蘭ちゃん」

「う、うん」

まだビックリしている蘭に、快斗はありやりやと頭を搔いた。

「ビックリした〜。急に手品を始めるんだもん」

「あれが俺が無心になる、一番手っ取り早い方法だからね」

「ふーん」

「蘭ちゃんも試合前とかに、そういうこと、やらない？」

「言われてみれば」

精神統一というものなんだろうと蘭は当たりをつけた。

その後世間話をしながら歩いていくと、工藤邸の門前へと到着した。今日お邪魔するのは野暮つてもんだらうと、蘭が工藤邸に入ったのを見届げるだけに留める快斗。しかしその嬉しそうな背中に、ただか無性に真の声を聞きたくなっただけだった。

梨の山

するするするっと音がする後から、茶色い皮の内側にある真っ白な中身が見えてくる。

快斗は器用に梨の身に包丁の刃を当てて、薄く皮を剥いていった。その芸術的とも言える薄さと長さに、青子と白馬は感嘆の溜め息をついた。

「これは、すごいですね」

「快斗って、こーゆー妙なことだけは昔から上手いよね」

「まあな〜」

注目されるのが気持ちいいのか、快斗は二人に向かってニヤリと笑いかける。綺麗に剥かれた梨をお皿の上に乗せ、パチンと指をならす。

するとどういいう仕掛けなのか、きっちり芯を抜かれたみずみずしい白い身が、六等分に分かれて置かれていた。ご丁寧にも二股のフォークが三本、横に添えられている。

思わず拍手する青子と、驚きに言葉の出ない白馬に、快斗は得意気に胸を張った。

「さっ、食べてくれたまえ。この幸水はかなり甘くてうめえから」

「うんっ。いただきまーす」

「それじゃあ、遠慮無く」

青子と白馬は添えられたフォークを梨の身に突き刺す。そのまま口に入れると、シャリシャリと言う音と共に甘い汁が口一杯に広がった。

「ん〜、おいし〜っ。甘〜いっ」

「これは、これは。かなりいけますね」

快斗は二人の大絶賛に、当然という顔で頷いた。

「今年は当たり年じゃない！」

「だろっ？」

「本当に美味しいですよ」

青子と白馬は気に入ったのか、もう二つ目を口に運んでいる。快斗も負けじと一個を口に運びながら、また梨を剥き始めた。

「ですが、いいのかい？あんなに貰ってしまって。結構、高いのだろっ」

白馬は申し訳なさそうに指を指す。その先にはかなりの大きさの梨が五つ程、ビニール袋に入れて置いてあった。心配ぎみの白馬に、快斗は肩を竦めて何でもなしのように言った。

「ああ、へーき、へーき。まだ家に二箱あるんだよ」

「えっ、まだそんなにあるのっ？」

青子はその言葉に驚いて快斗を見る。

「おう。なんか今年は梨を送ってくるファンがやけに多くて。母さんと近所に配りまくって、知り合いに渡しまくって、毎日梨食ってやっとならわりが見えてきたんだよな」

「それは、大変だな」

「シャリシャリと梨を食べつつ、白馬は相づちを打つ。青子ももう一

つ梨を口に入れつつ納得した声を出した。

「ああ。だからわざわざお父さんの仕事場と一課まで来たんだ」
「そつ。梨を切ったやつをでっけータツパに入れてな。一課はついでだけど」

ほいっと梨の身を追加しつつ、快斗は青子の説明に解説を付け加える。

白馬はその光景を想像して脱力してしまった。
警視庁の内部を元怪盗KIDが歩き回るのはどういうものなのだろう。引退したとはいえ、怪盗KIDが警察の人々に梨のお裾分けをする。何だかおかしくないだろうか。

「なんてことしているんですか、あなたは」

「ん？」

「一応、追われていた身でしょうに」

そう言った白馬に対し、快斗はやれやれと肩を竦めた。

「何度も言っつけど、違うからな？俺は」

「白々しいですねえ」

すました顔でしらばっくれる快斗に、白馬は溜め息を一つ。

そんな二人を気にすることなく、青子はまた一つ梨の身を口に運ぶのだった。

舞台裏見学ツアー

人々が舞台裏でせわしなく動き回っている。大声で辺りを指し示したり、色々な機材や装置などを配置したり。

ここは鈴木財閥が中心となって支援している舞台ホール。近々公開予定の舞台劇の準備に、スタッフ一同大わらわな状態だった。

「さっすが鈴木財閥。ここが絡むとすげ〜ことになるな、相変わらずに」

「うわ〜。結構、大きい所でやるんだねえ」

「そう？でもあの世界的に有名な奴をやるんだもん。このくらいはないと」

「「そう？」」

「「そうよっ！二人共っ！」」

そう言い切る園子の剣幕に、二人はたじたじしながら頷く。やたら気合いの入った園子はかなりの迫力だった。

ところでなぜ二人がこの場所にいるのかというと、園子が関係していた。

舞台の視察に訪れることになっていた園子が二人を誘ってくれたからだ。快斗は特に今回上演される舞台に少し思い入れがあった。さらに真が出るとなっては、尚更誘いを断るなんていうことはないのだった。

快斗と蘭は、余り見る機会のない舞台裏を興味深そうに観察する。

「ね、快斗くん。快斗くんは一回、この舞台見たことがあるんですよ？どうだった？」

「ん？ん〜、普通のラブロマンスだったぜ」

そう言った快斗に、蘭は更に問いかける。

「じゃあ、あの噂は本当なのかな？」

「あの噂って？」

「この舞台に出てくる魔法使いは、怪盗KIDがモデルになっているってやつだよ」

「へっ？」

思わぬ所から自分の過去に関する話が出てきて、快斗は間抜けな声を出す。

「やっぱり、違うのかなあ」

「そーんな訳、無いじゃない！蘭！」

快斗の反応に蘭がそう言った時、突然後ろを振り返った園子が声を上げた。勢いよく、ビシッと指を二人に突きだして、熱く語り始める。

「蘭、知らないのっ？今回上演される舞台はあの『ローザとマルス』をモチーフにして作られたものなのよっ。意地悪な王女様に虐げられた召し使いが、魔法使いの導きで王子様と巡り会う。すっごく口マンチックだし、この劇団の目玉のグリーンドリームっていうビジュアルを狙って予告状出してたじゃない！」

すれ違ったスタッフの団体に挨拶を交わし、園子は夢見る心地で天井を見上げた。

「ああっ、あの時の感動をもう一度！KID様っっ」

エキサイトしている園子を快斗は宥めにかかる。なんて言うか、少し恥ずかしい。

蘭は気分を変える様に話題を変える。

「でも残念だったな。本当は新一も来る予定だったのに」

「蘭ちゃん、仕方ないよ。事件の呼び出しだったし」

「そうそう。大体アンタの旦那が来ちゃったら、まぐた変な事件に発展しちゃうかも知れないじゃない」

「あー、言ってる。言ってる」

「もう、園子！快斗くんまで」

「照れなさんなって」

快斗と園子のからかいに、赤くなった蘭はぶいっとそっぽを向く。

そんな蘭に二人はまたちよっかいを出して。

蘭は我慢出来ないっつというように叫んだ。

「案内してくれるんでしょっ。園子！」

「はいはい。次はこっちに行きましょっか」

そうして三人は出演者に会いに楽屋へ向かうのだった。

舞台裏見学ツアー（後書き）

三部作です。

そしてあの話を元にして書きました。思い当たる節があったら嬉しいです。

偶然の再会

色々な機材があちらこちらに並べてある、かなり通りによく狭い通路を歩いていく。

暫くして広い空間へ出ると、今回の主役の内の二人が困った顔をしているのに出くわした。

何やら深刻そうに話合っている。その様子に首を傾げていると、その内の一人である真がこちらを振り向いた。快斗と目が合うと嬉しそうに微笑む。もう一人もこちらに気が付いたようで、ペコリと頭を下げた。

「快くんっ。来てくれたんだ！蘭ちゃんに園子ちゃんも。私、張り切っちゃうからね」

「おひさ〜ですっ」

「お邪魔してまーす」

「ま・・・じゃなかった、鈴花さん」

「いーのいーの。いつもみたいに呼んで？快くん。恵ちゃんは平気だから」

真がそうだったので快斗は遠慮せずに、もう一人の方に向き合う。すると園子が何かに気が付いたようにオーバーアクションで言った。

「あー、あなた。もしかして古畑恵っ？」

「それって今回の主役の召し使いさん？」

「あっ、どうも。古畑恵です」

そんな反応には慣れているのか、恵はニコツと笑いもう一度お辞儀をする。うわあ、と感動している女二人に、真はカワイイっつと飛びついた。

「こっちが今回使わせてもらう劇場のスポンサー、鈴木財閥の代理である鈴木園子ちゃんよ。こっちは私の弟の彼女、毛利蘭ちゃん。で彼は私の恋人の黒羽快斗よ」

真の紹介にそれぞれが握手を交わす。蘭はその紹介にいささか照れているようだったが。

快斗はまさか彼女と再び会うことがあるとは思わなかったのでも驚いた。顔色は変えずに観察するが、相手がこちらの正体に気が付いていないようだった。一先ずほっとして、初対面の振りをして握手を交わす。生き生きした表情に、変わったよなあ、と顔を見つめていると視線に気づいた恵は快斗を真正面から見上げた。

「あの、なにか？」

「いえいえ、可愛いなって思ってた」

「えっ」

「素敵な恵さんに、これをどうぞ」

快斗は空中に手をやり、軽い音と共に一輪の造花を取り出す。突然の出来事に驚く恵の手にそれを握らせて、パチリとウィンクをした。かあつと頬を赤くする恵と、間近で見たマジックに興奮する真と蘭と園子。

恵ははっとしたように快斗に詰め寄った。

「ね、君。今何歳なの？」

「えっ、えっ？」

「よく見たら私の恩人さんにそっくりなの」

怪盗KIDの正体がこんな所ではばれる訳にはいかない。快斗はとっさに恵の手を握ると、パチリと指を鳴らす。すると恵の持っていた

花が違う種類の花に変わった。驚く四人に、ポケットの中を探るように言う。不思議に思いそこへ手を入れると、ぽんっという音と共に鳩が飛び立って。

取り出した手の中には、いつの間にかキャンディーが入っていたのだった。

「もう、恵ちゃんったら。快くんのこと知らない？結構有名なマジシャンなんだよ」

「えっ、あの黒羽快斗なんですか？えっ、ええー！」

「それにこーいうバイトは高校生禁止じゃない。恵ちゃんがデビューしたとき、快くん高一よ？」

「兄弟とか、従兄弟とか、親戚は？」

「うーん、聞いたことないなあ」

「そう」

残念そうな恵に快斗はごめんなさいっ、と心の中で手を合わせたのだった。

何故だか縁のある舞台

それから暫くの間、快斗達五人は世間話に興じる。一通り話した所で、快斗は先程から気になっていたことを口にした。

「そーいえば、俺らが話しかける前に深刻な顔してたけど、なんかあったの？」

「そうですね。一応、私、視察っていう目的があるんで、なんかあったら言っして下さいっ」

園子の元気一杯の主張に真と恵は顔を見合わせる。

「ここは快くんのを素直に変えた方が良くない？」

「だけど、悪いですよ。確かに彼ならなんとかかなりそうですね」

「まーまー。そこはこの私が何とかするから、ね」

「そこまで鈴花さんが言うなら・・・」

そう言っでじつと快斗を見つめる二人。

そして決意したように頷くと、ガバツと園子を掴み、小声でゴニョゴニョと囁く。快斗の昔鍛えた聴覚でも聞き取れない説明が進んでいくに従って、園子の目が丸くなっていく。一通り話し終わったよ
うで満足そうな真の横で、今度は園子がマジマジと快斗を見る。

その真剣な視線の意味が分からず、快斗はクエッションマークを飛ばした。

「ね、快くん。劇の経験ってある？」

「えっ、いや、俺、作るのばっかだったし」

「でもマジックショーなんかで大きな舞台とかは何回も経験してるよねっ」

「そりゃ、まあ」

なんだか展開が読めてきた快斗は、真の期待する声に比例して後退りする。助けを求める様に蘭を見るが、彼女は真が何をしたいのか分かっておらずキヨンとしている。園子は完全に面白がっている顔で、最後の綱とばかりに恵の方を見ればさすがのような眼差しを逆に向けてきて。

完全無欠の四面楚歌。

壁際にまで追い詰められた快斗に、真の最終宣告を告げられた。いわく。

「快くんっ。お願い！魔法使い役の子が急に駄目になっちゃったの。代わりに出て！」

「黒羽くんに頼むのは、この役には簡単なマジックをすることがあるからなの。代役の子は今、手違いで海外ロケ中で」

「大勢の観客に慣れていて、マジックもこなせる人がいないのよ」

「お願い、黒羽くん」

「お願い、快くん」

「代役、やってくれないかなっ？」

二人は揃って頭を下げる。園子を見ると両手を合わせて、こっちも必死の表情で頭を下げた。

その様子を蘭は驚いて見つめる。快斗は参ったな〜と言う風に、ポリポリ頭をかき混ぜた。

「快くんっ」

「黒羽くんっ」

二人の真剣な眼差しが快斗を射ぬく。

そして恵は更に言い募った。

「この舞台は私にとって、凄く大切な物なんです。私の原点だから。何故だか知らないけど、黒羽くんなら何とかなるって感じるの。うん、黒羽くんじゃ無きゃ駄目なのっ。お願い！」

快斗はその言葉にはっとした顔をする。思い出すのは昔、一人遅くまで練習をしていた恵の姿だった。それから劇中にトラウマを乗り越えた時に見せた恵の表情。脳裏によぎったその眼差しと、今の眼差しが快斗の中で一つになる。

快斗は真と恵の顔を改めて覗き込む。

そしてハッキリと頷いたのだった。

それから二日後の初日上演が終わって。大喝采の中幕が降りた後、最高の出来であったと人々の記憶に刻まれたのだった。

千羽鶴ならぬ・・・

ここは阿笠邸の地下室。専ら哀が使っている実験室を借りて、快斗は昨夜から作業を続けていた。しかし、いい加減集中力も底をついてきていた。うーんと大きく伸びをして、壁に備え付けられている時計を見る。

午後3時。

休憩にも丁度良い時間帯である。あっさり気分を切り替え、辺りを簡単に片して階段を上がる。ガチャリと音をさせて、リビングに繋がるドアを開けると、哀と歩美の後ろ姿が見えた。

「哀ちゃん、もう帰って来てたんだ。歩美ちゃんは久しぶりだね」

「快斗お兄さん、こんにちは」

明るく挨拶した歩美に続き、哀も声をかける。

「あら、もう実験はいいのかしら？」

「それがまだなんだよね。どーにも煮詰まっちゃったから休憩に、ね」

快斗は肩を竦めてそう言うと二人の手元を覗き込んだ。

「所で二人は何してるの？」

「千羽鶴、作ってるんだよ！」

「来週、クラスの子が関東大会に出場するのよ。その激励ですって」

歩美の説明に哀が補足する。快斗は二人の手元を見て、へえーと納得した声を上げた。

なかなか順調なようで鶴を繋げた束が何本か出来ていた。綺麗な物から歪な物まで揃っていたが、一生懸命さは伝わってくる鶴達だった。

「千羽鶴か。そういえば随分前のマジックショーの時に、変わった奴が楽屋に届けられたっけ」

「なにに、どんなの？快斗お兄さん」

快斗は懐かしそうにそれらを見つめる。そんな彼に好奇心一杯に話の続きを促す歩美。しかし作業中の彼女は手は止まっていた。しかし哀は特に気にせず作業を再開する。しかも二人の会話はしつかりと耳に入れていた。

「俺がハト好きっていうのは、結構知られてるじゃん？」

「うん」

「その事が理由なんだと思うんだけど、さ。贈られて来たんだよね。」

「こーゆーのが」

「千羽鶴が？」

「いや」

歩美のその言葉に快斗は首を振った。

「ハト」

「え？」

「どついう、こと？」

一瞬、何を言われているのか分からなくなり、哀と歩美が聞き返す。二人のその気持ちは快斗にもよく分かった。快斗自身も満面の笑みと共に、ハトの千羽鶴（この場合は千羽ハトか？）を手渡された時には反応に困ったからだ。

「ハトだよ、ハト。ほら折り紙なんかでハトも折れるじゃん？それが20羽ぐらいつつ糸に通してあって。俺も初めて見たからかなりインパクトが強くて」

「うわー、凄い！」

「それはまた、凄いわね」

歩美はその様子を想像したのか感嘆の声を上げた。一方、鶴一羽折るにも大変だった哀は呆れたように言った。

「まあ、俺、ハト好きだし。何だかんだ言ってまだ部屋に在るんだけどさ」

取っしておいてあるのか、と哀は快斗に視線で訴えたが彼は気が付かず。

「いやー、スゲーもん貰ったってあの時は思ったぜ」

「いーなー。今度見せてよ、快斗お兄さん」

「おう。次に会ったらな」

なんて呑気な会話を続けたのだった。

喫茶店の一角で

とある喫茶店のテーブルの一角。通りに面したその席に、道行く人々の意識を奪っていく人物がいた。

モデルと間違えてしまいそうなスラリとした体格。真っ白な肌。丹精な横顔。癖毛はその男の奔放な性格を表しているようだった。時折外に向ける目には、いたずらっ子のように愉しげな光を宿している。しかし彼に向けられた視線はその容姿にばかりなだけではない。彼の手中で小さなゴムボールが増えたり減ったりしていたからだ。そのマジックは不思議なほど存在感があり。男が意識していないからこそ、その耀きは一層目立っていた。

そんな中、男のテーブルに影がさす。どうやら待ち人が来たようだった。

「黒羽くん、待たせたね」

「おお、白馬じゃん。おっひささ」

今までいじっていたボールをスツと手のひらから消して、快斗は久しぶりに元クラスメイトに挨拶をした。

そう、快斗の待ち人は白馬だった。高校時代には考えられなかったことである。白馬は探偵で快斗を怪盗KIDだと疑っていたのだから。

しかし年月が二人のいがみ合いを、少なからず良い方向に導いていたらしい。同窓会で再開してからは、なんだかんだ言ってたまに会うこともあった。

相変わらずの見事なマジックの腕前に、白馬は苦笑して快斗の正面に座る。

「で？ってー何のようだよ」

「まあ、そう急かさなくてくれたまえ」

「あのなあ。一応、俺は売れっ子マジシャンってやつな訳。暇じゃないの、わかる？」

快斗が呆れたように白馬を見る。しかし本気で言っているわけではない。単なる習慣なだけ。

白馬もそれを知っているので、堪えた訳もなく頼んだコーヒーを口に運んでいた。

それから暫くの間軽口の応酬。その様子を快斗はばれないように観察する。白馬はいつ本題に入るのやら、これは長期戦だと覚悟を決めた。

快斗はここに来るまえに、己のカンに従ってこの後の予定を入れて来なかった自分を盛大に褒め称えた。しかし顔に出すことはしない。ポーカーフェイスはいつでも大切なのだ。

「つーか、オメーは今までロンドンじゃなかったか？」

「おや、僕の予定をよくご存知で」

「はんつ、白々しい。俺には強力なニュースソースがあんだよ」

とは言うものの情報源は青子だった。

何でもクラス会の後たまたま再開したらしい。その時にお互いの連絡先を教え合い、今も二人で会ったりしていると聞かされていた。

「青子さんですか」

「まあな。つー訳でサツサと話しやがれ」

「とはいえ、なんだか恥ずかしいですね」

白馬は照れながら、また一口コーヒーを口に運んだ。

何を言い出す気なんだ、白馬探よ。

快斗は若干不安になりつつも、先を再度促した。

時計の秒針がグルッと一周した。相変わらず妙な雰囲気、白馬に、何故か押されっぱなしの快斗である。

そんな快斗に白馬は苦笑を返す。

あれから何年か年が過ぎ去り、彼に対する子供じみた執着を自覚して。KIDの存在が無くなってから、そのことに気が付くなんて遅すぎた。

しかし彼の中にあるあの頃の面影を見付だして、遅くはないのだと気付かされる。

密かにおののいている快斗に気が付くこと無く、いまのキラキラした彼に白馬は目を細めたのだった。

白馬の渋っていた話に快斗が飲んでいたコーラを噴き出すまで後少し。快斗はそうなることも知らずに、早く話せと白馬を急かすのだった。

ある日の舞台裏

今回も最高のステージとして終了したマジックショー。

快斗は観客の絶賛の声を受けて、心を込めて優雅に一礼する。名残惜しそつに観客を見回し、彼らの満足そつな笑顔を見渡し手を振つた。

途端に大きくなる喝采。

もう一度優雅に一礼して、ポンツという音と共に舞台から姿を消した。

その後を引き継ぐかのように、次の出し物が始まる。その気配を感じつつ、快斗は未だにその舞台袖にいた。目を閉じ、疲れた様に壁に体を預けている。気を抜くと眠ってしまいそつなほど疲れていた。

「ぼつちやま、一先ず控え室へ参りましょう」

「ああ、ジイちゃん。そつだな」

寺井がそつと声をかけると、今までの気だるい雰囲気を払拭し完璧なポーカーフフェイスを被る。寺井は快斗の顔を見たがそこからは何も読み取ることが出来なかった。

先頭たつた寺井はパチリと部屋の電気をつけ椅子を出す。快斗はそこに崩れるように腰を下ろした。淡々と上着を脱ぎ、右の袖を捲る。そこには赤黒い後がいく筋が残つていた。寺井はそれを見て辛そつに眉を寄せる。手早く用意した薬を使つて手当てを開始した。

「ジイちゃん、あの女の子はどうなつた？」

「無事でございますよ。先ほど病院へ連絡を入れましたら、親御様が涙ながらに感謝の言葉を述べられておりました」

「そつか」

「お嬢様は間もなく目を覚ますそつでございます」

ふっと快斗の緊張が解けたのが寺井に伝わった。

「ですが無理をなさらないでください。今回は、まあ、仕方のないものではありましたが」

「うん、流石に不味かったよ。今回は。お客様にも失礼だったし」

「そうでございますね。ですが素晴らしいステージでしたよ」

「当然だろ。手は抜けない。俺はマジシャン、夢を与える者だからな」

そう言うつてにやっと笑う快斗に、寺井は一瞬、盗一の面影が重なって見えた。

今使えているこの若い主人はとても優しい方だ。そして強い方でもあった。

今回は会場に向かう途中で、女の子が襲われている所にたまたま出くわしたらしい。詳しくは説明を受けていまいが、六人程とやり合ったといった感じを受けた。

普段の快斗なら軽くあしらえる程度であったが、体調が万全ではなかったことと、女の子に気を取られている隙を狙われ、いくつか傷を負ってしまったのだ。

寺井が連絡を受けてやってきた時、そこはかなり混雑していた。快斗はその後直ぐにステージの準備に行かなくてはならなくて、後を寺井に任せて会場へ行ったのだった。

ステージは本当にギリギリではあったが、直前にあんなことがあったと思わせないような最高の出来で。後程合流した寺井も感慨したのだった。

しかし違和感を感じる。素晴らしい技術で観客を魅了しているのに、どこかおかしな素振りをしている気がしてならないのだ。

じっくり見ても分からなかったが、長年使えていた感が訴えてくるのだ。

それでもきつちりとシヨールを終わらせた快斗。

そのプロ意識に寺井は成長を感じずにはいらなかった。少し物寂しい気持ちを抱きながら、今は次の傷の手当てをするのだった。

まったり日和

白い絵の具のついた筆を置いたような雲が、二つ、三つ漂っている。度々訪れる工藤邸の屋根の上から眺める空は、やっぱり広くて青かった。

ごろりと寝返りを打ち快斗は器用にうつ伏せになる。肘を付き顔を上げれば時折良い風が当たった。それと同時に暖まったの屋根がお腹に当たり、じんわりと気持ち良い。

ここは快斗にとって最高の昼寝場所だった。

「ふわあ。いい天気」

目尻にできた涙をそのままに、欠伸を一つ。

そのままぼーっとしていると、鼻の下をくすぐる感触がある。目線を下にするると、白黒の子猫と目があつた。頬かむりをしているような顔をしている。

快斗が片眉を上げると、機嫌良さそうに向き合い一声鳴いた。

「チビ、どっから来たんだ？」

快斗がそつと顎をくすぐると、目を細めて気持ち良さそうにゴロゴロ口と喉を鳴らす。じゃれつくように快斗の手に顔を寄せてきた。

その人懐っこさに快斗は更にご機嫌になる。

暫く片手で子猫をじゃらつかせてから、ひょいっと体を起こし子猫を胸元へと持っていった。目線が急に変わったことに驚いたのか、その小さな体が堅くなる。しかし快斗の腕の中が思いがけず居心地が良かったようで、直ぐに力を抜いた。

「可愛いなあ、お前は。どこの子なんだ？見たことないぞ？」

頭を撫でると、更に子猫はゴロゴロと快斗の手のひらにじゃれついてくる。

「くすぐつてーよ」

親指を甘噛みして、その小さな体を甘えるように刷りよる。

快斗の優しい眼差しを見上げて、可愛らしくもう一度鳴いた。

「あつ、新一だ」

それから暫くの間、子猫とじゃれながらのんびりと過ごしていると見知った人影が道端を歩いているのが目についた。

「蘭ちゃんも一緒だ。相変わらずラブラブだな」

二人は快斗が上から見ていることにも気が付かず、仲良く手を繋いでいた。新一のもう片方の手にはスーパーのビニール袋が下がっている。

寄り添うように歩く二人の姿は、どのように見ても恋人同士に見える。えなかった。

優しい時間がそこに流れているのが伝わり、快斗の胸に暖かい何かを運んでくるのだった。

「新一の奴ってば、あーんな緩んだ顔しちゃって」。蘭ちゃんも嬉しそう

子猫を抱きしめながら二人の様子を伺っていると、子猫がくあ、と大きな欠伸をした。それにつられて快斗も大きな欠伸をもう一つ。ちらっと見た限りでは、新一達が家に着くまでにはまだ暫くかかり

そつで。

子猫を胸にしつかりと抱いて屋根に寝つ転がる。ちらつと子猫を見ると既に夢の中へと旅立ったのか、微かな寝息が耳に届く。快斗はその音に誘われるがまま目を閉じた。

背中ほポカポカと暖かく、心もほかほかと温かい。

時折吹く風が良い感じ。

とある午後、工藤邸の屋根の上ではのんびりした時間が流れるのだつた。

三色ボールペンの話

先程から快斗はじいーっとあるものを見つめていた。そろそろ一時間近く経つ。

新一の所からでは、快斗の頭が邪魔で何を見ているのかは分からなかった。手にしていたハードカバーの本は、既に読み終わっている。ありたいいに言えば、新一は手持ちぶさただったのだ。

しかし移動することはかなり億劫で、ずっと快斗を観察していたのだ。

快斗は煮詰まっているのか、唸りながらガシガシと頭を掻き首を捻る。そんな後ろ姿は、いかにも悩んでいますと言ったものだった。なかなか面白い、と観察を続けていた新一だったが、流石に時計の針が一周した頃にはいい加減我慢の限界というもの。勝手に観察を始めたのは新一の方なのだが、そこら辺はスルーして。

エイヤツとばかりに、手元にあった物をろくに確認もせず快斗の頭をめがけて投げつけた。

「うわっ、あぶねっ。て、ボールペン？」

「なんで受け止めるんだ、快斗！」

「だって当たったら痛いじゃん」

余裕な動作で新一の投げつけたボールペンを受け止め、快斗は肩を竦めて新一に向き直る。完璧に当たると思っていた新一は、悔しげに眉を潜めた。

「つーか、どついう反射神経してんだよ。完璧に当たると思ったのによー」

「まだまだ甘いな、新一。俺を誰だと思っているのかな？」

「頭に来るな、オメー」

余裕な笑みを浮かべ、新一の投げつけたボールペンを、くるくると手のひらで器用に回す。その馬鹿にした顔がかなりムカついた。

「って、そんなことはどーでもいい。何、考え込んでたんだ？」

「あー、うん。別に大したことじゃねえから」

「今更そう言うなって。暇だからな。話せよ」

偉そうに言う新一に、快斗はやれやれと肩を竦めた。

「いやさー。三色ボールペンって、どうやれば均等に色を使いきれかなーっと思ってるさ」

「はあっ？」

「ほらー。そーいう顔をする。だから言いたく無かったんだって」

新一の顔が段々呆れの色を濃くしていくのを見て、快斗がやっぱりという雰囲気だった。

「んなもん、使う時にそれぞれ使えば平気だろ？そこまで悩むことか？」

「甘い、甘い、あま〜い！」

「へ？」

新一が納得いかないので反論すると、快斗はオーバーアクションで反撃した。快斗が思ったよりも大きなリアクションで新一は少し後退る。

新一にずっと近寄ると、深刻な表情で解説を始めた。

「大体、三色ボールペンって黒、赤、青だろ？使い方の差はあれ、殆んど青が残っちゃうじゃん」

「だから・・・」

「そう、新一の考え方は自然だ。しかしそれに逆らい、敢えて普段使いで達成できるか考えてたんだよ」

新一の台詞をぶった切って快斗の説明は止まらない。

淀みなく動く口調は留まることを知らず、聞いている方も一苦勞だ。特に内容が物凄くくだらなく、物凄く意味の成さない物であるので尚更である。

止まらない快斗を一瞥して、新一は溜め息をついたのだった。

目次

珍しく外で行きあつた快斗と新一。せっかくだからどこかでコーヒーでも、と二人で連れだつて歩いていた。

新一のオススメの喫茶店への通り道を、他和いもない話で盛り上がりながら進む。

すると前方から小学生の乗ったバスとすれ違った。バスにはでかかたスイミングスクールの名前が描いてある。中に乗っている子供達は、プール教室の帰りなのか髪の毛が湿っていたり、タオルキヤップを被っていたりしていた。

あつという間に見えなくなったバスを見送つてから、快斗は新一におもむろに話しかけた。

「あれってプール帰りだよな」

「まあ、そーだろ。髪の毛、湿つてたし、ちつと疲れてたみてえだし」

「そうだよなー。ところで新一。オメーは上手く入れられたのか？」

「あ？」

急に話が変わり、新一は眉間に皺を寄せる。

それは快斗と話しているとたまにあることだった。

快斗は普段、思い付きで話を振ることが多い。推測は難しいことではなかったが、新一にとって面倒臭いことには変わりなかった。

「だからさー、こーゆーやつ」

一発で伝わらなかつたことを残念に思いつつも、快斗はジェスチャーを交えてもう一度言う。今度は思い当たつたのか新一は納得の表情をした。

「あ？ああー。なんだ、それが。目薬射す奴？」
「そうそれ。プールの時とか、必ず何人かはやってたじゃん」

懐かしそうに目を細める快斗を横目で見つっ、新一も昔の記憶を掘り起こす。

たしか小学生の頃、プールのあった日には蘭も学校に持って来ていたことを思い出す。

「あれってさー、少し憧れたんだよね。うーん、懐かしい」

「はっ。どーせ、お前のことだ。目薬によくいたずらしたんだろ？」

新一のその言葉に、快斗は勢いよく頷いた。

「まっ、イタズラっていうか何ていうか。目薬の色を変化させたり、中からビー玉を出したりとかはやったけどな」

「ほー」

「やっぱり基本は身近な物を使うことだよな。青子なんか、目薬の液が空中に留まる奴をやったら、目を丸くして驚いたもんなあ」

それは俺も見てみたかった、と密かに新一は思う。

空中に液体を留めることは、結構難易度が高い気がする。何でもない風に快斗は言っているが苦労はしているはずだ。

「まっ、俺は目薬何て使わなかったけどな」

「俺も、プールの時は使わなかったな。ものもらいやった時はやってたけど」

「何か下手くそそうだよな、新一は」

「ウルセー。余計なお世話だ」

余計な口を挟んだ快斗に軽口を返しながら、新一はその記憶を探る。確かになかなか目に入らなくて苦労したのだった。そのたびに蘭とあーだこーだ言いながらやっていたなあ、と思い出す。

「今度、そのマジック見せるよ」

「じゃーねーな。期待してるよ。パワーアップさせて見せてやるぜ」

快斗と新一はそう言うと、お目当ての喫茶店に入っていったのだった。

勝負の行方

工藤邸のリビングは妙な緊張感に満ちていた。その中心にいるのは快斗と新一。

その様子に驚きつつも、光彦は静かにリビングの扉を閉めた。

「あの、新一お兄さんと快斗お兄さんは何をやっているんでしょう？」

「ああ、ただの意地の張り合いよ。どちらがより高く積めるか競っているんですって」

二人が真剣に削っていない鉛筆を積み上げているのを見て、光彦は思わず呟いていた。その言葉に、先程から部屋にいた哀が呆れたように言葉を返す。

「そ、そうなんですか」

「ええ、くだらないわよね」

「あ、あはは・・・」

何か言いたくても何も思いがけず苦笑いする光彦。そんな彼を気にすることなく哀は妙にご機嫌な雰囲気も纏っていた。

「そうそう、黒羽くんが用意してくれたものがここにあるからいらっしやいな」

「えっと、じゃあ、遠慮なく」

光彦はそう言いつつ哀の側へよる。テーブルの上には、光彦の分の紅茶とお茶菓子が並んでいた。借りてきた本をテーブルの上に置いて、ティーカップを手にとる。

快斗と新一の方を見ると、既に両方とも五本目を乗せようとしているところだった。

「どうやら、五本目を乗せるようですね」

「そうね。器用よねえ、本当に」

新一、哀、光彦が見守る中で快斗はゆっくりと鉛筆を持ち上げた。そしてさっと乗せる。

綺麗に鉛筆の上に乗ったのを見て、快斗はちろりと舌で唇を舐める。緊張の一瞬。手を離すと、下の方が少しふらついてしまった。

倒れるかつ、と息を飲んで見つめる哀を除く三人。

どのくらいたっただろうか。

ピンツと張った空気がふっと緩む。

快斗の手が離れると、そこにはしっかりと立った鉛筆の姿があった。おおっと光彦も思わず身を乗り出す。快斗と新一としっかりと目が合い、何かを通じあった気がした。

妙に興奮してしまい、ドキドキと高鳴る鼓動を抑えるために紅茶を一口飲む。口の中をふんわりといい香りが広がっていった。

それからふと正面にいた哀のことを思い出す。哀は面白そうな目で光彦を見つめていた。

「な、何でしょう?」

「ふふつ。貴方も物好きのお仲間さんなのね」

「あー、えつと、その・・・」

なんだか恥ずかしくなって乾いた笑い声をあげる。しかし哀はこくりと紅茶に口をつけ、新一の方に視線を戻したのだった。

それにつられる様に光彦も視線を新一に向ける。

そこには話し掛けるのも戸惑うほど、物凄く集中している新一がいた。

震えそうになる指先を意思の力でねじ伏せ、鉛筆をゆっくりと近づけている。

「知っているかしら？」

「えっ？」

「彼らがこうなった発端を」

新一の持った鉛筆がそつと乗った。

「冷凍庫に入っている、最後の一本のアイスを賭けているのよ」

「へ？」

「くだらないわよね」

哀がそう言った瞬間。

ガッシャーんという妙に高い音と共に、新一の鉛筆が倒れたのだった。

その結果に一喜一憂している快斗と新一を見て、哀はもう一度呟く。その声は表情とは裏腹に面白がっていた。

「くだらないわね」

光彦はそれに返す言葉を持たなかった。

馴染みのお花屋さん（前書き）

四話分のなんちゃって推理？物です。
かなり強引に展開するので注意。

馴染みのお花屋さん

色とりどりの草木や花が明るい店内に溢れている。外観はレンガ作り。元気な看板娘と店主の老人が経営する、こじんまりとしながらもなかなかの品揃えを誇る花屋だった。

娘が水撒きをしていると新たな客がやってきた。よく似た雰囲気二人組だった。

片方は娘も見知っている。日本公演の時は必ず指名してくれるマジシャンの黒羽快斗だ。丁度一週間前に花の仕入れを頼む連絡を受けていた。

「いらっしやいませ、快斗さん。今日はお連れ様も一緒なんですね」

「こんにちは、お嬢さん。こっちは俺の友人、工藤新一さ」

「どうも、工藤新一です。素敵なお店ですね」

「まあ、ありがとうございます」

快斗は簡単に新一を紹介する。新一が店を見回して素直な感想を言うつと、娘は無邪気に喜んだ。

「快斗さん、祖父が店内にいますので案内しますね。工藤様はどうなさいますか？」

「あー、終わるまで店内を見てるよ」

「そ？こっちにいってもいいけど？」

新一のその言葉に一応快斗は誘いをかける。

しかし新一が店内に飾られている草花に意識がいつているのは、一目瞭然だ。

「いや、行かねえ。それに滅多に見られないものも多そうだ」

そう言ってまたぐるりと店を見回す。持ち前の好奇心が疼いているようだ。

「ぷぷ。新一は俺より植物を選ぶんだな」

「ウルセー。そのニヤケ顔、何とかしやがれ」

「怒っちゃやーよ？新ちゃん」

「だーかーらー、声真似はやめろって！」

「ふふつ、お二人とも、仲がよろしいんですね」

娘は二人の掛け合いに思わずといったように笑い声をあげた。

そんな中、快斗はニヤニヤと新一を伺う。新一はかなり恥ずかしそうだった。

「それでは快斗さん、こちらへどうぞ。工藤様、店内にはガーデングチエアがありますので、よろしければお使いください」

「ああ、ありがとうございます。それと」

「はい？」

不思議そうな顔をしている娘に、新一は少しくすぐったそうな様子で言った。

「様付けはちょっと勘弁してほしいんだけど」

「ですが・・・」

困惑気味の娘に快斗が重ねて言う。

「大丈夫だって。新一でいいんだから、さ。なんなら新ちゃんでも」

「快斗っ！」

茶化す快斗を慌てて黙らせて、新一は娘を伺う。

「でしたら、新一、さん、でいいでしょうか？」

「ああ、サンキュッ」

娘の妥協案に、様付けされるよりはと承諾を受けた新一に、快斗はニヤニヤと笑いかける。何となくムカつくのだが、娘の手前猫を被っている新一だった。

「快斗さん、こちらですわ」

「はいはいっと。じゃ、行ってくんな。新一」

「おう・・・チッ」

快斗が娘の後に付いて店の奥へと消える。すれ違い様に肘鉄を入れようとしたが、簡単に避けられてしまい舌打ちが出る。これ以上ボロが出ないうちにと、新一はゆっくりと店内を見学するのだった。

店主の相談事

快斗が娘に連れられて店の奥に行くと、がっちりとした体格の老人が安楽椅子に腰掛けていた。ゆっくりと椅子を揺らしながらパイプを蒸かしている。

快斗達がこちらにやって来るのが分かると、瞑っていた目を開けた。

「お祖父さん、快斗さんを連れてきました」

「おや、ありがとうございます」

「とんでもないです。あの、お客様が店内に居ますので失礼いたしますね」

「うむ。わかったわい」

「案内ありがと、ね。そうだ、手を出してみて？」

「はい？」

快斗はそう言って娘の出した手に自分のハンカチを乗せる。

不思議そうな顔をした娘にウインクをすると、カウントを始める。

「One two three！」

ポンッ！

「あら？」

「へへっ。これはお礼ね。じーさんと一緒に食べてくれて、母さんが」

快斗がそう言いながらハンカチを取る。すると綺麗にラッピングされたキャラメルが、娘の手の中に鎮座していた。

「まあっ」
「ほっっ」

目の前で起こった鮮やかなマジックに、二人は目を見張った。

「やっぱり、すごいですね。快斗さんは」

「いやはや。こんな所でマジックを見るのは盗一くんの時以来だよ」

二人の誉め言葉に快斗は優雅に一礼してみせた。

そして娘が店先に戻ると商談を始める。30分程で話がまとまると、二人は雑談に入った。

「連れというのは、白馬くんかね？」

「違うよ、じーさん。そんなちゃんけな探偵じゃねー。正真正銘、俺が唯一認めた名探偵さ」

「ほっ」

快斗の言葉に、店主は興味深そうに身を乗り出した。

「だから、じーさんの相談事も完璧に解消してくれるぜ？」

「うーむ、快斗くんがそこまで言うとは。その子のことをかなり買っているじゃないか」

「まーね。あ、このことは内緒だよ」

「はっはっ。分かっておるわい」

そんな快斗の様子に決心がついたらしい。

それから直ぐに新一も呼ぶと、ここだけの話なんだが、と切り出したのだった。

「実はな、最近出るらしいんだな」

「出るって、泥棒？」

不思議そうな顔をした快斗に、店主は少し青ざめながら首を振った。

「そんなものならいいんだがね。これでも腕っぷしはいいほうだし、快斗くんが設置してくれたセキュリティも万全だしな。しかしそうとも思えないんだよ」

「もしかして、足の無い奴？じーさん、そっち系統は全然ダメだもんな」

「ああ。情けないがあ。摩訶不思議な出来事で困っているんだ」「具体的には何かあったのですか？」

今まで黙って話を聞いていた新一が口を挟む。その親身な口調に店主はいくらかほっとしたらしかった。

「一日しかたっていないのに花が枯れてしまったり、肥料がいくつか無くなったり。一つ一つは大したことは無いんだが毎日あると気が滅入るものでねえ」

そう言っただ店主はため息をついた。快斗が新一の方を見ると何か思い付いたのか考え込んでいる。

「大事にはしたくないんだが、何とかならないだろうか？」

「ま、なんとかなるんじゃないか」

「取り敢えず、セキュリティを確認させてもらいましょうか」

新一がそう言い、三人は連れだっておかしなことの起こる現場へと向かったのだった。

現場の状況

三人はまず肥料が無くなったという場所にやって来た。そこは店の隣から入ることの出来るガーデンングのスペースである。色とりどりの薔薇が水滴を光らせていた。

「ここなんだが。無くなったのはあそこに積んである肥料の奴だね」「何時ごろか分かります？」

「確か、夕方に一度見たときにはあつたが。翌朝、薔薇の手入れをしに来たときには無かつたんだよ」

「失礼ですが何故気付けたんです？」

「ああ。丁度その肥料が必要だったからな。数は覚えていたんだよ」「なるほど」

辺りをざっと見回して新一は考え込む。快斗の方はそこに仕掛けてある監視カメラの様子がチェック出来るようにしていた。

「新一。準備出来たよ」

「ああ」

快斗の渡した画面をじっくりと見つめる。流石快斗が造ったという監視カメラである。綺麗な画像が夜の闇にも関わらず、かなり鮮明に写っていた。

そこには怪しい人影などは無い。そのことを確認してから、新一は快斗に画面を返したのだった。

「見たところ、怪しい奴はいなそうだな」

「ああ。しかし、ここに罠があるって、よく気付いたもんだよ」

快斗の言葉に、新一はそこを見る。監視カメラが、デンと構えているのが目に入り、畏は一見して分からない所に仕掛けられていた。

「これに引つ掛からないとは、なかなかやるな」

「いや、解除されてた」

「何っ！」

思いがけない言葉に、新一は驚いた顔をする。快斗はちらっと一瞥してから立ち上がった。

「ま、次行こうぜ」

店主が次に案内したのは、店内の右側から入ることの出来る大きなサンルームだった。ここでも先程と同じようなやり取りが繰り返される。

ついさっきまで水やりをしていた娘は、今はふらりと立ち寄っているお客の相手をしていた。

それを何とはなしに聞きながら、快斗は新一を盗み見る。思考の渦に飛び込んでいるのか、完全に内側へと入り込んでいた。

「快斗くん。ハーブティーでもどうだね」

「あ、貰います！俺、じーさんのお茶好きだから嬉しいな」

「そう言ってくれるとありがたいな。新一くんもどうだね？」

「え？あ、ああ。いただきます」

我に返った新一の返事に、店主は嬉しそうな顔を見ると奥へ引っ込んでいく。

店主が準備をしている間に二人は内緒話の様に話し合った。

「なあ、快斗。どう思う？」

「あー、ちょっと、あからさまだったよな気はするけど」
「犯人、って言っているのかどうか。実行犯はあの人で間違いないな」

新一の目が鋭く光る。

「問題は動機だな」

「ああ。まあ、そこら辺は本人に聞こうじゃないの」

快斗が後ろを振り替える。新一もつられて視線を向けると、今話題に上っていた人物が佇んでいたのだった。

思いがけない贈り物

新一は快斗の後ろに佇んでいる人物が、二人の間に座るのを待つてから口を開く。快斗は柔らかい雰囲気をもとつたまま、その人物に改めて視線を移した。

「あなたがここに来たということは、今回の騒動を認めたと考えていいんですね？」

「俺も驚いたけどな。まさか身近に実行犯がいたなんてさ」

軽く肩を竦めた快斗に、新一が同意するように頷いた。

「ああ。しかもとある人物が妙な細工をしてくれたお陰で、少し変な具合になつていたんですから」

「ま、あなたなら簡単に出来た筈だよな」

「そう。快斗のセキュリティを無効化させることも、店内での犯行？を実行出来ることも。彼が事を大きくしたく無い理由も説明できます」

「という訳なんだけどな？お嬢さん」

快斗の台詞に椅子に座つた人物が身じろきする。

そこに座つていた娘は暫く目を瞑っていたが、気持ちを整理したのか快斗達を見た。

「参りましたわ。私の敗けですね、店長？」

「ははっ。流石は優作くんの息子という訳だ。快斗くんも目が高いじゃないか」

いつの間にか店長はここへ戻ってきていた。新一はある程度思い至

った事があるのか、その言葉に対して驚くことは無かった。
暫くキョトンとしていた快斗は、クスクス笑う娘とご機嫌な店主を
交互に見る。

そして理解出来たのか、おもいつきり納得した顔をした。

「あー、あんたらグルだったってこと？俺のセキュリティを無理矢
理いじくったのもそのせいだな！」

「いや、悪いとは思ってたんだがね。これは盗一くんとの約束だっ
たのんだよ」

「親父の？」

「盗一さん、ですか？」

思いがけない言葉に、快斗と新一は首をかしげる。その様子を面白
そうに見ながら、今度は娘が言った。

「そうなんです。自分の息子がこの店に友人を連れてきたら、一発
からかって欲しいって」

「そうなんだな。それでちょっとおかしな事件を作り上げたという
訳なんだよ」

「ったく。親父もなーに、考えてんだ？」

快斗のぼやきには敢えて触れずに、新一は冷めてしまったハーブテ
ィーをすすする。独特の匂いが鼻を通り抜け、後味がすっきりとして
いる。

「それでだね、快斗くん。これを盗一さんから預かっているんだ。
からかってやった後は、渡してやって欲しいって」

「えっ？」

突然の出来事に驚きつつも、店主から渡された三冊の大学ノートを

受け取った。かなりぼろぼろで表紙には、かすれた筆記体で黒羽盗一と書かれていた。

「これって・・・」

「そう、盗一くんの書いたものだよ。彼は多趣味でねえ。花についての物だけなんだけど、息子に向けて書いたと言っていたんだよ」

快斗はその言葉に頷きつつも、そっとページを捲る。懐かしいようなそらでないような、複雑な心地だった。

ほっと詰めていた息を吐き出すと、新一と目があった。

「良かったじゃんか、盗一さんからの贈り物」

「そーだな」

快斗は目を閉じて、もう一度「そうだな」と呟くのだった。

思いがけない贈り物（後書き）

一日遅れで何とか書けました。四部作の完成です。

秒針の子守唄

明日の小規模なショーに出るために泊まっている、とあるホテルの一室。その中で快斗は一人、ベッドに転がりながらのんびりしていた。

ベッドの近くにあるサイドテーブルの上には、一組のランプとウイスキーのボトル。その内、三本程が既に空になっていた。

カランと手にしていたグラスを鳴らし、窓を見つめる。しかしきちりと閉じられたカーテンが邪魔で、その窓から見える夜景が見れなかった。

そのまま目だけを上へと動かす。四角い電灯までたどってから、手元のグラスを傾けて一口に飲み干した。薄くなったそれはあまり美味いとは感じられなかった。

「なんか、変な感じだな」

いつも腕につけている腕時計の存在が、今の快斗には妙に気になった。チクタクという音がやたらと耳に入ってくる。

「マコちゃんはアテネで撮影に行っちゃっているし。新一の方は講義の真っ最中だしな」

ポンと携帯を出しては消すというのを繰り返しながら、快斗の独り言は続く。

「基礎練習はさっき三時間やったし、特許の書類は終わったし。明日の予定も完璧だし。やることはもうないけど、なんか寝るのもつたいないしな」

ちらつと時計を見て、溜め息を1つ。先程から余り時間が経過していない。
なんとなく首を振ってから、新たにグラスへウイスキーを注いだ。
これで空き瓶が4本目になる。
もうお酒ストックは無い。これで最後というのが妙に寂しい気がした。

とりあえずコクリとグラスを傾けて中身を飲む。そのまま目の前に持ってきて、中の液体を明かりに透かして見た。
カラン、と氷がグラスに当たる。

そうしてみても、やはり時計の秒針の音が耳についた。
チクタク、チクタクと一定の速さで繰り返される音。ぼんやりと聞いていると、その一定の音が心地好くなってるのが分かった。

気分を変えるように、快斗は一気にグラスの中身を飲み干す。グラスをサイドテーブルに戻すと、勢いをつけて背中からベッドに倒れ込んだ。

ギシリというスプリングね音と共に、快斗の身体を受け止める。もそもそと動き布団の中に入ると、ひよこりと頭を出した。

暫く天井にある電灯を眺める。相変わらず、チクタクという小さな音は聞こえてきていた。

チクタク、チクタク。

同じ速度で秒針は動く。

手探りでスイッチを消すと完全に暗くなった。そのお陰で、余計にその音が強調された気がした。

「ふあゝあ。寝よつと」

快斗は大きな欠伸の後、そう言いながら身体を寝やすい位置へと動かして目を閉じた。

チクタク、チクタク。
チクタク、チクタク。

その音は未だに耳につく。

快斗は音に誘われるかのよつに、とろとろと眠りに着いたのだった。

ベーグル

新一が本を読み終わると、タイミングよく快斗がソファアールへと近づいて来た。先程からキッチンで何か作業をしており、いい匂いを発している物をバスケットに幾つか乗せている。

パタンと本を閉じ、それを邪魔にならないようにテーブルの端に置く。小腹が空いたので、新一は改めて快斗の持ってきた物に目を向けた。

「パンか」

「そ。スタッフの一人が持ってきてくれたやつと、おんなじの。俺の中で大ヒットした、手作りのベーグル」

「へえ。旨そうだな」

今回は本の出来が満足のいくものだったようで、新一は気分が良かった。快斗は美味しそうなベーグルの匂いにご機嫌だ。

「俺にも一つ」

「もー、しゃーねーな。ほね。スタンダードなプレーンの奴」

「サンキュッ」

少し温かくされたベーグルを受け取り、口に入れる。食欲をそそる匂いに期待を膨らませて、独特の食感に舌つつみを打つ。仄かな甘味と噛みごたえのある固さに、新一は満足そうに笑顔を見せた。

「旨いじゃんか」

「だろ」

軽く驚きながらも新一はもう一口食べる。快斗はその様子に嬉しそ

うに言葉を重ねた。

「わざわざ朝から並ぶのも、これを食べることを考えれば苦じゃねーよな。すげー行列になるから早起きしないといけないし」

「並んでんのかよ、オメー。よく騒ぎにならないな」

「やだなー、新一っつてば。俺だつてちゃんとそのところは考えてるっつてば」

「はっ、どーだか」

新一の呆れた言葉に対し、快斗は当然という顔をして応える。

「案外気付かないもんだつて。それにこっちではそこまで一般向けな顔はしてないし」

「嘘こけ」

「本当だぜ？海外の方が声もよく掛けられるし」

そう言つてパクリと快斗が口に運んだのは、新一が食べているベールよりも少し色が薄い。中にクリームをはさんであるのか、快斗の口の端に付いていた。

「オメーのは何味なんだ？」

「ハチミツが混ぜてある奴にメロンクリームを挟んである」

「うわ、甘そうだな」

「まあねー。でも甘いのも平気だし。なかなか旨いんだよな」

「へえー」

幸せ一杯という顔でベールにかぶり付き、ペロリと端に付いたクリームを舐めとる。モゴモゴと噛み締めながら、入れてきた紅茶を手に持つ。じんわりとした温かさが気持ち良かった。

パクリと半分近くベールを食べ、新一はコーヒーに手を伸ばす。

冷めてしまったのか余り美味しくなかったようだった。

それに気が付いた快斗が新しいコーヒーを手渡す。それは丁度持っていた缶のコーヒーだった。

1つ目のベーグルを直ぐに食べ終わった快斗は、2つ目にとりかか

る。工藤邸のリビングでは、ひたすらベーグルを食べる二人が居るのだった。

「やっぱ、旨いなあ」

「これはいけるな」

時折快斗や新一の口からベーグルに対する感想が零れ落ちるのだった。

コーヒーを飲みながら

湯気をたてたコーヒーが、コトンと音をたててテーブルに置かれた。快斗はそれを横目に見つつ、キーボードを使って馴れた作業で打ち込んでいく。画面には細かい図面が立体的に映っていた。

「ぼっちゃま、休憩にしたらいかがでしょう？」

「んー、ちよつと待ってー。これ打ち込んだらキリがいいから」

寺井の言葉に返事を返しながら、快斗はものすごい速さで指を動かしていく。

暫くして作業が終わったのか、キーボードから手を離して、コキリと首を鳴らした。それからまだ湯気を立てているコーヒーの入ったカップを手取る。両手で抱えるように持つと、じんわりとした温かさが手のひらに染み込んでいった。

「ふう、大体はこんなもんかな」

「お疲れ様でございます。宜しければ、クッキーもいかがでしょう？」

「おっ、サンキュー。ジイちゃん」

寺井の差し出した皿には、アーモンドが練りこまれたスティック状のクッキーが並んでいた。

その内の一枚を摘まんで口に運ぶ。香ばしい香りと、しっかりとした歯ごたえでなかなか美味しかった。

「ん、旨い。流石はジイちゃん。分かってる」

「気に入って頂けた様で、何よりです。快斗ぼっちゃまは甘いものがお好きでしたから」

寺井は快斗の満足そうな表情を見て、懐かしそうに目を細めた。大方小さい頃の快斗でも思い出しているのだろう。そんな寺井に快斗も過去を少し思いおこした。

「うん、まあね」

「しかし、コーヒ―はブラックなんですから。そこは月日が経ったと分かります。感慨ぶかいものですな」

「そーか？」

「はい」

その寺井の言葉に、快斗は生返事を返す。正直、そういうものは余りに気にしない質だった。

快斗はもう一度、画面に目を戻しながらも、ゴクリとコーヒ―を口に入れる。

寺井の入れたコーヒ―はかなりの物で、良い香りと独特の苦味が混じりあい、何とも言えずに美味しく感じた。少しばかり冷めてしまった様だが、快斗には丁度良い温度だった。

もう一口、ゴクリと飲んでからカップをテーブルに置く。クッキーを口に加えながら、先程打ち込んだデータを見直し始めた。

「今回お造りしているのは、かなり大がかりな物なんですなえ」

「モガモ、ホガホガ」

「ぼっちやま、食べ終わってからでよろしいですよ？」

寺井は苦笑しながら快斗に言う。快斗はクッキーを飲み込んでから、改めて先程の言葉を口に出した。

「そつだぜ、ジイちゃん。野外でやるのは久々だから腕がなるよな」

「寺井も今から楽しみです。ぼっちゃんの発想は、かなり奇抜ですから」

「なんか誉められた気がしねーな」

肩を竦めた快斗に対して、寺井は急に心配になってきたのか今まで何回も言ってきた内容を口にする。

その言葉に相槌を打ちながら、快斗はすっかりぬるくなってしまったコーヒーを飲み干すのだった。

強盗犯の誤算

24時間、年中無休。どこに行っても、どこかしらに必ずある物。闇夜に馴れた目には眩しすぎる、眩い照明。

快斗は今、コンビニへとやって来ていた。

ふあ、と大きな欠伸をしてから扉を潜る。つい数時間前までは、お隣の国、韓国でかなりハードなスケジュールをこなしてきたので少々疲れていた。

日本に降り立ち、飛行機の都合で空港にほど近いホテルで休むことになり、翌日からはカナダへと飛び立つ。その為には早目に就寝した方がいいのだが、妙に小腹が空いた為、こうしてコンビニへとやって来たのだった。

真夜中ということもあり、快斗の他には客は一人もいない。レジにはやる気のなさそうな茶髪で長髪の男が一人、ぼんやりとつつ立っていた。

とりあえず快斗は甘い物をいくつかと、コーラを一本籠に放り込む。暫く悩んでから、スナック菓子も幾つか入れた。その後も陳列棚を巡り、目ぼしい商品をチェックする。

その時、新たな客が入って来た。顔をサングラスやマスクで覆っている。見るからに怪しい人物だった。

「強盗だつたりして」

快斗は冗談で呟く。

するとその男の後から、同じような格好をした金髪の男二人も入ってきた。おいおいと快斗がばれないように観察していると、その内の一人が突然出刃包丁を店員に突き出す。

快斗の考えたとおりの展開になったのだった。

「手前ら、動くんじゃねえぞ！コイツでブスリと逝きたくなかったらな」

「さっさと金をつめろよ。スピードが大事だからな」

「兄ちゃん、災難だったな。妙なまねすんじゃねえぞ」

「ひっ、ひいいい」

店員は突きつけられた包丁にビビリ、へなへなと腰を抜かす。その様子を見ていた金髪の男がスパナで店員の頭を殴りつけ気絶させた。それから二人でレジの金を袋に詰めだす。その手際によさに快斗は感心するのだった。その時商品を一つ落としてしまい、三人目が快斗の存在に気が付く。間抜けなことに、彼らは奥のほうにいた快斗の存在を知らずに犯行を行ったのだった。

「ちっ。おい、テメエ。こっちに来いや」

「隠れていやがったとは、ふてえ野郎だ。何とかのしちまいな！」

「乱暴は困るんだけどな」

快斗は店員と強盗犯を交互に見て、野暮ったそうに頭を掻いた。その緊張感の無さに金髪の一人がさらに脅すように喚く。

「痛い目にあいたかねえだろうが！バカにしてんのか、テメエ！」

正直、相手にするのも面倒な相手だ。しかしこのままにしておくわけにもいかないだろう。

相手は三流。初犯ではなさそうだったが大したことは無い。

「何とか言いやがれ、この野郎！」

「うるさいなあ。怒鳴るんじゃねえって」

「な、何っ？」

次の瞬間。

ドカバキベコ！

「うわあ〜！」

「ぎゃー！」

「どしえー！」

相手がおかを仕掛ける前に、快斗は強盗犯をすべて倒したのだった。ぴくぴくと痙攣している男たちの背に足を乗せて、過去に鍛えた殺気を出して凄む。

「なんか言っただか？三流さんよお」

「な、な、な」

「ケンカを売る相手を間違えないほうがいいぜ」

「うつつ。何もんだ、テメエ」

「そいつはお前らが知るこっちゃねえよ。あえて言うなら・・・」

快斗はパチンと指を鳴らす。

「唯のしがないマジシャンさ」

その言葉に驚いて身を起こそうとする。

しかしそれはできなかった。なぜなら体は縄で縛られていたからである。

「んじゃま、おやすみ〜」

快斗は驚きに固まる三人に、プシューとスプレーを吹きかけたのだった。

大道芸人

透き通った秋空の下、新一は一人、とある公園の近くを通りかかった。本日も例に漏れず事件を見事に解決した帰り道だった。

多少かつちりした服を着ている新一は心無しか沈んでいる様にも見える。うつむき加減で角を曲がった。

すると軽快な音楽と共に、感嘆のどよめきが耳に入ってきた。その声の大きさに新一は辺りを見る。公園に植えてある木々の隙間から人だかりがあるのが解った。

どうやら誰かが大道芸をしているらしい。壁になっている人々の雰囲気から、何か凄いことをしていたような感じだった。

何となく気になってしまい、新一はその大道芸をしている所まで近づいていく。こういった物に惹かれるように見に行くのは、随分と久しぶりな気がした。

蘭辺りが知ったらさぞ驚いた顔をされるだろうと思うと、少しくすぐったかった。

大道芸人は栗色の髪をボブカットにした女性の姿をしていた。マジックをメインにしているらしく、ボールを手を使わずに持ち上げたりなどしている。コツさえ知っていれば、誰でもできる初歩的な物ばかりだった。

しかし彼女の表情はキラキラと輝いていて、マジックを披露するのが楽しくて仕方ない様子だ。簡単な物だけに単調になりがちな演出もすっかりと決まっている。すでにどこかから声がかかっていてもおかしくないくらい、熟練した腕前だった。

マジックはそろそろ終わりに差し掛かるのか、音楽が佳境に入ってくる。それに合わせて、彼女は先程から己の思いがままに操っていたトランプを一つにまとめる。

最後に派手な演出を終えると、拍手喝采の中、優雅に一礼してみせた。

その時、かちりという音がして新一と女性の目があった気がした。時間にして一秒にも満たなかっただろう。

しかしその瞳を見て、新一はある確信を抱いたのだった。

そして大喝采の中、大道芸は終了となる。観客からチップを受け取り終わって彼女が一人になった所で、新一は呆れたように声をかけた。

「なかなかの物だったぜ、快斗」

「なかなかじゃない。最高だっただろ？新一！」

女性の顔は相変わらず優しく微笑んでいたが、そこから発する声は明らかに男の声だった。

「しっかし、珍しいじゃん。新一が大道芸を見に来るなんて」

「ああ、たまにはな。つか、その声でオメーの声はやめる。気味が悪い」

「そーか？それならマスク、とるけどよ」

そう言っただけで顔が赤くなる。その顔の下からはいたずらっ子の表情をした快斗が笑っていた。その様子に新一はため息を吐く。

「何やってんだよ、オメーは」

「シークレットショーってやつかな？たまにやってんだよね」

「何でだよ」

「世間と俺がずれないように、さ」

そう言った快斗は妙に大人びて見えて、新一は少しだけ快斗を見直したのだった。

「それに誰かを元氣付けるためにもね」

「バー口。余計なお節介じゃねーか？」

快斗の言葉に照れくささを感じる新一だった。

電車で揺られて

ガタンゴトン。
ガタンゴトン。

のどかな田園風景が広がる田舎を、一両編成の電車が走る。特に遮るものが無く、時折古い木造家屋がポツリ、ポツリとあるだけだった。

「見事に何にもねー場所だな」

「そうかなー？良いところだと思うよ」

「お子様な青子にびったりじゃねーか」

「もう！失礼ね」

単調な景色に飽きてきた快斗が、窓に肘を付きながらそうぼやく。一緒に座席にいた青子は、そんな快斗にぶくつと頬を膨らませた。しかし何だかんだ言いながらも楽しみにしている快斗の様子に、その気分も吹っ飛んでしまう。楽しみなのは青子も同じだったからだ。

「へへっ、楽しみだな」

「そーかよ、ったく」

快斗は呆れた視線を送った後、また景色を見ている。そんな彼の膝には、場違いのように華やかな深紅の薔薇の花束が乗っていた。田舎の駅でも車掌さんにぎよつとした顔をされた代物だった。この辺境と呼んで差し支えない、こののどかな場所には少々処ではなく浮いている。

しかし青子は快斗に持ってきて貰って良かったと思っていた。その職業柄か、本来の気質故か、快斗薔薇の花束を持っていても違和感

が無い。仲良くなったお婆さんがこれを受けとる時のことを想像して、青子はまたもやにやけてしまう。サプライズは大成功しそうな予感がした。

そもそも快斗のマジックのファンだというお婆さんにお世話になったのは、快斗も一緒だった。夏休みには何回か快斗と二人っきりで遊びに行ったこともある。そのたびにニコニコ顔で出迎えてくれたのだった。

「元気かなー？お婆ちゃん。娘さんの話だと、普段は寝たきりって言ってたけど」

「青子が言ってるばーさんって、おきぬさんのことだろ？たしかオメーの親父の両親の、ご近所さん」

「そうだよ？忘れちゃった？」

「んな訳あるかつ！確認だよ、か・く・に・ん。確か何回か二人で遊びに行ったよな」

懐かしそうな快斗に何だかんだ嬉しくなり、青子はウキウキと座り直す。

高校を中退して海外へと旅立った幼馴染みは、いつの間にか異国の地で有名人になっていた。最近では日本にいる時間も増えてはいたが、忙しいのか以前のように一緒にいることは殆んど無くなった。それを寂しいと思う時もあったが、素直に嬉しくも思う。夢を追いかけて、掴みとり、新たな目標に向かって進む姿は凄いと感じる。

ただ青子からかう時なんかは昔の面影を見せる場面もあって。今も青子に付き合っ隣に座っている様子は以前と全く変わらない。結局、快斗は快斗なんだと結論付ける青子だった。

「おっ、あの駅じゃねーか？」

「えっ？どれのこと？」

「あれだよ、あれ。あ、オメーのじーさん、ばーさんもいんぞっ」

「本当だ。迎えに来てくれたんだ」
「だなっ」

二人は顔を見合わせると、にまっと笑うのだった。

秋の大運動会、開幕（前書き）

少年探偵団たちの運動会の風景です。三話で完結です。

秋の大運動会、開幕

少し雲は多いが、過ごしやすいとある休日。小学校は普段の様子から様変りした姿をしていた。

屋上から張られた万国旗や、校庭に並べられた椅子の数々。トラックを囲むようにロープが張られ、大勢の人々が集まっている。

そう、本日は探偵団の皆が通う小学校でのイベント、運動会を開催する日だった。

快斗と新一は探偵団の子供達に誘われて、ここに来ている。観戦する場所は阿笠博士と同じ場所にすることを決めていた。

「おっ、やってる、やってる。いやー、懐かしーな、まったくよおー！」

校門から中に入ると、神妙な声で選手宣誓をしている子供の声が快斗の耳に入ってきた。快斗が通っていた小学校とは運営方法などがまた違った作りになっている。若干、台詞等の言い回しが、微妙に違っているのも面白い。

そうやって会場の雰囲気を楽しみながら、快斗はキョロキョロと辺りを見回す。

新一達とは、校庭の中で落ち合うことになっていた。

「あっ、いたいた！こっち、こっち。新一！」

「おー、久しぶり」

快斗が新一を見つけて声をあげる。向こうもすぐに気が付いた。

こういう時、新一はかなり目立つので便利である。本人は自覚していないが妙に人を惹き付けるのだ。快斗もそうだが、こちらは自覚をしている。周りの気配に同化するのが上手いので、本気になれば

そこにいることを誰にも悟らせないぐらいは簡単だった。

「一応、お疲れさん。いつ戻ったんだ？」

「午前様。だから、あんま寝てなくって」

「無理しなくても良かったんじゃないよ？快斗くん」

その言葉を耳に挟んで、阿笠は心配そうに快斗の顔を覗きこんだ。

「大丈夫ですよ、博士。あ、最初の競技が始まるみたいっすね」

「おお、そうじゃな」

「徒競走か。速い奴はいるのか？」

プログラムを片手に新一は校庭を覗きこむ。トラックにゼッケンを着けた子供達が並んだ。どうやら中学年の子供のようだ。

快斗達は木陰の一番競技が見易い位置にいたので、はつきりと見える。快斗が取り出したスナック菓子をつまみながら、のほほんと観戦をする。その用意のよさに呆れながらも、新一は一つ貰う。

明るい音楽が流れ、パンツという乾いた音と共に一斉に子供達が飛び出した。そこそこの速さでゴールしたのを見届けるが、新一は不満そうな顔だ。

「なんだよ、あれ。最近のガキはおせーな」

「まあまあ、こんなもんだって」

「俺が現役の頃はもつと速い奴はたくさんいたぞ！なってないぜ」

その台詞に快斗達は顔を見合わせた。そりゃ新一は、小さな頃からサッカーで体力をつけていたんだから当たり前だろうと。きつと優作さんは、小学生の新一相手にとことん教え込んだのだろう。

快斗がそう考えているとは知らず、新一は話を振ってきた。

「オメーも当然一等だったんだろ？」

「あ、ああ」

そう言われて記憶を探ると、何故かどんな場面でもマジックで運動会を賑わせたことしか浮かんでこない。あの頃は父親のマジックに近づきたくて、暇さえあればマジックをやっていたからだろう。

あの頃からあんまり変わっていない生活に、ちよっとくすぐったくなる快斗だった。

障害物競争にて

快斗達が己の過去に話を咲かせている中、プログラムは順調に進んで行く。

そして次は探偵団が出場する障害物競争の番となった。しかし順番待ちをしている探偵団のメンバーは臆した様子は全くない。

歩美は隣の女の子と小声で話しているし、元太と光彦はそれぞれキョロキョロと辺りを見回している。哀はというと、いつもの表情で黙って順番待ちをしていた。しかしこちらからでも、この独特の雰囲気や高揚感を存分に楽しんでいるのが分かった。

「あいつらは？・・・あそこか」。全然いつもどおりでつまんねーな」

「でも、何時もよりテンションは高いみたいだ」

「あー、灰原が恐いな、そりゃ」

新一がそう呟き、快斗の方を見る。

するとビデオカメラをスタンバイした阿笠と、デジタルカメラを装備した快斗がいた。既に撮影が始まっているようで、パシャパシャと軽い音がする。

その気合いの入れように、新一は呆れたように肩を竦めた。哀も大変だと、己の過去を振り返りつつも他人事のように思う。

そうしている内に、歩美は目敏く新一達に気が付いた。哀や他の探偵団に教えて、大きく手を振る。快斗が大袈裟に振り替えずと、哀以外の皆は嬉しそうに笑って手を振り替えした。歩美に引っ張られるようにして一緒に手を振る哀は、なかなか複雑そうな顔をしていた。

そして競技が開始する。

「おおー。最初は歩美ちゃんじゃん。なかなか足、速いな。しかも器用」

「あ、一等」

一番にテープを切って誇らしげなその笑顔をしっかりと写しながら、快斗は感心したように感想を言う。新一も予想通りだったのか納得の表情だ。

「元太と光彦は同じレースか。色は赤と白。どうなるか楽しみだ」

「あつ、痛つ。光彦、平均台で落ちたぞ。元太はピンポン玉運びで苦戦してんなー」

三等、四等と光彦達がゴールする。二人共、快斗の思っていたよりも低い順位で残念だった。

「ま、あいつらしいって言えばそうだけだな」

「そうじゃのう」

新一と阿笠がそう言うのを聞きつつ、快斗はシャッターを押す。そうして二人の悔しそうな顔のアップをしっかりと納めたのだった。

「哀ちゃんは一番最後か」

「あいつ、足つて速いのか？」

「適当に走るとは言っておったがのう」

保護者？三人と探偵団が見守る中、哀はマイペースにスタートラインに立つ。

場所は一番外側。小柄な哀には少々不利だろうか。

「おつ、スタートだ」

「うーん三番手か。しかしなかなか良い位置に着いたな」
「哀くん、頑張るんじゃぞー！」

哀はジャンケンをして勝ったようだった。それで勝ったのなら、平均台や、ハードル、網の下を潜るなどの障害物を避けて走れる。しかし最後のピンポン玉を箸で挟んで行かなくてはならないのが、勝った人だけにあるルールだ。

哀はここまで楽々と進み、先頭に立って走る。

ピンポン玉を箸で掴む。真剣な表情で走るが、玉がツルツと滑ってしまいなかなか前へと進めない。そうしている内に後ろの子が追い付いてきた。

そして、ゴールイン。

結局、二番手でゴールしたのだった。

「良い勝負だったなあ」

「いや、納得いかねえ」

「全くじゃー！」

パチリとカメラに納めながら言った快斗の台詞に、両側からピシヤリと鋭い声が上がったのだった。

お楽しみはこれからです

探偵団達の出場した障害物競争が終わり、快斗は手にしていデジタルカメラを閉まった。これでまた暫くの間は、彼らの出番は無い。未だに哀の障害物競争について熱く語っている二人を放っておいて、快斗は頭の中でプログラムを思い出す。たしか今やっている玉入れの後に、全員競技の綱引きと大玉運びがあっってお昼になるはずだ。

「おい、次は全員競技だぜ。博士もそろそろスタンバイしないと」
「おお、そうじゃな」

その言葉に快斗と阿笠はカメラやビデオのスタンバイをする。そして丁度終わった所でタイミング良く競技が開始した。

綱引きでは元太のリードが上手く働いたのか、彼のいた組が圧勝だった。踏ん張っている顔、誇らしげな顔、そして悔しそうな顔を快斗はカメラに納める。また新一が真剣に魅入っている顔や、阿笠がビデオを回している所も写す。

次の大玉運びでは光彦の作戦勝ちだったようだ。なかなか進まない他の組に対して、スムーズに大玉が動いていく。左右のほうが一番上手いのも一役買っていた。

「なかなかいい感じだったな。それぞれ見せ場もあったし」
「灰原は惜しかったけどなー」

快斗と新一が感想を言い合っていると、放送が入り子供達が解散したのが分かった。

散り散りに、それぞれの家族の所へとやってくる。辺りは一気に騒がしくなった。

「皆は直ぐに来るかの？」

「あ、あれがそうじゃないか？おーい、こっちこっち！」

目敏く気が付いた快斗が大きく手を振る。声は聞こえているのかキヨロキヨロしている歩美達に、快斗は分かりやすく行動を起こした。

「よーし、赤紫。皆を案内してくれ」

ポンスと乾いた音と共に、一羽のハトを出して空へと飛ばす。彼女は任せなさいと快斗の頭上を一周りして、探偵団の方へと羽ばたいていった。

「いつもそういうのを仕込んでるのかよ」

「あー、彼女は沢山人がいる所が大好きなんだよ。どーしても来たと言って言うからさー」

「あーそうかい」

そう呟く新一を気にすることなく、快斗は白い布を一枚取り出した。丁度子供達もシートの方へとやってくる。何をやるのかとわくわくと快斗の手元に注目していた。そんな彼らにニコリと笑い、合図をする。

「One、two、three！」

「わああー、おいしそう！」

「っーか、こんなもん、いつ準備してたんだよ」

「それは企業秘密ってやつさ」

布を退かすとそこには蓋まで取れたお弁当が並んでいた。それぞれ好みの飲み物まで用意してある徹底ぶりだ。新一のつつこみも軽くスルーさせる。

「ま、お稲荷さんにのり巻きか。定番つちや、定番だな」

「あら、このお稲荷さん、美味しいわね」

「本当じゃのう」

「あつ、これ、サッカーボールのマークです」

「こっちは仮面ライダーだ！」

「すーい」

子供達は歓声を上げてのり巻きに手を伸ばす。

運動会はやっと前半戦が終わったばかり。快斗の弁当に舌づつみを打ちながらも、午後の競技に思いを馳せるのだった。

ドングリ

日射しが段々と短くなって来ていたある日の午後。柔らかな秋の陽気に誘われて、快斗はショーの準備で慌ただしい会場から抜け出していた。

気の向くままに、会場の建物の周りを囲んでいる木々の間を散策する。足元で乾いた落ち葉がカサカサと音をたてる。

すこし肌寒いくらいの風が肌に当たり気持ちよかった。

快斗は気分良く綺麗な青空を見上げる。

「いー天気！秋晴れだよなー」

つい独り言が漏れ出る。

うーん、と伸びを一つして、また歩きだそうとした時に足先で何かを蹴っ飛ばした感触がした。

違和感を覚えて音の出どころを探す。コロコロと乾いた音を鳴らしながら転がっていき、落ち葉の影に隠れたそれを快斗は思わずしゃがみこんで見届ける。

ドングリだった。

改めて辺りの地面を注意深く眺めて見ると、さっきまでは気が付かなかった小さな木の実が目についた。コナラやクヌギ、シイの実など色々な木の実がある。残念ながらマツボックリだけは、近くに松が無いのか見当たらなかった。

「おー、秋だな。帽子を被っている奴も、なかなか良いもんだな」

快斗は思わずしゃがみこんで、ドングリの付いている枝を一つ摘まみあげる。細い枝から折れたのか、お行儀良く並んだコナラの実に

頬が弛んでしまう。なんだか並んでいるドングリの性格が表れているようだった。

こうやって秋を感じるのも、久しぶりだからだろうか。

快斗は夢中になって、目についたものから拾い集めることに決めた。なんだかかくれんぼをしているようで、ついムキになってしまっつう。

「あ、穴あきじゃん。こっちは半分以上土に埋まってるし」

暫くして両手一杯にドングリを拾った所で、快斗はふっと視線を上げた。太陽が動いていて、かなりの間ここに居たことがわかる。そう思った瞬間、快斗のポケットがブルブルと震えた。片眉を上げて、快斗はそこから携帯電話を取り出す。寺井からのメールで、そろそろ戻ってきてほしいという催促の内容だった。

ボタンと携帯電話を閉じて、手のひらにあるドングリを見る。これだけあれば今回のマジックショーで使えるだろう。子供をアシスタントに使う予定だったから余計に。

「なーんか、いい拾い物したな」

思わずニンマリと笑って、快斗は手のひらにあるドングリを見つめる。見てくれや使い勝手の良い奴を必要な分だけ素早く選別する。

残りは、ちよっと名残惜しかったが地面にばらまいた。

カラコロと落ち葉に当たりながら散らばったドングリを目で追いながら、残したドングリでジャグリングをやる。手の中にあるものをいじってしまうのは、既に一種の職業病か。カチカチとドングリ同士が当たる音を聞きながら、マジシャンになるために元来た道へ足を進めるのだった。

勘違い

人通りが少ないとある横道。街灯の下に立っている男が頭上の月を見上げていた。誰かを待っているのか、たまに辺りを見回したりしている。

「あれ、もしかして工藤くんじゃない？」
「そうですね。一人っぽいですけど」

近くで聞き込みをしていた帰り道だった佐藤と高木。新一とは親しい関係を築いている二人は、窓を開けると声を掛けようとした。

「あら？誰か来るわよ」
「本当だ。女の人っぽいですよ」
「やだ、彼女かしら。蘭ちゃんっぽくはないわね」
「佐藤さ〜ん。不謹慎じゃないですか？」
「あら、別にいいじゃない」

面白そうに佐藤が言う。高木もなんだかんだいって気になり、車の窓から透かして見てみる。すると女が段々興奮してきている様子だった。男に食ってかかる剣幕はなかなかのものだ。そんな彼女を新いらしき人物は根気よく話を聞いている。肩に手をおいて何事かを言っているようだった。

「あら？あの人は被害者の彼女じゃない？」
「えっ、本当ですか」

佐藤の目が途端に鋭くなる。今もその家の付近で聞き込みをしていたのだ。被害者の彼女が何軒かで目撃されている。今回の事件の力

ギを握る人物として浮かび上がってきていた。

「でも、工藤さんと何の関係が？」

「まあ、いいわ。早速だけど話を聞きに行きましょう」

佐藤はそう言って車から降りる。その行動に釣られるように高木も降りた所で、二人の間に新たな展開となった。

バシッ。

渴いた音が横道に響く。男の頬が赤くなっている。女の方は自分の手を驚いたように見つめていた。今にも泣き出しそうな雰囲気だ。

「……痛そうですね」

「でも、わざと当たりにいったわね、彼」

「えっ？」

「行くわよ、高木くん」

「あっ、はいっ！」

佐藤と高木が修羅場真っ只中という雰囲気の中にやってくると、今まで背を向けていた男が振り返った。女は二人の突然の登場に驚いたようだった。ペタンと座り込みそうになった所を男に支えられている。

「私達は警察です。お取り込み中の所失礼ですが、話をさせてもらっても？」

「工藤くん、だよな。一応、君にも」

高木の言葉に男は怪訝な顔をする。女の方は警察の言葉を聞いた辺りから、顔が気の毒な程青ざめてきていた。

「お時間は、余りかかりませんので」

そう言った佐藤に、男は申し訳なさそうに言った。

「あの、俺は工藤じゃ無いですよ」

「えっ、そうなのかい？」

驚いた顔の高木に頷くと、名乗りを上げる。

「黒羽快斗です。まあ、新一は俺の友人ですけどね」

「そうなんだ」。ゴメンよ。かなりそっくりだったから」

「気にしてないですよ」

快斗はそう言って笑う。

快斗のその容姿があまりにもそっくりなので、勘違いをしていた二人は思わずまじまじと見つめるのだった。

チャイで一息

コトコト。コトコト。

快斗が鍋で紅茶を煮込んでいると、工藤家の書斎に籠っていた哀がリビングに戻ってきた。手には分厚い本を何冊も抱えている。その表情は、お目当ての物が見つかったらしく、心なしか柔らかかった。

「何を作っているのかしら？」

紅茶と牛乳の柔らかな匂いに誘われるように、哀がキッチンに顔を出す。

「哀ちゃん。お疲れ様。これはチャイっていう飲み物だよ。インドで飲んだ味が忘れられなくてさ」

鍋を覗きながら快斗が言うと、その答えに納得した哀だった。そしてこの間までの快斗のスケジュールを思い出す。有名人な為、情報はそこから中に溢れかえっていた。

「そういえば、この間までそっちの方でマジックショーをしてたわね」

「そうそう。あっちは暑かったな」

哀と雑談をしながら、快斗は手際よく作業を進めていく。牛乳を入れて沸騰直前に火から下ろせば完成だ。茶漉しで濾したものと、快斗特性のスイートポテトをテーブルに並べる。

哀は既に席についていた。快斗の渡した独特の香りのするチャイを両手で持ち上げる。

「どう？ちよつと甘すぎるかな」
「そうね。でも美味しいわ」
「良かった」

哀の反応に快斗はほつと胸を撫で下ろした。自分の分をコクリと一口飲み、ふにやりと表情を崩す。快斗自身、納得のいくできたようだ。

「この風味は何かを入れているのよね？」
「あ、やつば分かる？」
「ええ。多分、生姜じゃないの」
「正解！」

快斗は元気よく声を出してニコニコと笑う。哀はちよつと呆れたように肩を竦めた。

「も、ノリが悪いな！」
「あら、ごめんなさい」
「まあ、そこが哀ちゃんらしいけどね」

coo1って感じ？と快斗は素晴らしい発音で呟く。哀は何事もなかったように、また一口チャイを飲んだ。

「気に入ってくれたようだなによりだけど」
「これも頂いてもいいのかしら？」
「勿論ですとも。甘さ控え目、スイートポテト。どうぞ食べてくださいな」

おどけたように言う快斗を一瞥し、可愛らしい形のスイートポテト

を一つ摘まむ。仄かにバターの香りが口に広がった。

「これもなかなか美味しいわ」

「可愛い〜形でしょ〜？懲り始めるとなかなか奥が深くてさ〜」

「貴方、暇なようね」

「うーん、そうかもね〜」

快斗がいかに形を作るのに苦労したかを話し出すと、哀は呆れたように肩を竦めた。快斗は気にする様子もなく、スイートポテトを摘まんだ。

「ん、うんまい」

満足そうな顔で飲み込むと笑顔を見せる。

それからぼんつと軽い音を出してトランプを取り出す。何気ない仕草でトランプを切りながら、哀のリラックスした表情を眺める。二人のかもしれない雰囲気につられるようにして、快斗の操るトランプは楽しげに手の内で舞う。

こうして工藤邸の家主の知らない所で、また一つ、ゆったりした時間が流れるのだった。

デートの前に

工藤家のキッチンから物音が聞こえてきた。新一と約束があつてやつてきた蘭はそれに気がつき声を掛けた。

「黒羽くん、来てるの？」

「蘭ちゃん。久しぶりだね」

蘭の言葉に快斗の明るい声が答える。快斗は手が放せないのか、キッチンから出てくる気配はなかった。蘭は新一を待つためにソファ―に座る。肝心の相手はまだ姿を見せなかった。

「新一だつたら、もう少して降りてくるよ」。今、シャワー浴びてるから」

「そうなんだ」

「なんか、朝一番から警察に行つてたみたい。俺が来た時にはだれもいなかったから」

蘭はまたすっぱかされた訳ではない事に、ホッと胸を撫で下ろした。いつもより少しだけオシャレをした格好だけにちよつと落ち着かない。一番にこの姿を見て欲しい人は、未だ姿を見せていなかった。

「もしかして、デート？」

「うん。黒羽くん会つのも久しぶりだけど、新一と顔を合わせるのも久しぶりなんだ。大会とか、新一の都合とかでなかなか会えなかったから」

「そっか」。それでアイツ、浮かれてたんだ」

「えっ、新一が？」

思いがけない言葉に蘭は思わず声を上げた。そんな態度にキツチンから笑い声が弾けた。

「もう、そんなに笑わないでよ！」

「いやー。ゴメン、ゴメン。でも、新一のことが大好きなんだね」「く、黒羽くん！」

快斗の台詞に恥ずかしくなった蘭は思わず顔を伏せる。きっと耳まで真っ赤っかなはずだ。

「からかわないでよ、もう」

「拗ねない、拗ねない。女の子は笑顔が一番だよ？」

快斗の朗らかな声に蘭はいつの間にか笑顔になっていた。

しかし恥ずかしさはまだ消えず、新一が早く来ないかとリビングの扉に目をやる。残念ながら新一が来そうな気配はまだなかった。

「新一に会うのが不安だった？」

「うん、少しだけ。でも、なんだか大丈夫に思えてきたよ」

「そう？ならいいけど」

軽い口調で快斗は言葉を返す。蘭は軽くセツトした髪を触りながら、ソファアで身動きをした。

「でも信じられないなあ。浮かれてる新一なんて」

「あー確かに。いつもすかした顔してるもんな」

「口が悪いなあ、黒羽くんは。でも、否定は出来ないかも」

「だろ」

クスクス笑う蘭に快斗は話を続ける。

「ウキウキしてんのが一発でわかったから。ありゃ、推理小説で当たりを引いた時位、機嫌が良かったって」

快斗がそう断言した時だった。

リビングの扉が開かれて新一が入って来た。快斗の言葉が聞こえていたのか、照れているのか頬が赤い。

「かゝいゝと。何、言つてやがる！」

「新一！」

「やっとお出ましか？」

快斗のからかう声と蘭の驚いた声が同時に上がる。

「ら、蘭！あーっと、その、だな」

「早く出ねーと間に合わねーぞー」

快斗の声に新一は慌てたように蘭の手を引っぱった。

「行くぞ、蘭」

「ちよ、ちよっと、新一！もう、待ってよ」

蘭の困った声の後、ガチャンと扉の閉まった音が響く。

「幸せそうだなー、何だかんだ言つても、さ」

誰も居なくなったりリビングに出てきた快斗は、先程まで作っていた物をトレーに乗せて部屋で待っている恋人の元へと急ぐのだった。

只今、営業準備中

山間の自然が豊かなとある田舎の片隅。そこに溶け込むように、口グハウス風の建物が一軒佇んでいた。今回快斗がシヨールを行う老人ホームである。

「こんな山奥じゃ、いざって時、どーすんだ？ビミョーに不便そうだな」

「ですが、生活するのにはなかなか良さそうですよ」

「そーいうもんか？」

快斗はその建物を見上げて呟く。その言葉に寺井は感慨深い様子で言った。

そんな二人に、外へ出ていたお年寄りが気さくに声を掛けてくる。それに愛想良く答えながら中に入ると、広々としたロビーと吹き抜けの天井が目に入ってきた。ある種の旅館のような内装である。

窓際で日向ぼっこをしたり、将棋や碁を打っている人も、ちらほらといた。どのお年寄りも穏やかな顔付きで、なかなか良いところらしかった。

「あの、今回マジックシヨールを企画してくださった、黒羽様でいらつしやいますか」

「ええ、そうです。こっちが助手の寺井。本日は宜しく願いしますね」

「ええ、こちらこそ。本当に、本日はわざわざありがとうございます。私はオーナーの田上と申します」

スーツをビシッと着こなして、フレーム無しの眼鏡を掛けた神経質そうな男が快斗の側にやってくる。笑顔を浮かべながら相手は深々

と頭を下げた。

「早速ですが、会場の方へ案内してもらっても？」

「分かりました。こちらへどうぞ」

「荷物もそこに置かせてもらえます？」

「勿論です。しかし、余り大荷物というわけではなさそうですね」

「ええ。タネは仕込んでありますから」

快斗の笑顔に、それ以上の詮索は野暮だと気付いたのだろう。田上が先頭に立って歩き始めた。快斗と寺井はお互いの顔を見合わしてから、その後を追う。このやり取りは個人に招かれる時程多かった。それだけ気になるものだと、言われる度に思い出す。しかしマジックの仕掛けを見られてしまうと、得てして感激が違うものになる。なのでこういった質問は牽制を掛けるようにしていた。

いくつかの視線を感じながらも快斗達は廊下を曲がる。広々とした道幅で車椅子が三台余裕で通れる大きさだった。

「こちらがそうなんですが。普段は映画観賞に利用されています」「へえ」。広さは十分そうです。観客はスタッフを合わせて六十三名でしたよね」

「はい。ここで引き取られている方は、四十九名余り。後はスタッフなどばかりですので」

「立派なものですねえ。ぼっちゃま」

「ありがとうございます」

田上はそう言うと、何かありましたら遠慮せずに言いつけてくださいと声を掛けて、この場所から出ていった。

「今回は各テーブルごとの演出と聞きましたが、どういたしましよ
うっ」

「そうだな。プラン」で行こう」
「わかりました」

寺井は納得したように頷くと、イスの配置に手を加える。快斗は荷物を開けると、マジック道具の点検、そして配置を始めた。

マジックショーは夕飯の後に行われる手筈になっている。しかし今している下準備程大切なものはない。二人は観客の笑顔を想いながら作業を進めるのだった。

おでん

外は、冷たい北風がビュービューと音を立てて吹いている。カーテン越しに外を覗いた快斗は、その光景にぶるりと肩を震わせた。

「哀ちゃん達、そろそろかなー？」

「あー、そうじゃねーか？」

新一はソファーに腰を沈め、湯気の立っているコーヒーに口をつけた。快斗はもう一度窓の外を覗いてから、またキッチンに引っ込む。最後の仕上げは全員が揃ってからだ。

新一はちらつと時計を見る。お隣さんは、もうそろそろ家を出た頃かもしれない。

今日の夕飯は、快斗が存分に腕を振るったおでんが主役だ。温かいおでんの鍋を二人だけでつつくのは淋しい、と言う快斗の主張の下、隣の住人達を招待したのだった。

快斗は、既に出ている携帯コンロの上に土鍋をセットする。カチツという音と共に火がつく。

するとタイミング良く、チャイムの音が聞こえてきた。手の離せない快斗の代わりに新一が出ると、寒そうな阿笠の顔が見えた。

「遅くなってすまんのだ。なかなかキリのいいところまでいかなかったな」

「まあ、いいから。博士、灰原、取り敢えずリビングに来いよ」

「お邪魔するわね」

「お邪魔するわい」

「おう」

三人が連れだつてリビングに行くと、既に準備は完璧に整っていた。

快斗は持参したエプロンを外して待っていた。

「じゃ、席について。それではっ、快斗くん特製おでんの御開帳
くっ！」

その言葉と共にふたを開けると、真っ白な蒸気が上がる。ふわりと
いい匂いが鼻をくすぐった。

全員に具を分けて渡し、ご飯をよそう。三人が食べるのを、快斗は
少しドキドキしながら見守った。

「熱っ。んー、寒い日はコレだよな」

「あら、なかなかいけるわ」

「旨い、旨いぞ！快斗くん」

三人共熱々のおでんを口に入れ、口々に感想を言う。具が熱いので、
少しずつだが次々と箸を伸ばす様子に、快斗は一先ずホツとした。
そして自分も食べ始める。取り分けた大根はしっかりと味が染み渡
り、じつくり時間をかけただけあって美味しかった。

「この牛すじ、柔けーな」

「まっ、仕込みは上々。この俺様に抜かり無しってな」

「よく言っぜ」

新一はそう言いつつも気に入ったのか満足そうだ。

「おや、これはジャガイモかな？」

「そっ、なかなか合うんだよ、博士。後、オススメは巾着さん」

快斗はそう言っつて巾着を箸で摘まみ上げる。新一と哀は丁度それを
食べるころだった。

「あら、何か入っているわ」

「ホントだ。餅以外に何かが入ってるな。これは不思議だな」

不思議そうな顔をする二人に、快斗は楽しそうに答えを告げた。

「へへー。ちよっぴり手は加えてあるけど、野菜のあんかけが入ってんだ。なかなか旨いだろ？」

「ふふっ、成る程」

「へえー」

感心する三人に気分を良くして、快斗はつくねをパクリと食べる。

外は相変わらず寒そうだったが、快斗達四人は熱々のおでんを囲んで温かった。

ドラマでドキドキ

新一がいつものように出掛けた先で事件に巻き込まれ、その事件をきっちり解決して帰ってきた。すると玄関には、既にお馴染みの快斗のステージ用の靴があった。

また来たのかと肩を竦めつつリビングを覗くと、快斗は一人でテレビを見ている。何やら熱心な様子で、新一が入って来たことに反応を見せなかった。

『あなたのことが、分からないの。どうしてそんなに良くしてくださるの』

『それは言えないよ。だけど、これだけは疑わないでくれ。君を思う気持ちだけは』

『貴方！』

『お前！』

画面では丁度、俳優達がひしつと抱き合う場面だった。

新一が快斗の後ろからドラマを見ると、何やら見知った顔が映っている。嫌な予感を感じつつも、もう一度まじまじと見てみる。すると誰なのか確信が持てた。

母だった。

またの名を藤峰有希子。

快斗が見ているのは、新一が産まれるずっと前に、ニューヨークで撮影があった海外ドラマだったのだ。今と殆んど変わらない顔で、ホロリと一筋、涙を流してみせている。

「なんでこれ、見てんだよ！」

「しい〜っ！聞こえないだろっ」

新一が快斗に文句を言うと、テレビ画面に顔を向けたまま、快斗は押し殺した声で言う。その表情は真剣そのものだ。

しかし身内の出演しているドラマを見ること程、新一にとって恥ずかしものはない。それなら部屋から出ていけばいいのだが、かなり引き込まれる内容であり。結局、新一は悶々としながらも、快斗と一緒に見ることにしたのだった。

快斗の隣に座ると無言でケースを渡される。タイトルは父親の作品が原作のものだった。その事実は更に新一のいたたまれなさを生む。父親の作品の中でも、新一にとってかなりお気に入りなものだけに余計にそう感じてしまうのかもしれない。

新一が画面に意識を戻す。するといつの間にか他のシーンに移っていた。妖しい雰囲気画面から伝わってくる。新一も思わず引き込まれるように画面に集中した。

そしてバスルームが湯気と共に映し出される。そこで嫌な予感を感じた新一は逃げ出そうと腰を浮かす。しかしその動作が、快斗の映画鑑賞の邪魔になったらしい。物凄い力で手首を引っ張り、新一はソファーに逆戻りするはめになった。

仕方なく画面に目を戻すと、湯気の隙間から白い肌が目についた。思わず見え隠れしている足から上へと、カメラの動きと共に目で追っていく。顔が見える様になって、新一は今度こそ大声を上げた。

「何見てやがる！てか、こんなもん、家で見るんじゃねえ！」

「あっ、これからがいいところなのに！」

快斗のブーイングを気にもせず、リモコンでテレビ画面を切る。息を切らし、バクバクした心臓を押さえながら更に怒鳴る。

「っーか、自分の母親の演技を見るだけでも恥ずかしいのに、あん

なシーンまで見てられっか!」

「なんだよ! だったら見なきゃいいだろ。あの後が大事なんだから」

「うるせー」

「見せやがれ!」

「やなこった」

快斗と新一の言い争いは、その後しばらく続くのだった。

父親の悩み（前書き）

青子のお見合い話です。白青前提（といっても記述はほんの少し）です。全三話の構成となります。

父親の悩み

久しぶりに真と予定の合った快斗は、デート待ち合わせをしていた。この後、一緒に動物園に行く予定なのだ。しかし相手はまだ来ていない。

時間の都合で早く着いてしまった快斗は、駅前の喫茶店で時間を潰しているところだ。そうして頼んでいたカツサンドが来たのでそれをパクついていると、見知った顔を見つけた。

「ありや、青子の親父さんじゃん。こんな時間にどうしたんだ？」

今の時間帯は警視庁に居なければいけない時間帯である。勤務に熱心な中森らしくない。しかもなんだか困っている雰囲気だ。

挨拶をしようと窓越しに手を振るが、快斗に気が付いた様子は全くなかった。そこで快斗は窓ガラスをコツコツと軽く叩く。

最初、相手は自分のことだと気が付いていなかった。キョロキョロしている中森にもう一度合図を送る。次はわかったようだった。快斗が中に入るようにジェスチャーすると、暫く迷う素振りをしていたが思い切ったように入ってきた。

「久しぶりですね。元気でしたか？」

「見ての通りさ。なあに、まだまだ若い連中には負けはせんよ。それに快斗くんの活躍は聞いているしな」

「変わりがないようで良かったです。そうそう、青子から聞きましたよ。また犯人とやり合ったら嬉しいっすね」

「何とかお縄につけたがね。ははは。はあ・・・」

中森はそこで大きなため息を一つついた。その様子に快斗は眉を潜める。

快斗に対してまで、こんなに落ち込んでいる姿を見せるのは珍しかった。過去に一度見たことはあるが、それはKID絡みの悩みだった。

「どーしたんですか、一体。俺でよければ話してください」

「いや。・・・しかし、快斗くんには青子もお世話になっているしな」

「青子絡みですか？」

「まあ、そうなんだが」

そこへ二人が頼んだコーヒーとコーラが運ばれてきた。

中森はコーヒーを口に運ぶが、飲まずにまた元に戻す。なかなか決心がつかないようだった。その動作を何度か繰り返している内に、快斗の携帯が振動した。ビクリと驚いた中森に断りをいれ、チエツクを試してみると真からだった。何でも外せない用事ができたらしい。予定が流れたことを残念に思いつつも返事を送る。

まあ、こちらでも中森を放って置けなかつたので都合は良かった。

「誰かと待ち合わせかい。邪魔をってしまったかな」

「とんでもない。フラレちゃったんです」

おどけたように言う快斗に中森の肩から力が抜けたのが分かった。その事に気を良くして、快斗はコーラをすする。それにつられた様に中森もコーヒーを一口含む。

そして出し抜けに話出した。その内容に対して、快斗は身を乗り出すように、真剣に聴く。一気に喋って力の抜けた中森に、快斗は深く同情した眼差しを送った。やはり青子に関する事だった。

快斗は暫く目を伏せて考え込んでいたが、何かを考えついたのか話始めた。

「こーいのはどうです。最初は相手さんの顔を立っておくんです。その後、俺が出てきて青子の彼氏の振りをして、相手を諦めさせるんです。単純だけど、効果的でしょう？」

「しかし、快斗くんにはいい人がいるじゃないか。その人に悪い」

「ダイジヨープですよ。マコちゃんならこの状況を知れば、俺が何を言ってもそうしますから。なんなら白馬を使ってもいいんですし」

快斗が重ねてそういうと、最初はいぶかしそうな顔をしていた中森も、段々納得のいった表情を見せていった。どうやら快斗の考えた案を使うことになったらしい。

早速、その案について青子に報告する中森の姿を、快斗は微笑ましそうに見るのだった。

作戦実行日

その翌週のとある日。快斗は青子と共に、とある懐石料理の店に来ていた。

やや化粧をして身なりを整えた青子は、なかなかのものだった。中森の奥さんの若い頃にそっくりらしい。暗い表情も艶っぽく、余計に大人っぽくみせていた。

また中森の姿は見えなかった。本当は一緒についてくる予定だったのだが急な予定が入った為だ。そこで快斗が急遽、代役をすることになったのである。作戦にかなりの影響が出たので、快斗としても丁度いい結果とはなっている。一応、親戚の兄という設定だ。

「おい、青子。あちらさんがオメーの見合い相手じゃねーか？」

「あつ、うん。そうだよ」

「見るからにボンボンっぽいけど、どっから声が掛かったんだ？」

「うーん、分からないなあ。お父さんもあんな知り合い、いないはずだよね」

「ああ」

そう話ながら近づいていくと、向こうも青子に気が付いたようだ。ペコリ、とお互いにお辞儀をして簡単な挨拶を交わす。

それによると、青子に見合いを申し込んだのは一人息子の幸一郎だそう。白馬の知人らしく、彼の持っているアルバムから青子を見初めたのだそう。

それを聞いてアイツは何をやっているんだ、と快斗は呆れて肩を竦める。青子も、まさか白馬が原因だったとは思わず、苦笑いしていた。

「青子さん。写真で見ても可愛らしい方でしたが、実物には全く及

びませんね。実に美しい方でいらしゃる。今宵、貴女に会えたことは神の善き采配ですねえ」

「はあ……」

「ところで彼は？中森警部の姿もないようだが」

幸一郎の言葉に、青子についてはいけないようだった。早くも愛想笑いにヒビの入った表情をしている。そんな青子を気にしつつも、快斗は簡単に事情を説明した。

するとまた甘ったるく、長ったらしい台詞を言いながら青子の手を取ろうとする。快斗がさりげなくそれを阻止するが、気付いた様子もなくまたペラペラと喋りだした。しかし幸一郎の母親の一言で、幸一郎はピタリと口を閉じて店へと快斗達を案内をする。その変わりようはなかなかなものだった。

用意された部屋に案内されると、そこはこの店で一番庭がよく見える場所らしかった。趣のある、静かな日本庭園だ。どこからか水音が聞こえてくる。これが夏なら涼しげに聞こえただろう。

自慢げに話す幸一郎をそのままに、快斗達は席につく。このような店では珍しく、椅子に座れるようになっていた。

快斗と付き添いの母親、青子と幸一郎が向かい合い席に着く。母親は青子の一挙一動に鋭い眼差しを送る。それがプレッシャーになっているのか、青子の動きもギクシャクとしていた。

一息ついた後、相手の母親が口を開いた。

「青子さん、でしたわね。私は幸一郎の母で、薫子と申しますの。あたくし

今回は顔合わせとして席を設けさせましたが、どうですか？」

「えっと、その」

「まさか断るなんてこと、ございせんわね。貴女のような方、こちらが声を掛けただけでも、良しとしなくてはいけませんものね」

「……はあ」

母親も母親で、なかなかアクの強い性格らしい。青子が馬鹿にされたことを悔しく思いながらも、作戦の為におとなしくしているしかない快斗だった。

サイテー男

暫くの間、母親の独壇場が進んだ。そして話が一息ついた所で、タ
イミング良く料理が運ばれてくる。こういう席でなかったら美味し
く感じられたであろうと、二人は食べながら思った。お見合いとい
うより、品定めといった雰囲気なので、ちっとも味わうことが出来
なかったからだ。

食事が終わり、後は本人同士で話すこともあるだろうと、快斗は相
手の母親に促されて立ち上がる。その時、すぎるような青子の視線
に気が付き、任せるとウインクを一つ送った。そんな青子の安心し
た笑顔に相手が見惚れているのを牽制して、快斗は出ていくのだっ
た。

快斗達の足音が聞こえなくなっただけから、幸一郎は改めて青子に向き
なおる。その目線を逃れる様に下を向くと、思いの外柔らかい声が
聞こえてきた。

「青子さん。驚いたでしょう、母の剣幕に。あれでもまだ、良い方
なんです」

「そうなんですか」

「しかし、母も貴女のことを気に入ったようだ。あの顔を見れば分
かります」

青子はその言葉と先程の剣幕の格差を思い出し、混乱してしまう。
最後の一瞥は、明らかにそんなようには見えなかったからだ。

「お会いして、ますます貴女の事が気に入りました。今回の件は大
成功ですよね」

「あの・・・」

「皆まで言わなくても結構です。青子さんの気持ちは、痛いほど理

解していますから」

幸一郎は青子の手を強引に掴み取る。困った様に身動きする青子を知り目にぐつと顔を近づけた。

「さあ、二人の祝福された人生の第一歩として、貴女と良いことをしましょう」

流石の青子もおかしく感じ、悲鳴を上げようとしたその時、庭から数人の男達、背後の襖から快斗と白馬が飛び出してきた。泣き出しそうな青子と、訳の分からない顔をしている幸一郎とを引き離す。青子は怖かったのか、一番近くにいた白馬の袖をギュッと握りしめた。

そんな青子を守るように快斗は一步、前に出る。

「なんなんだい、君達は。こんな席に不粋じゃないか」

「それはこちらの台詞です！勝手に人の名前を悪用して。貴方のせいでどのくらいの方が涙を流したと思っっているんです」

白馬の指摘に幸一郎は飄々とした顔を歪めた。男達が幸一郎を押さええているなか、廊下から薫子を連れて中森がやってくる。

「宮本幸一郎、お前の悪事は総てこの人が言ったぞ。連続強盗事件の主犯だとな。それとお前には住宅地集団レイプ殺害事件の容疑もかかっている。観念するんだな」

「くそつ。後少しだったんだけどな」

中森が逮捕状をつき出すと観念したように肩を落とした。

青子が一人だけ分からない顔をしている中、幸一郎は警察官に連れられて、座敷を後にする。そして青子の横をすれ違うとき、睨み付

けるように顔を覗きこんだ。

「けっ、命拾いしたな。もう少しでアンタを味見出来る所だったんだが」

「っ、サイテー！」

その言葉に、今まで訳の分からなかった青子にもようやく成り行きが理解出来たらしい。

白馬が止める前に、一発、バシツと手がでるのだった。

そして。

「つまり、どーいうことなの？快斗」

「オメーの見合い相手は嘘八百の偽者で、オメーはサイテーな男に最悪なことをされそうになった所を親父さん達に助けられた、ってことね」

「なるほどねー」

後日、青子に分かりやすく事情を説明する快斗の姿が見られたという。

脅威の記憶力

快斗が新一の家でくつろいでいる時、歩美と一緒に哀が訪ねてきた。何でも歩美が新一に用事があるらしい。また、哀はたまたま工藤家の書斎に用があるのだという。

偶然門のところで会ったので、一緒に入ってきたということだった。

「こんにちは、快斗お兄さん。新一お兄さんはいる？」

「お邪魔するわね。黒羽くん」

「ああ、歩美ちゃんに哀ちゃん。いらっしやい。新一は何もなければ、そろそろ帰ってくるはずだよ」

「ここで待っててもいい？快斗お兄さん。新一お兄さんに用があるんだけど」

「うん、かまわないよ。ね、蘭ちゃん！」

快斗が首を巡らせてキッチンに声を掛ける。洗い物をしている音の合間から蘭の承諾の声が聞き取れた。

「それじゃあ、私は本を見せてもらっわね」

「うん」

「新一が来たら、そっちに顔を出すからね」

「ふふっ、待ってるわ」

そう言ってリビングから哀が出ていく。その哀を見送った後、快斗に進められて歩美はソファに座った。

「そうそう、この間はショーを見に来てくれてありがとねー。慌ただしくて何にも言えなかったけど、嬉しかったよ」

「快斗お兄さん、あたしに気付いていたの？あーんなに、いっぱい

の人がいたのに！」

「勿論。見てくれたお客様は全員ね。それが礼儀つてもんでしょ？
ちゃーんと二回目以降のお客様にも、機会があれば声もかけたりね」
「そうなの？それってすごく嬉しいことよね。ね、歩美ちゃん」
「うんっ！」

哀に紅茶を出してからリビングにやって来た蘭。その言葉に歩美は
勢いよく頷く。

「はい、黒羽くんの入れたのより美味しいか分からないけど。ちな
みにこのロールケーキは黒羽くんのだから美味しいわよ」
「うわあ」

歩美はキラキラした眼差しをケーキに向ける。しかしはっとしたよ
うに快斗と蘭を見つめた。

「哀ちゃんは？」
「それがね、まだしばらく時間がかかるから、先に食べてって」
「歩美ちゃん。毎度のことだから気にしなくていいよ？」
「そっか」

蘭と快斗の言葉に、歩美は納得の表情になった。そしてぱくりと一
口食べる。

「美味しいー！」
「紅茶も美味しいよ、蘭ちゃん」
「良かった」。このロールケーキもふわふわのクリームがとっても
美味しい」

「へへっ。これはフランスでやったマジックショーで知り合った人
が教えてくれたんだ」

「へえー」

「快斗お兄さん、フランスにも行ったの！」

歩美の尊敬の眼差しに、快斗はちよつとくすぐったそうに笑った。

「とつても御贔屓にしてくれた方だからね。フランスに行った時は必ず来てくれてるし」

「ふーん。そうなんだ」

「そういえばこの間も道で女の人と話してたよね？」

「ああ、もしかして一ヶ月前のでしょ」

「えっと、たぶんそうかしら？」

「うんうん。そうだよ。その人ってちりちりの黒髪の黒人さんでしょう」

「そうそう、その人」

蘭が思い出したように言うと、快斗は悩む様子もなくそのことを思い出して説明する。

その話をした後、次の話題は美味しかった夕飯の話に移った。その時も苦もなく、そんなことまで？というような、当時の状況まで語る。

しばらくして歩美は感嘆して言った。

「やっぱり凄いよ。快斗お兄さん。よくそこまで覚えてるね！」

「そう？」

「まあ、こいつの記憶力はちょっと常識はずれだからな」

不思議そうに首をかしげた快斗に、別の声が聞こえた。

その声に蘭と歩美が振り向く。するとそこには新一が立っていたのだった。

ねえねえ、聞いて！

ある日、新一が珍しくのんびりとした一日を家で過ごしていた時のことだった。

その日は蘭もやって来ていて、今は洗濯物を干しに庭に出ている。日光が窓から入って、じんわりと温もりを感じさせていた。

新一はそれを感じつつ、リビングのソファに腰掛けてかなりの厚さの洋書のページをめくる。傍にはお気に入りのコーヒーが置いてあった。

そうして優雅に時間を楽しんでいると、何やら玄関が騒がしくなっているのが分かった。

最初、新一はそれに気が付かずに洋書を読み進めていたのだが、暫くしてもその騒がしさは無くならない。それどころか、近づいてきている気配だった。

新一は、それでも蘭がいるので気にせず読み続ける。

近づいてきている騒音にかなりイライラしつつも無視をしていたのだが。次の瞬間、その原因が勢いよくリビングに入ってきたのだった。

「新一、新一、新一！聞いてよ。ねえっ。ねえ、ねえ！」

「っだあ、うっせえ！今いいとこなんだよ。邪魔すんな！」

「まあ、まあ、まあ。いいから、いいから。こんなもんより良いのがあるんだって」

それはやたらと興奮した快斗だった。洋書を抱え込んだ新一の周りをぐるぐる回り、ゆさゆさと肩を揺する。

「なあなあなあ！新一い〜！」

「うるせえ！俺は本を読んでんだよ。その話は蘭に聞いてもらえっ

て」
「だってさ、だってさあ。蘭ちゃんとさっき会ったけどさ。買い物に行ってくるって言って行っちゃったんだよね」

快斗のその言葉によって、新一は蘭が快斗から上手く逃げてた事を知ったのだった。

それでも手元の本に集中しようとしぶとく足掻く、足掻く。
新一のその迷惑そうな声にも怯まず、快斗は構って攻撃を再開した。しかし新一はゆさゆさと体を揺すられても、手にある洋書は手放さない。快斗に、こののんびりとした一日を壊されるわけにはいかなかったからだ。

「なあなあ、あのな」

「うるせえって言ってるんだろ！」

「もうっ。短気なんだから」。それよりも、こっち、こっち」

快斗はたまにこの様な状態になる。一年に数回程の回数ではあるのだが、この状態になった快斗はかなりしつこかった。それを新一も既に何回かは経験している。
しかしこの平穩は惜しかったのだった。

「あのな、あのな、あのな！」

「あっちいけて！」

「うっ、もうっ。えいやっ！」

ポンッ。

いい加減にしびれを切らしたのか、快斗は新一の体から手を放して掛け声を出す。すると軽い音と共に、新一の腕に抱え込まれていた洋書が跡形もなく消えてしまった。

その鮮やかな手並みに、一瞬だけ新一は言葉を失う。しかし直ぐに満足そうな快斗に食ってかかっていった。

「あつ、こらっ！本を返せよ、バ快斗！！」

「バ快斗じゃねーっての。新一のトンマ」

「何だと！」

「それよりもさく、聞いてくれよう！」

強引な快斗のやり方に、怒りで震える声を出す新一。しかしそれに頓着せずに快斗は話を進めようとする。

そんな快斗に、新一はとうとう実力行使にうつてでるのだった。

「いい加減にしゃがれ！！」

「わっ、あぶねー」

「避けんな！快斗！」

「無理、無理。無理だつて！うわつと」

こうして始まったバトル鬼ごっこは、蘭が帰ってくるまで続いたのだった。

一人と一匹

身を切るような寒さの朝。

快斗は一人、とある田舎の小道を足早に歩いていた。辺りはまだ日が上りきっておらず、人とすれ違うこともない。

あまりの寒さの為か、鳥たちの鳴き声すら聞こえてこなかった。

「うへえ、さみいなあ。俺も昨日の最終バスにのればよかったな」

シーンとした冷たい空気に身を震わせて、快斗の独り言がこぼれ落ちる。耳がジーンと痺れているのも感じられた。

吐いた息が白くなり、冷たい空気の中に消えていく。その行き先を目で追いつつ、快斗は改めて寒さを実感していた。

「ん？オメーも、一人なのか」

ワンツ。

ふつと後ろを振り返ると、いつの間についてきたのか、一匹の野良犬の姿を見つけた。白黒で耳の立った、毛の長いその犬は、薄汚れていた。

意外と愛嬌のある顔をしているので、快斗は思わず声をかける。話しかけられたことが分かったのか、その犬は駆け足で快斗の足元にやってきた。

その様子を立ち止まって待っていると、その犬は機嫌を伺うように見上げる。ハツハツと息を切らしつつも、何かを期待するかのよう
に、パタパタと尻尾を振った。

その愛らしい姿に、快斗はニツと笑いかける。鼻を近づけてきた所

で、驚かさないう様にそつと手をだす。その手をフンフンと嗅ぎ、安心したのか頭を押し付けてきた。そこでゆっくりと撫でてやると、気持ち良さそうな顔で甘えた声を出す。

「白黒なのか、お前は。毛が長いから、温かそうだな。ここは長いのか？」

クウーン？

「そつか、そつか。しっかし、人懐っこいなあ」

そうして暫く犬の頭を撫でまわし、双方が満足したところでまた歩き出すことにした。

先程の犬は快斗の周りをじゃれつきながらも、案内するかのようには先へ行く。不思議なことに、その犬が行く道は快斗の行く道と異なることはなかった。

そうして歩いていると、辺りの景色が変わってきたことに気が付いた。いつの間にか日が昇っていて、暗くて見えにくかった景色が見えてくる。

キラキラと朝日に輝く光が周りの畑の緑を生き生きと見せて、快斗の周りを取り囲んでいる。先程までとは明るさも異なっていたので、急に視界が開けたような錯覚があった。

この感動を分かち合おうと、先程まで一緒にいた野良犬の姿を探す。しかし快斗の横にいた犬は、随分先にまで行っているのが分かったのか。快斗がそこに追い付くと、長々と用を足している最中だった。

「なんだ、トイレか？急に居なくなるなよな」

クウーン。

ばつの悪そうな犬に、気にするなと声をかける。一通り終えた後快斗の側にやってきた。そこと目線を合わせて、頭を数回撫でてやれ。そして明るくなった空を見上げた。寒さは愛変わらずに残っていたが、清々しい気分になる。

太陽の光に目を細めてから、犬の方へと話しかける。

「うっし、競争すつか！」

ワン！

「よーい、ドン！」

ワワン、ワン！

そして快斗の掛け声と一緒に、野良犬も飛び出す。

二つの黒いシルエットは暫くの間、一緒にもの凄い速さで動いていたのだった。

ミカンを食べながら

快斗と新一は工藤邸のリビングにいた。ミカンを口にしながら、あ
るクイズ番組を見ている。

ゴミ箱にはミカンの皮だらけ。覗き込めばツンとミカンの匂いが鼻
をつくだろう。

まあ、そんなことを気にするような二人では無い。湯気の立つお茶
をすすりながら、パクパクとミカンを平らげていった。

ところでこのミカンの出所はどこなのか。快斗である。ある日、前
触れも無く大きなダンボール箱を抱えて、工藤邸にやってきたのだ。
なんでもつい先程知り合って、意気投合した人がミカン農家の人だ
ったという。その後家に招待され、お土産として大きなダンボール
箱2つ分のミカンを渡されたのだ。

しかしこれだけ大量のミカンを黒羽家だけで処理できるものではな
い。ご近所さんや友人にも分けて配るが、それでもまだ残ってしまった。
そこで快斗がよく行く工藤邸にミカンを置いていったのだ。今
テーブルに出ている一山で工藤邸にあるミカンは全部である。な
んだかんだ言いつつも新一もミカンを食べていて、思っていたより
も早く減たのだった。

ふと新一がテーブルの方に視線を向ける。丁度、快斗が残りが数え
られるほど少なくなってきたミカンの一つに、手を伸ばしている所
だった。

「もうこれだけしかないのか」

「んー、思ったよりも早く消費出来たからねえ」

快斗はミカンの皮を剥きつつ答える。新一は手元にあるミカンの身
を口に入れて、テレビに視線を移した。

「あーあ、また間違えてるし。フランス語で冬はh i v e r（イヴ
エール）だろ。h i e r（イエール）じゃあ、昨日じゃなか」
「まあ、そんなもんじゃねえのか？むしろh i e r（イエール）を
読めただけでもいい線だと思うぜ」

「うー、確かに小学生にしてはやる方だけどさ」

まだ納得が行かないのか快斗はブツブツと言っている。ゴクリとお
茶を飲み干した新一は、そんな快斗に湯呑みを出した。

「おいおい！なんなのかな？これは？」

「お前、これが分からないのか？これは湯呑みだぞ」

「だあー！そーゆーことじゃなくって！な・ん・で、俺の前に新
一の湯呑みを置くのかっていうことっ」

「お茶を入れるからだろ？」

「誰が誰にだよ」

「そりゃ、勿論。お前が俺に、だろ」

「はあ？?!」

しれつと言いつつ新一に快斗は抗議の声を上げる。しかし新一は
全く気にせず、その根拠を語った。

「俺はお茶が飲みたい。お前は俺よりキッチンに近い。そして何よ
り、お前の入れたやつの方が俺がやるより速いし旨い」

「で？」

「よって、お前がいれるのが一番ベストであると、俺は判断したわ
けだ」

新一のその言い分に、快斗は呆れた視線を送る。

「まったく。俺は蘭ちゃんじゃねーんだぞ」

「なんで、ここに蘭が出てくるんだよ！」

「新一は蘭ちゃんに、いつもそーいう態度なのか？」

「バ、バカ言うんじゃないか！」

「程々にしとかないと、愛想を尽かされるぞ」

「ああ、それは大丈夫だ」

急に自信たっぷりになった新一に、快斗はつまらなそうな顔になる。
この後、のろけられるのは何となく分かったからだ。

「蘭は、誉めるとなんだかんだ言ってもやってくれるしな。ちょっと素直じゃないけど、嬉しそうに笑ってやってくれるし」

「はいはい、そーですか」

その言葉を聞いて、快斗の口から気の無い返事がこぼれ出たのだった。

温もりに安心して

工藤邸の書斎。

そこは某作家が趣味や実用性を考えて揃えた資料がある。更にはその息子の趣味である小説なども、所々に見受けられる場所でもあった。

また最近は大マジックに関する資料もちらほらと目に映る。それは、快斗が工藤家と関わりを持ってから増えてきたものだった。

息子の、というより自身の発想の転換になるとして、快く家の主の許しを得てそれらは置かれている。時には主自身も唸るような希少価値の物まであるのだった。

そんな書斎に、真はノックをしてから暫くドアの前で待つ。恋人の快斗からの返事は返ってこなかった。

快斗がそこで調べものをしてから、真が声を掛けるまでの二時間余りもたっている。弟なら半日以上籠っていても気にすることは無いが、快斗にしては珍しいことだった。

「かゝい、くん？どうしたの？」

声を掛けてから書斎に入る。しかし返事はなかった。

真がこうするのは恋人の職業が大マジシャンだからだ。快斗は気にしないというのだが、そういう訳にもいかなかった。そこで必ず声を掛けるようにしているのだ。

見ても構わない時なら作業を続けているし、駄目ならそれをしていたことすら感知させない。その線引きが上手いのが厄介な所でもあった。

「あれ、寝てる」

それは真でも滅多に見ることの出来ない、完全に熟睡している姿だった。ソファアのクッションをギュッと抱き締めている。その顔は幸せそうに笑っているようだった。

「そーいえば、ここの所かなり忙しかったってぼやいてたねえ。疲れが一気にきたのかなあ？」

珍しくそう話していたことを思いだし、真はくすつと笑う。それからそつと快斗の顔に手を伸ばした。

「ん？まこ、ちゃん・・・？」

「あつ、快くん。これは、えつと」

快斗は真の指先が届くか届かないかの距離で急に目を開いた。視線を左右に動かす。

そんな快斗に、やましいことは何も無いのに、何故か焦った気分になる真。

そんな真をぼんやりとした瞳がとらえ、はっとするほど無邪気で嬉しそうに、くしゃりと笑う。

「まこちゃん、だあ」

「えつ。ちよつと、キャツ」

そして真を軽く引つ張った。

突然の行動に驚く真のことを気にせずに、しっかりと抱きとめる。

「へへつ。すう・・・」

その温もりに刷りよるようにピタリと引つ付くと、快斗は満足そうに眠りに落ちていった。

真は暫くの間、何が起こったのか分からずにいた。しかし背中に感じる温もりと、耳元から聞こえてくる寝息に状況を理解する。

「温かいなあ、快くんは」

真はそう言つて、快斗の方へ器用に向き直る。するとその時にできた隙間を埋めるように、抱き締める力が少し強くなった。

「ホント、温かい。・・・ふああ」

そして真も快斗につられるように、ウトウトと眠りに落ちていったのだった。

「こんにちは。お邪魔だったかしら？」

「哀ちゃん。どゆこと？」

「マコさん、とてもぐっすり寝ているわね」

「あれっ、何でここにマコちゃんが？」

哀が書斎に近づく気配で目が覚めた快斗。中に入ってきた哀に指摘され、いつ真が来たのか分からなかった快斗は、混乱したような顔をしたのだった。

ジグソーパズル

快斗と新一は、リビングのテーブルを占領して何やら細かい作業をしていた。

横には綺麗な図柄がプリントされた箱が開けてある。未開封のものや、既に完成し額に入れられたものもいくつか重ねてあった。

「多分、これはここだと思うんだけど、どうだ？」

「ビンゴ！これとあれでこうなつて、それをこうするつと」

「あれは？ついでにそれも」

「ほいつ。なあ、これはここじゃねーか」

「あー、成る程。じゃあこれはあそこだな」

聞いている方は何が何だか分からない会話で、着々と図柄が再現されていく。

二人が作業を初めてから、既に30分近く経っていた。最初は乗り気ではなかった新一も、快斗のピースに流されていつの間にか夢中になっていた。

「あー、そこはなんか変じゃね？」

「こうか！それつてーと、それも変だぜ」

「こうなら？あれとそれがぴつたんこ！」

「じゃ、それはあそこ」

「よしつ、その塊を中央にはめ込めば・・・」

「出来た〜っ！」

始めてからおよそ40分。

遂に5つ目の作品が完成した。ナイアガラの滝の絶景が1cm程のピースに分解されているのを、二人で繋ぎあわせる。なかなか大変

な作業だった。

「新一、黒羽くん。ちょっとは休憩したらく？」

「そうしよっか。なっ、新一」

「そうだな。こんだけ作れば満足だしな」

蘭に声を掛けられて、二人はテーブルの上を手早く片付ける。そこに蘭はお盆を置いた。

「新一はコーヒーでしょ、はいつ。黒羽くんはリクエストのココアね」

「サンキュー、蘭」

「ありがとっ、蘭ちゃん。んー、温かい」

それぞれにマグカップを配り、蘭は新一の隣に座る。ちなみに飲み物は快斗と同じだ。

「そうそう。これも。今回は貰い物なんだけど、美味しいの持ってきたんだよね」

「えっ、何？」

「いくよっ。One、two、three!」

ポンッ！

「うわあ、美味しそう」

「って、いつの間にこんなもん仕込んでやった」

「いーじゃん、別に。さ、食べよ!」

いつも思いがけないところで披露される快斗のマジックに、新一は何だか不満そうだった。蘭は鮮やかなマジックと、綺麗なスイーツ

に目を輝かせる。

「あっ、美味しく！これってババロアだよな」

「ん、オメーにしちや甘くねえじゃねな」

「蘭ちゃん大正解！新一も気に入ったようだね。なにより、なによ
り」

新一と蘭の反応に気をよくして、快斗はココアをすすった。

蘭はもう一口、ババロアを口に入れてから、先程までに作られたパ
ズルを見る。未開封のものがまだ3つほど残っていた。

「でも随分作ったね。どこから出してきたの、これ」

「さあ？」

「さあつて、新一。新一のじゃないの？」

「ちげえはずだぞ。なあ、快斗？」

「へっ？」

ババロアを口にしていた快斗は、急に声を掛けられてキョトンとす
る。しかし直ぐに疑問に答えた。

「ああ、それは有希子さんから頼まれたやつだよ。なんでも若い頃
に貰った物が溜まってるから、よければあげるわよって」

「母さんかよ・・・」

「そうなの」

「だからさ。俺が完成させて、貰いますねって言って出してきたん
だ。まだあるけど、今はこれだけ完成させようと思って」

理由が分かって納得した表情を見せる蘭。

それとは裏腹に自分の母親が関わっていると知った新一は、乾いた
笑いをこぼしたのだった。

シチューの日

荷物を抱えて、快斗は足取りも軽く実家へと向かっていた。今日は母がシチューを作ってくれるからだ。

そんな快斗だったので、母に体よく使いつぱしりにされたことに気付いてはいない。抱えている物は重いものばかりだったが、それも苦ではないのだった。

浮かれた気分のまま角を曲がると、見慣れた後ろ姿に気がついた。光彦だ。休みだというのに疲れた雰囲気だった。

以前歩美に会った時にちらりと聞いたのだが、光彦は中学受験をするらしかった。その勉強時間とプレッシャーが、ピークに達しているのが見ていて分かるのだという。

そこまで思い出してから、快斗は光彦に声をかけた。

「おい、光彦だろ。これから帰りか？」

「あ、快斗お兄さん。こんばんは。今、塾が終わったところなんです」

「こつちの方まで来てるのか？それに、結構遅い時間だけど」

「母が良い講師の方を見つけてくれまして。その方はこの時間帯以外、予定が詰まっているんです」

「そーいうもんか」

「はい」

快斗自身は高校受験を経験しただけなので、その苦労は分からない。また自身の過去を振り返っても、勉強に対してそこまで苦労した記憶は無かった。

「快斗お兄さんは、大荷物を抱えてどうしたんですか？」

「ああ、俺は買い物頼まれてさ」

「今日はもしかして、シチューじゃないですか？」
「あつたり〜！流石は少年探偵団の頼れる頭脳。俺、一言も言っていないよ？」

大袈裟に驚いてみせる快斗に、光彦は自慢気に説明をした。

そのしつかりと筋の通った理論に、快斗は納得の表情をみせる。コナンに張り合おうと努力した結果が、見事に実を結んでいるのが分かった。最も、途中からはとある女の子に誉められたという、男の欲求も混じっていたかもしれないが。

「光彦は夕飯は何なんだ？」

「えへへ。お恥ずかしいのですが、これです」

光彦はそう言つて、手に持っていたビニール袋を持ち上げる。中にはコンビニ弁当が入っていた。

「父も母も忙しいですからね。夜、帰宅するのも午前様ですし」

「ふーん、大変だな」

「とんでもないですよ。僕が言い出して、受験も決めたんですし」

「へえ〜。光彦から」

「はい。やりたいことを見つけたんです」

そう宣言した光彦の瞳は、キラキラと輝いていた。

「そっか〜。頑張ってるんだな」

「いえいえ。僕なんか、まだまだです」

「謙遜すんなつて。頑張ってる自分を認めてやるのも大切だかな」

「・・・はいっ」

「よしっ。そんな光彦に俺からのご褒美な。それっ」

ポントッ!

快斗が軽く足で地面を弾くと、軽い爆発音と共に白鳩が7羽飛び出してきた。口笛で自在に隊列を操り、夜空に神秘的な図面を描き出す。

光彦は夢中になって鳩達を目で追う。その様子を快斗は嬉しそうに見守った。

「光彦。今日は特別にマジシャンの家に招待してやるよ」

「えっ、いいんですか?」

「ああ。青子っていううるさい幼なじみもいるけどよ。俺の母さんが作るシチューは絶品だぜ」

「ですが・・・」

「遠慮すんなって。家は片親だから賑やかな方が嬉しいんだよ」

「じゃあ、よろしくお願いしますね」

「おう。行くか」

快斗は夜空を舞う鳩達に合図を送る。そして鳩達を従えて、二人で黒羽家へと向かうのだった。

一通のファンレターから(前書き)

全部で四話あります。強引な場面が多いのでご注意ください。

一通のファンレターから

真新しい高層ビルが立ち並ぶ都会の一つ。空を見上げて、切り取られたような濁った青しか見られない。

そんな近代都市の模倣のような密集地帯に、快斗ははるばるやって来ていた。

車と人通りが多い交差点の片隅で、懐から一通の手紙を取り出す。そこにはたどたどしい日本語で、快斗の手掛けたマジックの感想と、家では非マジックショーをやって欲しいということが、一生懸命に綴られていた。

「ええっと、これはミンちゃんからだっただな。しかしまたこの国とおもいつきり関わるとは、俺は全然思わなかったなあ」

街灯に体を預けて、手紙の封筒を眺める。ここには怪盗KIDとして、何度かお邪魔したことのある国だった。奇妙な巡り合わせである。また手紙の少女の母子も、追われていた所を助けたことがあった。

その後に母親が再婚して大企業の娘となったようだ。飾りたてられた姿を、何回か大規模なパーティーで見つけている。

一度だけだが、自分のファンだと楽屋へ訪ねてきたこともあった。その時は印象がすっかり変わっていて、化けるもんだなー、と感心したのを覚えている。

「縁ってというのは不思議だよなー。それか地球は狭いというか。まあ、一見してただのファンレターにしては凝ったやつだと思ったけど」

快斗はそう言って辺りを見回す。そろそろ小腹が空いてきていたか

らだった。

ところで、この手紙にはちょっとした暗号が入っている。難易度は決して高くはないが、内容は深刻そうなものだった。

何故、唯のマジシャンに助けを求めたのかは分からない。しかし知ってしまった以上、何か手を打つ必要があった。

そこで新一に声を掛けて協力を仰ぐ。それと共に自らの情報網を駆使して情報を集め、新一の案に快斗が肉付けをして作戦を立てた。

そして今、快斗は手紙の招待を受けるという形で、この国にやって来ている。新一も別口からくる予定だった。

「おっ、あそこなんか美味しそうだな」

快斗はとある店に目をつける。外装はこの都市とは裏腹に汚くボロボロだった。客も全く出入りしていない。かろうじて開いている事は、看板によって分かる程度だ。

しかし周りにあるビルの看板に書かれてある店より、この店の方が美味しいと快斗のカンが告げていた。それに何か情報を手に入れられそうでもある。

その手のカンにはKIDをしていた頃、何度も助けられていた。こういうものまで使いこなしていたので、あの短い期間でなんとかできたのである。快斗はその事を忘れてはいなかった。

「さつてと、何事もなく計画通り行きやーいいんだけど。まっ、なんかあっても、アイツなら自分でなんとかできんべ」

今まで出していた手紙をパチリと消して、快斗は呑気にあくびを一つした。それから相変わらずの人混みの中を、器用に人を避けながらスイスイと移動する。すれ違う人々は快斗のことなど全く視界に入っていないらしく、前のめりの急ぎ足で歩いて行く。

そして快斗は今までいた道路の向こう側へ誰にもぶつからずに渡り

きり、その店の中へと消えていった。

またその時には、既に別人の様子に変化していたのだった。

招待された会場で

その日の夜。快斗はマジシャンとしての腕を披露して、大喝采を浴びていた。

場所は勿論、手紙の女の子が住んでいる大きな屋敷である。落ち着いたインテリアから主の誠実そうな人柄が伺えた。なんにせよ、幸せそうな家庭である。

「はいっ。ここには真つ白なお皿が一枚あります。それをこつすると・・・」

「おいっ、浮いてるぞ!」

「えっ。ちよっと待って!形が変わって・・・」

ポン!

「不思議なことに、白い帽子に早変わり!」

「「おおー!!」」

「おや?何か変ですね?色が変わってきています」

「明るいオレンジ色よ!」?

「触ってもいないぞ。ゆっくりと変化してる・・・」

「おやおや?何かいるようです。あらら、リリーじゃないか!」

「まあ、ウサギだわ!真つ白ね」

「しょうがないなあ。いいかい、君がその色を取ったから。それっ!」

ポン、ポン!

「まあ、色が戻ったわ!」

「それに直ぐに戻る訳ではなく、逆再生をしているようだ!」

「こうして真っ白なお皿は帽子となり、リリーを出してから元に戻ったのでした」

「凄いわね。流石、世界の黒羽だわ」

快斗のマジックに観客達は絶賛の声を上げる。主催者も満足の表情だった。

「君が黒羽君だね。私はミンの父、アンリだ。これは娘のミンだ」

「本日は招待してくださって、本当にありがとうございます」

「いやー、見せてもらったが素晴らしい!娘が君のファンだというのが理解できるよ」

「素晴らしかったです。本当に来てくれたなんて」

「ありがとうございます」

「妻も先程まではいたのですが。気分が優れないということなのでですが素晴らしかったと言っていました」

マジックも一段落付き、パーティーは賑やかさを取り戻す。

興奮した様子の父親を伴いミンが側に近づいてくる。そんな二人に、快斗は会釈を返した。

「ねえ、お父さん。もう少し黒羽様とお話しても?」

「ああ、そうだな。すいませんが、娘の相手をお願いできますかな?」

「喜んで。ミンちゃん、アイスを食べない?」

「うん!行くこう、黒羽様」

そう言って、二人はテーブルの方に行く。

その様子を見送ってから、アンリは怖面の男に何事かを囁いて要人

の方へと歩いていったのだった。

「黒羽様が来てくれるとは思わなかったわ。だって、私……」
「しいー。そのことは秘密だろ？それに『助けて』って書いてくれ
たじゃないか。可愛い女の子の頼みは断れないからね」
「まあ。ふふ」

アイスを片手にパチリとウインクをする快斗の様子に、ミンはようやく笑顔をみせる。その笑顔はあどけなく可愛らしかった。

「黒羽様は本当にいい人なのね。実は助けて欲しいのは母なんです」
「しいーっ。大丈夫。全て上手くいくからね。黒羽快斗のマジック
ショーはまだ終わってはないからね」
「えっ？」

「これから色々起こるよ。でも俺は君が幸せになることしかしない
から。俺はハッピーエンド主義者だからね」
「でも、全ての物語は幸せな結末で終わらないわ」
「そんなことはないよ」

快斗の改まった口調に、ミンは思わずうつ向けしていた顔を上げる。
すると優しい光を宿した目が近くにあった。
はっと息を呑むミンに、快斗はもう一度宣言する。

「俺は君が幸せになることしかしないから」
「うん」

そんな快斗につられるように、ミンは一度深く頷くのだった。

突然の展開

暫くして父親に呼ばれて、ミンは名残惜しそうに快斗の所から去っていった。

快斗はその後ろ姿を見送ってから、皿に取り分けたムースケーキを食べる。その舌触りに満足そうな顔をする姿は、つい先程とは打ってかわって幼い表情だった。

満足が行くまでデザートを摘みボーイから飲み物を受け取る。その時意味深な空気が二人の間に流れたが、気づいたものは誰もいなかった。

「さあつてと、これからどーしよっかな」

ミンを探すためにキョロキョロと辺りを見回す。個人的なパーティーではあるが、なかなか大勢の人々が集まっていた。

幸いなことにミンは直ぐに見つかり、彼女もすぐこちらに気がつく隣にいた女性はミンの母親でリンといった。胸元に輝いている大きなラピスラズリが、一際彼女の美しさを際立たせていた。

実はミンの相談事はこの宝石だった。快斗が昔に盗んだ品物で、正当なルートを経由して元の持ち主であるリンに送ったものだった。その宝石の導きか、今の夫であるアンリと出会い幸せな生活を送っている。しかしそれを狙うものは後を絶たず今回はたまたまミンが知ったのだが、誰も信じてくれなかった。そこで快斗に助けを求めたのだ。

ミンはその人に声をかけてから、快斗の方に手を降り、快斗も振り替えた。その微笑ましい様子にリンも微笑む。

そしてボーイからグラスを受け取った。それを一口、口をつける。そして次の瞬間。

カラン。

乾いた音が辺りに響きわたる。

ミンが視線を戻した瞬間、ふらりとリンの体が傾いた。

ミンの顔が思わずこわばる。

そしてそのままボーイの下に、くたくたと倒れこんでしまったのだった。

「「キヤー!」「」

「何事だね。・・・リン!」

会場は一時、騒然とした。音楽だけが場違いに鳴り続けている。

そんな中、ミンとアンリがリンにとりすがった。しかしとあるボーイが傍らに座り、驚く二人を余所に手慣れた手付きで介抱をし始めた。

「待ってください、アンリさん。それにミンさんも・・・眠っているだけ、か。宝石がないな?・・・ああ、そのあなた。あなたがグラスを渡したんですよね」

「ええ、そうですが?」

「ふむ。そのときは宝石は確かにありましたね・・・まあ、それは後にしましょう。彼女を別室で休ませましょう。動かしますよ? せえのつと」

「妻は?妻をどうしようというのかね!」

「安心してください、アンリさん。彼女は眠らされているだけだ。命に別状はないですよ。ここではあれですので、移動させてもらいます」

「な、なんなんだね。君は!」

「工藤新一。探偵ですよ」

「探偵、さん?」

新一は表情を変えずに淡々と答える。その雰囲気に押されたように、アンリは黙り込んだ。

その様子を確認してから、快斗はそつと辺りを見回した。その目に騒ぎに紛れて、こつそりと抜け出そうとする人物が映った。

「おい、あんた！どこにいくんだ！」

「うるせえっ！若造。痛い目に合いたくなけりや、そこをどきな！」

「そうはいかないんだけどな。おっさん、そのポツケの中身を見せてもらおうか」

「じゃまだ！」

快斗の軽口にじれたのか、その男は快斗に向かって突進してきた。

ミンは青白い顔でそれを見つめる。

しかし。

快斗はそれを軽いステップで交わすと、その男の後ろに回りこみ腕を捻り上げた。

「いででで。ちきしょう！」

「お前は、佐々矢じゃないか。なぜこんなことを！」

アンリが快斗が押さえ込んだ男の顔を見て驚いた声を上げる。ミンは限界がきたのか、しくしくと泣き出してしまふのだった。

魔法が解けるとき

あれから数分後。

とりあえずパーティは再開された。開催者の妻が倒れた騒ぎは、新一から大まかな説明を受けたアンリがうまく取り繕われ、快斗の第二ステージで盛り上がり活気を取り戻す。ステージが終わった後の会場にアンリやミン、新一がいなくなっていることに気づいたものは誰もいなかった。

「おい、なんでオメーがここにいんだよ」

「まあまあ。もともと俺はこの件にカンケーありまくりの人間だし？」

「ちつ。そーゆーことにしといてやるよ」

「それに、ミンちゃんが幸せになれる結末を用意しなきゃいけないしな。予定通りに頼むぜ」

「・・・ああ」

アンリたちが快斗が予め用意した警察に事情を聞かれている部屋の前で、快斗と新一は小声で話をする。快斗の軽口の中に紛れた本音に気づき、新一はこの場を快斗に任せることに決めていたのだった。

「お二人とも、ご協力に感謝するよ。佐々矢はわれわれが預からせてもらった」

「ええ、ご苦労様です」

「まあ、これで帰らせてもらうよ。佐々矢は他にもいろいろとやっていたようだからね。ここだけの話だが、匿名のタレコミが複数寄せられてねえ。逮捕状を請求していたところだったのさ」

「はあ、そうですか。タイミングがいいですねえ」

「そうだな。まあ、なんにせよ、めでたしめでたしと言うところか

な

「お疲れ様です、本当に」

「いやいや。それじゃあね、二人とも」

明らかに一枚かんでいそうな快斗だったが、そんなことをおくびにも出さずに愛想よく笑う。事の真相をなんとなく察した新一もそれにならった。こういうことは知らないふりが一番なのだ。

上機嫌で帰っていったのを見送ってから、二人はドアをくぐる。中には硬い表情のアンリと、泣きすぎて目が真っ赤になったミンがそれぞれソファアに腰掛けていた。

「黒羽君、か。ざまはないなあ、これでは。奴は佐々矢と言って、妻のボディガードを頼んでいたんだよ。妻が怯えているのは知っていてね。あの時も奴に妻のことを頼んでいたのさ」

「ああ、そうなんですか」

「しかし、幸福のラピスラズリとはよく言ったものさ。確かに妻とめぐり合わせてくれた物ではあるが、同時にさまざまな欲も運んできてしまうのだからね」

「お父様・・・」

ミンが俯いてまたぼろりと涙をこぼす。快斗が傍に行き、その涙をそっと拭ってやった。

「そういわないでください、アンリさん。リンさんの命が助かったのもまた、その石のおかげなんですから」

「どういうことだね？」

「実は俺がここに来たのはミンちゃんに呼ばれたからなんです。あの石には簡単な仕掛けが施されています。それは願い事を叶えてくれる魔法使いが必要な人との縁を取り持つてくれる。一度だけ使える、ね」

「そんな御伽噺みたいなこと・・・」

「うん。私、お母様からそのことを聞いたことがあって」

呆然としたアンリに快斗は重ねて言った。

「この世に奇跡はあるんですよ。こんな風に、ね」

パチン、と乾いた音が響く。

はっと目を向けると、さっきまでのことが幻だったかのように二人の姿は消えてしまった。慌ててパーティ会場に戻ると快斗達の姿は無く、招待された人々も知らないという。

先ほどまでぐったりとしていた様子のリンもぴんぴんしていて、アンリとミンは不思議そうに顔を見合わせたのだった。

じゃれあい

快斗は久しぶりに青子の家のリビングにやって来ていた。

マジックショーをこなし、次の目的地に行く途中に自分の地元を通ることを知った。そこでふらりと立ち寄ってみると実家には母がいたが、これから友人が来るので邪魔だといわれ追い出されてしまう。どうしようかと思っているとタイミングよく青子が現れ、青子に招かれるままお隣さんの家へとはいっていったのだった。

コトリ、と湯飲みを快斗の前に置き、青子が自分の椅子に腰かける。しばらくぶりだったが変わりがなかった。

「親父さんは？」

「急に大きな事件があつて、呼び出しだよ。K I Dに関するタレコミがあつたんだって」

「今回もどうなんだろうな。また、嫌がらせっぽいけど」

「うん、お父さんも『K I Dを名乗るとは不届き千万！早々にひっ捕らえてやるっ』ってカンカンだったよ」

まさか元怪盗K I Dは自分です、とも言えず快斗はその発言になんともいえない気持ちがある。そのくらい中森のK I Dに対する情熱は凄まじく、今でも衰えていないということを改めて感じさせていた。

引退宣言はしたんだけどなーと思っていると、青子はクスリと笑いを漏らす。

父親の剣幕はかなりのものだったと思ひ出したのだろう。青子の様子に快斗は軽く肩をすくめてみせた。

「まったく、ガキなんだから。恋のひとつでも経験してんのか？」

「こい、かー。その人を見て、ほわんって気持ちになるのも、恋な

のかなあ」

その時の青子の表情が大人っぽく見え、快斗ははっとした気持ちになる。いつまでも子供ではない、と言う事なのだろう。急に感じた寂しさをまぎらわせるために、青子をからかう。

「なーんて顔、してんだよ。ゆっくり感じていけばいいだろ？あ、青子には早かったか？」

「べ、別に、そんなことないもん。青子はもう、大人だもん」

「ぶぶぶ。自分そう言うのは、まだまだお子様って看板を背負っているようなもんだぜ」

「もうっ。そんなこと言っていると、マコさんに嫌われちゃうんだからー！」

「な、マコちゃんをここで出すなよな」

「へへ〜ん。マコさんは青子の味方だもん」

なんだか悔しくなって、青子の頭をぐしゃぐしゃに撫でる。青子はキヤーキヤー言いながらも、されるがままだ。

「これからどっか行くのか？」

「うん。恵子達からカラオケに誘われてるの」

「わけーなー、オメーらもよう」

「快斗、おじさんくさーい！もうちょっと白馬くんを見習いなよ」

「どーという意味だよ、おい」

聞き捨てならない台詞を言われ、快斗は青子に聞く。青子はそれに対して、なんてことなさそうに言った。

「だって白馬くんも一緒だよ、カラオケ」

「アイツがカラオケ？」

「うん。とっても上手なんだよ！ビートルズとかさ」

無邪気な青子の様子を知り目に、快斗は驚いた顔をした。

白馬とカラオケ。快斗にとって、イコールで結びつかないものである。しかも青子の口調からすると、結構一緒に言っていたような雰囲気だ。

快斗が似合わねえ、と失礼なことを考えているとは思わずに、青子はニコニコとお茶を飲んだのだった。

ちよぴりの悪戯心

寒さでかじかんだ手を擦りあわせながら、真は快斗との待ち合わせ場所の近くにやって来ていた。

快斗はすでについていて、すぐに見つけられた。しかし真は直ぐに駆け寄らずこっそり様子を伺うことにした。少しの悪戯心はその考えを後押しする。

そこで道路を挟んで建っている電柱の影からそっと覗いた。快斗は人を見つけるのが上手いので、見つからないようにこっそりと観察するためだ。

「快くん、今日は真っ白！」

真は快斗の服装を見て一言、そっと呟いた。

人待ち顔で目印の像に寄りかかっている快斗は、自然に町に溶け込んでいた。灰色の空を見つめる顔は俳優顔負けの憂い顔だ。

快斗はたまにこういうような顔をする。真はその顔を見るたびに、胸がギュツとなるのだった。あまりにも普段の快斗と違い過ぎて切なくなるからだ。しかし快斗は真の視線に気が付くと、さっきまでの雰囲気も消し去ってしまう。まるで幻だったかのように。

そのことが真の胸に小さなしこりを残していた。快斗の本質は、その静かな横顔だと感じるからだ。

今もその顔を見ながら真はため息をついた。これで声をかけたら、また明るい快斗になることは分かりきっていた。

「快くん、いつも何をしながら待ってるんだらう？」

真がそう呟くと、まるでその言葉が聞こえたかのように、快斗の雰

困気がガラリと変化した。一瞬、覗いていたのがばれたのかと、真は肩を竦める。

しかしそうではないようで、いつのまにかスティックを手に持っていた。何事かと近くを通りかかった買物客や、待ち人顔の人々が注目する。快斗は臆することなく優雅に一礼した。

一体どうしたというのだろうか。

興味津々、快斗の方を伺えば、こちらに向かってパチッとウインクが一つ飛んできた。

「ば、ばれてる？」

真は思わず呟くが、快斗からはそれ以外のアクションがない。

真のそんな気持ちにお構いなしに、快斗は簡単なマジックショーを始めるのだった。

銀鳩が舞い、花が現れ、スティックが変幻自在に変化する。ボールが増えたり減ったりした後、トランプまで取り出してみせた。

即興とは思えない程の出来映えに観客達は惜しみ無い拍手を送る。そんな観客に優雅に一礼をした後、ポンっという音を残して快斗は消えてみせた。ふわりと舞った白い花びらがひらひらと観客達に降り注ぐ。観客達は姿を消したマジシャンに惜しみ無い拍手を送ったのだった。

一方の真といえば、思わず見とれてしまい、ぼんやりと余韻に浸っていた。その肩をトントンと叩かれる。振り向くと快斗がニコニコと立っていた。

「か、快くん！」

「満足いただけただけかな？マコちゃん」

「いつから気づいてたの！」

「えへへ。それは、ひ・み・つ。それよりどうだった？格好良かっただろ？」

したり顔で笑う快斗に、最初は慌てていた真も思わず笑顔を見せる。ギョツと快斗の腕にしがみつくと、快斗の耳こっそりと囁いた。

それはマジシャンが欲しかった、最高の誉め言葉。

思い立ったが吉日

肌寒いある休日。

蘭がお昼の予定を考えていると新一から連絡があり、急に新一の家に行くことになった。突然の呼び出しに驚きつつも蘭は承諾したのだった。

というのも、新一に会うのは久しぶりだからだ。その理由は数日前まで警察と共に地方の殺人事件を取り扱っていて、新一とは連絡が取れなかったというものだ。

事件を追う新一は素敵だしカッコいい。だがこつちのことも考えてほしいと思うのも本心で。その気持ちに板ばさみになりながらも、新一と顔を合わせる機会を蘭は大切に思っているのだった。

というわけで蘭は工藤家の門の前にやって来ていた。

急な連絡に悪い予感が頭を過ぎる。頭を振ってからインターホンを鳴らすと、出てきたのは快斗の方だった。蘭の訪問に快斗は驚いたようすはない。どうやら事前に知らされていたらしかった。

「こんにちは。黒羽くんも来てたんだね。新一に呼ばれたの？」

「蘭ちゃん。うん、こんにちは。新一っていうよりも、俺はマコちやんに言われてね」

「そうなの？」

「そ。まあ、こんなところじゃアレだから中に行こう」

「うん。お邪魔します」

快斗と一緒にリビングに入ると、ひょっこりと真の顔がキッチンに続くドアから覗いた。エプロンを身に着けている。

「あ、蘭ちゃん。いらっしやーい。もう少しで出来るから待っててね！」

「マコ姉、久しぶりだね。ところで、何の話なの？」

「え、新一から聞いてないの？」

真は不思議そうな顔をして快斗に問うような視線を向ける。快斗はそうみたい、と肩をすくめて見せた。

「もー、肝心なところで言葉が足りないんだから。誰に似たのかしら、まったく」

「まあまあ」

「えーっと、それで？今日は何かあるんですか？」

「ああ、それはね・・・」

真が蘭の言葉に返事をしかけたとき、新一の大声が聞こえてきた。なんだか切羽詰っているようだ。

「あー、もう、あの子はー！ちょっと行ってくるね、快くん。蘭ちゃん」

「うん、りょーかいつ。蘭ちゃんには俺から説明しておこうか？」

「そうね、お願い！」

真はそういうと、まったく分かっていない蘭をおいてキッチンへと引っ込んだ。バタバタと慌てたような音の合間に、新一を叱り飛ばす真の声が聞こえてくる。

それまで呆気にとられていた蘭は、その後に聞こえてきた新一の不満そうな声に思わず噴出してしまった。その声は完全にすねていたからだ。

「もう、よくわかんないなあ」

「そーだよねえ」

蘭の言葉に快斗も同情するように相槌を打つ。なんとなく気の抜けた気分でリビングのソファーに腰掛けた。

「で？今日はなにかあるの？」

「うん、そだね……。話としては、新一のお土産を食べようってことかな？」

「何それ？」

「ほら、新一、昨日まで北海道まで行ってたじゃん？そこであの殺人事件以外にも事件に巻き込まれたらしくって。そのとき知り合った人にかなり気に入られたらしくて。それで、お礼って言って、大量のカニを送ってきて。一人じゃ食べきれないからって、俺らに話が回ってきたんだ」

「そっか。もう、一言ぐらい言ってくればいいのに」

そう零した蘭の言葉に、返事が返ってくる。

「思い立ったが吉日って言葉があるだろ？」

声のしたほうに顔を向けると、大きな器を持った新一が立っていたのだった。

のどかな昼下がり

春の足音が聞こえてきそうな暖かい日。

マジックシヨ一の為にやってきたとある土地の川沿いの道を、快斗はのんびり歩いていった。

この後寺井との打ち合わせがあるが、何も急ぐ必要のないものだった。気兼ねなくのんびりできる時間。

足元には気の早いのか、ホトケノザやナズナなどお馴染みの草花の色が目に入ってきていた。

「いい天気だな。小春日和って感じ？長閑だしな」

んー、と思いつきり伸びをする空の青さに目を細める。飛行機雲が一筋、快斗の真上の空を横切っていく。

青と白のコントラスト。

少々暢気すぎる光景に、自然と大あくびがひとつ出た。

「ふわあああ、眠くなってくるなあ」

目じりに浮かんだ涙を擦り、快斗は空を見上げる。

「うーん、あれをこーやってそーいって、ここうで・・・ん、これをああやってもいいな」

飛行機雲が描いた軌道に、独自の考え方を加えていく。あれこれいじくり回して、一通り頭の中で思い描いたとおりの物が出来ると満足そうに頷いた。

「うっし、オツケ。即興にはなかなかいいできかも。そうだ、

名探偵に送ってやる。これが解けるかってな」

ナイスアイデアとばかりに、快斗はししし、といたずらっ子の笑みで携帯を取り出す。

そこに考え付いたパズルを入力し、新一宛にメールで送信した。もちろん挑発する言葉も忘れてはいけない。それがいいスパイスとなつて、彼にいい刺激となるからだ。

”メールを送信しました”の文字に満足そうな笑みが零れる。今頃どんな顔をしてこのパズルに挑んでいるのかを想像するだけで、なかなかの時間つぶしになるのは間違いないかった。

そう思いつつ快斗が顔を上げると、真っ白な蝶が目の端に移った。気になつて視線を向けると、快斗を道案内するかのようにつ、目の前を通り過ぎる。

「どこいくんだろーな？」

そんな快斗の言葉が聞こえているのか、いないのか。

その蝶はひらり、ひらりと誘い込むかのように飛んでいく。丁度快斗が行こうとしていた道とは正反対の方向だった。

「んー、気になるなー。でもなー、ジイちゃんは遅れたらうるさいんだよなー。でも、たいしたことじゃねーしなー」

そう呟きつつも足は勝手に白い蝶を追いかけている。

言い訳を口に出しつつも、やはり気になっているのだろう。

「うん、まあ、いつか。ジイちゃん、もうちつと待っていてくれよな」

両手をパンパンと合わせて目的地の方角に頭を下げると、キョロキョロと白い蝶の行方を捜す。

先ほどの蝶は快斗の動作が終わるのを待っていたかのように、ひらりと目の前に現れる。

「それじゃー、案内よろしくな」

快斗が気さくに声をかけると、その蝶は分かっているのかいないのか、ふわりふわりと羽ばたいて先に進む。

その様子に満足そうに頷くと、快斗はポケットに手を突っ込みのんびりとその後についていくのだった。

気分の良い日

ふん、ふん、ふふーん。
ふん、ふん、ふふーん。

快斗は足で拍子をとりながら、機嫌良くパソコンの前に座っていた。先ほどからなんとなく気分が乗っている。

そのため細かい事務処理などをいつも以上の速さで片付け、今はネットの海を徘徊しているのだった。

そんな時に興味深いデータが目飛び込んでくる。その内容を読み進めていくうちに、自分が次第に興奮してくるのが分かったきた。そして今や快斗のテンションは一気にマックスへとかけ上がっていた。それに合わせるかのように、鼻歌もやたらと跳ねるようなノリのものへと変化していくのがよく分かる。

そもそもどんなときでも楽しむのが快斗の基本的思考だが、たまにこういう気分のムラが現れるのがつねだった。

即ち理由も無くやたらとウキウキした気分になるとか。果てしなくドン底のときとか。

今は言わずもがな。前者であることは疑うこともなく事実のことだった。

快斗の操作によって、パソコンの画面はかなりの速さでスクロールされている。

文字はつぶれて見えなくならない程度の大きさだが、それがびっしりと書き込まれていた。所々改行はされているが、それは書き込んだ本人の気分で行われている。そのためなにも知らない人が見れば、目がチカチカしてうんざりするような書かれ方だった。

しかし快斗には手にとるように内容が分かる。そこら辺はやはり頭

の出来が違うのだろう。一定の速さで流れていく文字を目で追いな
がらマウスを力チ力チと動かして、頭の中で考えを整理していく。
とうとう最後まで読み終え、最終チェックとして頭の中にある内容
に変なものがないかを十分に吟味を重ねる。それに対して自分でオ
ツケーを出す画面から目を離す。

どうやらかなり集中していたようだった。妙に肩が張っているのが
分かった。一息つくために画面をそのままにして大きく伸びをした。
ついでに腕を軽くストレッチをする。椅子がギリりと軋む音が聞こ
えた。

「ん〜っ。なかなか興味深い考察を書いてんな、こいつ。あの規則
性をああやって解釈しようとするなんて。着眼点からして独創的だ
し。むしろ変わり者というか、捻くれ者というか」

首をポキポキ鳴らして、背もたれに寄りかかる。

そして何気なく視線を投げた先にあったコップに手を伸ばした。中
に入っていた気の抜けたコーラを一気に飲み干す。

少しは気分が落ち着くかと思ったが、まだ胸の鼓動は治まっていな
い。しばらく目を閉じて自分の鼓動を聴いていたが、急に椅子から
立ち上がった。

「ん〜、良いこと思いついたな！へへ〜。今、暇そうな新一と、
ついでにこつちに来てる服部を巻き込んであれをやるーっ。白馬
の奴は、残念なことにロンドンに行っちまってるからな。我ながら
ナイスアイディアじゃん！」

そう言って快斗はニヤリと笑う。自分の思い付きに拍手を送りたく
なってくる。

この気分が最高に合うのは、取って置きの謎に適度な緊張感が必要
で。しかもそれを味合わせしてくれる人がうまい具合に身近にいる。

これは神様の思し召しに違いないと確信する快斗であった。

ふん、ふん、ふふーん。
ふん、ふん、ふふーん。

先ほどの鼻歌のリズムに合わせてるように、体全体でリズムを取りながらドアへと向かう。

片手にはさっき飲み干したコーラの入っていたコップ。
気分は上々。思いつきも最高のもの。

バタン。

大きな音を立ててドアが閉まる。

しばらくしてから。ドアの向こうから新一達の迷惑そうで、だけど隠せないほどの興奮に彩られた声と、快斗の楽しそうな、面白がるような声が聞こえてくるのはご愛好である。

いつもの工藤邸

今日も事件に巻き込まれ、犯人を突き止め、警視庁から自宅に帰る道を辿る新一。

頭上にはきれいな星が瞬いているが、それに気がつく余裕もないほどに疲れきっていた。

警察のお世話になる？のはいつものことではあったが、今回はその数日前から個人的な依頼を数件引き受けていたため、いつもより体が重い。犯人確保のために足に無理をさせたのが原因なのか、動くのが億劫なほど疲労感が半端無い。

新一はよろよろしながら、珍しく真つ暗な家に帰り着いた。

「・・・ただいま。って、そうか、誰もいねーのか」

しーんと静まり返った工藤邸に違和感を感じる新一。

快斗と出会ってから、この家もすっかり明るくなり、人の集まるところになっていた。新一が帰ってくるころには大体、快斗がいて、ヤツがいなときは姉が一度は顔を出していた。

いつもそのことに口では文句を言っていたが、内心では嬉しく感じているのだろう。帰ってきたときに自身の鍵でドアを開けなが思う。そして暗い玄関へ入り、辺りを見回す。

やっぱり、一人ではこの家は広すぎると感じる。

ガラんとした廊下がいつにもまして、寂しげに見えた。

「さて、メシでも食うか」

そんな気持ちを自覚しているのか、無意識のうちに独り言を発する新一。

心なしか先ほどよりも重く感じる体でゆっくりとリビングへ歩いて

いくと、何かにつまずいた。

「っと？」

足先で突つくと、なんだかやわらかい。

パチリと電灯をつけると、ステージ栄えしそうなスーツに身を包んだ快斗が転がっていた。

顔を覗き込むと、平和そうな寝顔をしている。

「……うーん、むにゃむにゃ……」

「……なんだかなあ」

思わず気の抜けた声が出る。

重く押し掛かっていたマイナス思考がどこかへ消えていく。

快斗がこの家に入り込んでいるのはいつものことで、もう驚かなくなっただけふんと経つ。その当たり前が当たり前ではなくて、でも目の前に当たり前のようにある。

それが新一にはひどく不思議に思えた。

「へーわそうな、顔」

そう思っただけなんだか快斗の寝顔に悪戯心が湧き上がってきた。

そして新一は躊躇わずに、実行する。

「うりゃー!!」

「っ何!! って、いったー!!」

間一髪。新一の蹴りをほとんど紙一重で交わす。

しかし飛び下がった後ろにあったドアの取っ手に頭をぶつける快斗。それを間近で見た新一は、避けられたことに悔しさを感じつつも、

あまりの快斗の間抜けっぷりに爆笑した。

「っははは、何やってんだよオメー」

「むー。人が気持ちよく寝てるところを・・・なにしゃがる、新一」

「バー口、変なところで寝てんのが悪りいんだよ」

「何だったえ！！ゆるさねえぞ、新一！」

「って、おい待て。やめろって！！」

「だれがやめるかってんだ、覚悟！！」

こうして新一と快斗の追いかけてこが始まる。

それはいつもの日常であり、これから始まる日常でもあった。

いつもの工藤邸（後書き）

これでこのお話は終了です。

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5764h/>

マジシャンの日常

2011年2月26日01時32分発行